

どの 殿 村 遺 跡
おお 大 荒 神 の 塚 古 墳
おお 大 荒 神 の 塚 古 墳

2003年3月

長野県飯田市教育委員会

との 殿 村 遺 跡
おお 大 荒 神 の 塚 古 墳
こう じん つか こ ふん

2003年3月

長野県飯田市教育委員会



船形埴輪



家形埴輪 1

序

飯田市川路地区は飯田市の南部に位置しています。現在JR飯田線・一般国道151号が通過しており、伊那谷の南玄関口ともいえる場所です。諏訪湖に源を発し伊那谷を南下してきた天竜川は、名勝天竜峡の峡谷によって急激に川幅を狭められます。そのため、天竜川はたびたび氾濫を起こし、川路地区はその度に大きな被害を受けてきました。川路地区の歴史は、まさに天竜川との闘いの歴史ともいえます。今でも「三六災」と言い伝えられる昭和36年の被害は特に大きく、当時の川路地区の中心街がほとんど水没し、住民は高台への移住を余儀なくされました。

今次発掘調査の原因となりました治水対策事業は、被害の大きかった昭和36年の災害で水没した低地に盛土をして、再び洪水の被害を受けることがないように工事を行うものです。天竜川の治水対策は、幾たびも洪水に見舞われ田畑や財産を失ったり、あるいは生命の危機に見舞われたりした当地域住民にとって大きな課題でした。しかし、川路地区の低地には埋蔵文化財包蔵地が幾つも分布しており、盛土区域における埋蔵文化財をどのように扱うべきか大きな問題となりました。そこで、関係する機関と協議を続け、県教育委員会・文化庁の指導を受け、この度の発掘調査を実施することとなりました。

今日まで伝わる多くの文化財は、先人たちのたゆみない歩みを私たちに伝える様々な証であり、大切な共有財産です。そのため、私たちはこれら文化財をできる限りそのままの姿で後世に伝える責任を負っています。現在、飯田市では治水対策事業のみならず、道路の新設・改良または大型店舗進出などといった埋蔵文化財に重大な影響を及ぼす開発も少なくありません。しかし、誰もが豊かに、より安全に暮らしていく権利を有しており、私たちはその対応にいつも苦慮しているところです。幸い今日、地域による生涯学習活動の中でも発掘調査により得られた資料が一般に公開されるが増え、埋蔵文化財に対する関心や理解が深まってきております。発掘調査による記録保存というのは文化財保護の立場からは最善の策とはいえませんが、私たちはその資料を広く市民の皆さんに還元する中で更なる文化財保護の取り組みを進めていきたいと思えます。

殿村遺跡の発掘調査では、人が乗った船形埴輪や華麗な装飾が施された家形埴輪が出土しました。内陸では稀有の準構造船をかたどったものということで、衆目を集めたのは記憶に新しいところです。本報告書が、多くの皆さんに有効に活用されることを願う次第です。

平成9年度から始まりました治水対策事業に先立つ川路地区の発掘調査も6年を経過し、ようやく完了のはこびとなりました。その間、文化財保護の本旨をご理解いただき、多大なご協力を賜りました関係機関ならびに地元住民の皆様深く感謝申し上げます。

平成15年3月

長野県飯田市教育委員会
教育長 富田 泰 啓

例 言

1. 本書は天竜川治水対策事業（川路地区）に先立って実施された、長野県飯田市川路5区所在の殿村遺跡・大荒神の塚古墳の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は飯田市治水対策部の委託を受け、飯田市教育委員会が直営実施した。
3. 調査は、平成12年度に現地作業、同13・14年度に整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 調査実施にあたり基準点測量を株式会社ジャステックに、遺物写真撮影を西大寺フォトに、それぞれ委託実施した。なお、調査区の設定については『辻前遺跡』（飯田市教委、2003a）に準拠し、今回の調査地点はMC-04 13-3内に位置する。
5. 発掘作業・整理作業にあたり、遺跡略号としてTNMを一貫して用いた。
6. 本報告書では以下の遺構略号を使用している。

SB-竪穴住居址・竪穴	SD-溝址・溝状址	SI-集石
SK-土坑	SM-周溝墓	SX-その他の遺構
7. 本書の記載順は遺構別を優先した。
8. 土層の色調については、『新版標準土色帖』の表示に基づく土色計（第一合成株式会社製、SCR-1）を用い、マンセル表示で示した。
9. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により馬場保之が行った。
10. 本書の執筆は第Ⅰ～Ⅲ・Ⅵ章は馬場が、第Ⅳ章は國學院大學大学院博士課程後期 片山祐介・馬場が、第Ⅴ章はバリノ・サーヴェイ株式会社が、第Ⅶ章は小林正春・馬場がそれぞれ行い、編集・総括は馬場が行った。
11. 本書の遺構図の中に記した数字は、検出面および遺構床面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
12. 本書に掲載した遺構・遺物の記述は『辻前遺跡』に、石器実測図の表現は『美女遺跡』（飯田市教委1998a）に準拠した。なお、節理面は斜線で示した。
13. 本書に関連した出土遺物および図面・写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館・飯田市上郷考古博物館に保管している。

本文目次

序

例言

目次

第I章 経過	1	(5) 溝址・溝状址	29
第1節 調査に至るまでの経過	1	(6) 集石	29
第2節 調査の経過	1	(7) その他	35
第3節 調査組織	2	(8) 遺構外出土遺物	38
第II章 遺跡の環境	4	第IV章 S B01・S B07出土の埴輪について	46
第1節 自然環境	4	第V章 飯田市周辺天竜川流域出土埴輪の	
第2節 歴史環境	4	胎土分析	53
第III章 調査結果	10	第VI章 大荒神の塚古墳	58
第1節 微地形	10	第VII章 総括	64
第2節 基本層序	10	第1節 S B01・S B07出土の埴輪について	64
第3節 遺構と遺物	13	第2節 S B01・S B07の性格について	66
(1) 竪穴住居址	13	第3節 各時代の概観	67
(2) 竪穴	20	引用参考文献	69
(3) 円形周溝墓	22	報告書抄録	136
(4) 土坑	29		

挿図目次

挿図1 調査遺跡および周辺遺跡位置図	5	挿図11 S B01人物出土状況	20
挿図2 調査地点位置図	8	挿図12 S B01朝顔形埴輪等出土状況	21
挿図3 基準メッシュ図区画調査位置	9	挿図13 S B01・S B07家形埴輪1	
挿図4 基本層序	10	出土状況	23
挿図5 遺構全体図	11	挿図14 S B01・S B07家形埴輪1	
挿図6 S B06、S B03	14	接合状況	25
挿図7 S B04、S B05	16	挿図15 S M01	27
挿図8 S B07～S B09	17	挿図16 S K01～S K05・S K07～S K09	
挿図9 S B01・同埴輪出土状況	18	・S K11・S K12	30
挿図10 S B01船形埴輪・家形埴輪2		挿図17 S K10・S K13・S K15～S K20	31
出土状況	19	挿図18 S K21～S K28	32

挿図19	SK29・SK30・S101・S102 ・SD03・SD04・SD06 ……33	挿図23	硬化面Ⅰ～Ⅲ ……37
挿図20	SD05・SD07～SD13 ……34	挿図24～30	周辺柱穴平面図(1)～(7)…39～45
挿図21	SX01～SX03 ……35	挿図31	胎土重鉱物組成 ……55
挿図22	SX01・SX02・SK17 ～SK21関連図 ……36	挿図32	大荒神の塚古墳現況図 ……59
		挿図33	大荒神の塚古墳トレンチ位置図 ……61
		挿図34	大荒神の塚古墳周溝 ……63

図版目次

第1図	SB06、SB03～SB05、 SB08出土石器 ……87	第9図	遺構外出土石器(3) ……95
第2図	SB09、SM01、SK01、SK14、 SK15、SK17、SK18、SK21、 SK23、SD06、SD07、SD14 SX01 出土遺物 ……88	第10図	遺構外出土石器(4) ……96
第3図	SX01、SX02、遺構外出土 遺物 ……89	第11図	遺構外出土石器(5)、SB09、SX01、 SX03、AW39P1、AR35P1、 遺構外出土鉄製品 ……97
第4図	遺構外出土遺物 ……90	第12図	大荒神の塚古墳出土遺物 ……98
第5図	遺構外出土遺物、SB04、SB05、 SB08、SB01出土石器 ……91	第13図	船形埴輪 ……99
第6図	SM01、SK21、SD01、SD05、 SD07、SD12、BK42P1 出土石器 ……92	第14図	人物 ……101
第7図	遺構外出土石器(1) ……93	第15図	かさ状製品・台 ……103
第8図	遺構外出土石器(2) ……94	第16図	家形埴輪1(1) ……104
		第17図	家形埴輪1(2) ……105
		第18図	家形埴輪1(3) ……107
		第19図	家形埴輪1(4) ……109
		第20図	家形埴輪1(5)・家形埴輪3 ……110
		第21図	家形埴輪2 ……111

表目次

第1表	重鉱物分析結果 ……56	第11～16表	遺構属性表(1)～(6) 79～84
第2～10表	土層注記表(1)～(9) 70～78	第17・18表	石器観察表(1)・(2) 85・86

写真図版目次

巻頭写真1 船形埴輪

巻頭写真2 家形埴輪1

図版1	殿村遺跡遠景 遺構分布状況	113
図版2	南半全景 北半全景	114
図版3	S B03 S B04 S B05	115
図版4	S B08 S B09 S M01	116
図版5	S B01 同土層堆積状況 同遺物出土状況	117
図版6	S B01遺物出土状況	118
図版7	S B07 同遺物出土状況	119
図版8	S K04 S K05 S K08	120
図版9	S K09 S K10 S K21	121
図版10	S D05 S X01	122
図版11	S X01-1・2 S I01 大荒神の塚古墳	123
図版12	大荒神の塚古墳 同石積状況 同3トレンチ	124
図版13	大荒神の塚古墳葺石転落状況 同周溝	125
図版14	重機作業風景 発掘作業風景 S B01調査風景	126
図版15	S B06 S B03	127
図版16	S B04 S B05	128
図版17	S B08 船形埴輪	129
図版18	船形埴輪船底部・かさ状製品 同台部	130
図版19	人物 家形埴輪1	131
図版20	家形埴輪1	132
図版21	家形埴輪1 朝顔形埴輪 家形埴輪2	133
図版22	S X01 遺構外	134
図版23	胎土中の重鉱物	135

第I章 経過

第1節 調査に至るまでの経過

飯田市川路地区は伊那盆地の最南端に位置し(挿図1)、下流には天竜川狭窄部天竜峡のある地域である。このため当地域の天竜川氾濫原・低位段丘は、対岸の飯田市龍江地区と共に、昭和36年の水害(通称『三六災』)をはじめ過去幾度となく洪水に見舞われており、その対策が大きな課題となっていた。

そこで当該地では、『三六災』の被害状況を勘案して「天竜川治水対策事業」を行うこととなった。この事業は前述した『三六災』時に浸水した高さまで盛土をするものであるが、事業対象地には多くの埋蔵文化財包蔵地が存在する。そのため、その保護について長野県教育委員会文化課・飯田市治水対策部・飯田市教育委員会の三者によって昭和61年10月16日に最初の保護協議を行い、以後数回に亘る協議を経て、平成4年度に龍江地区において事業地内の遺跡の状況を把握するために試掘調査を行った。

そして平成5年3月9日に行われた保護協議及び同年5月6日の文化庁の指導を受けて、平成5年5月19日付、5教文第7-21号による県教育委員会からの回答で、同事業に係わる埋蔵文化財の保護について下記の保護措置が提示された。

- ・原則として試掘調査により把握された遺跡確認面及び遺物包含層から2mを越える盛土の範囲は発掘調査を行い、記録保存を計る。
- ・2m以下の盛土の範囲についてはトレンチによる確認調査を実施し、遺跡の状況を把握し地下遺構の保存を講ずると共に、その判断された内容を記録保存し、後世に伝える。

これらの回答に基づき、まず天竜川左岸の龍江地区から発掘調査及び試掘調査が行われることになった。平成5年12月15日から平成6年4月21日まで龍江城遺跡、平成6年1月21日から同年2月26日まで龍江阿高遺跡、平成6年2月9日から平成7年7月19日まで田中下遺跡、平成6年10月25日から平成7年9月11日まで細新遺跡と、龍江地区内の発掘調査が実施された。

平成7年度から竜丘・川路地区の調査に着手した。7年度から8年度に亘って金山下水田址・久保田遺跡・留々女遺跡・殿村遺跡・富岡水田址の各遺跡について試掘調査を実施し、遺跡の状況把握を行った。その後、平成9年6月9日～11月30日に井戸下遺跡(富岡水田址)、9年12月11日～12年2月28日に久保田遺跡・正清寺古墳・鯨魔王塚古墳の、9年10月1日～10年10月26日に月の木遺跡・月の木古墳群の、平成10年11月5日～平成11年12月10日に辻前遺跡の、平成10年9月28日～11年12月22日に留々女遺跡の本発掘調査を実施した。

第2節 調査の経過

平成10年6月に試掘調査を実施した。当時の土地利用状況の中で試掘調査が及ばない部分があったが、試掘調査結果にそれを含めた形で殿村遺跡の調査対象範囲が把握された。諸協議・治水対策事業本体の工程との調整を経て、本発掘調査に着手した。

平成12年4月17日、重機を入れて、調査対象範囲のうち試掘調査未実施部分の試掘を行い、続いて表土剥ぎを行った。5月9日より作業員を入れて遺構検出作業を行ない、確認された遺構から順次掘り下げ、精査した。そして、全景写真・個別遺構写真の撮影、実測等の作業を行い、現地での作業を9月4日終了した。なお、基準点設置・空中写真撮影および大荒神の塚古墳の墳丘測量を株式会社ジャステックに、出土埴輪の胎土に関する自然科学的な分析調査をパリオ・サーヴェイ株式会社に委託実施した。

その後、平成14年度にかけて飯田市考古資料館において、出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業、遺物の実測・拓本とり、遺構図等の作成・トレース作業、写真類の整理、版組み等整理作業を行い、報告書作成作業にあたった。なお、平成14年度に遺物写真撮影を西大寺フォトに委託実施した。

第3節 調査組織

(1) 調査団

調査主体者 飯田市教育委員会 教育長 小林恭之助（平成3年12月～平成11年12月）
富田泰啓（平成11年12月～）

調査担当者 馬場保之・伊藤尚志
藤原直人（財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センターより派遣、平成12年度）

調査員 佐々木嘉和・吉川 豊・山下誠一・渋谷恵美子・吉川金利・下平博行・福澤好晃
坂井勇雄・羽生俊郎

作業員 伊藤和恵・伊藤孝人・伊東裕子・井上恵真・尾曾ちぶき・北澤一嘉・熊崎三代吉
佐々木一平・斯波幸枝・清水三郎・清水恒子・代田和登・杉山春樹・竹村和子
竹村定満・中野満里子・中野充夫・中村地香子・野牧 隆・服部光男・松下成司
松下博子・三浦照夫・森山昭吉
新井ゆり子・池田幸子・伊東裕子・金井照子・唐沢古千代・木下早苗・木下玲子
小池千津子・小平まなみ・小林千枝・斎藤徳子・佐々木真奈美・佐藤知代子
関島真由美・高木純子・橋 千賀子・筒井千恵子・中沢温子・中田 恵・中平けい子
林 勢紀子・林 ひとみ・原 昭子・樋本宣子・平栗陽子・福沢育子・牧内喜久子
牧内八代・松下博子・松本恭子・三浦厚子・宮内真理子・森藤美知子・森山律子
吉川悦子・吉川紀美子

(2) 指導

文化庁、奈良国立文化財研究所（独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所）、同志社大学、東北芸術工科大学、埼玉県立さきたま資料館、長野県教育委員会、財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター、松阪市文化財センター、辰巳和弘（同志社大学）、宮本長二郎（東北芸術工科大学）、若松良一（埼玉県立さきたま資料館）、福田哲也（松阪市文化財センター）

(3) 事務局

飯田市教育委員会

関口和雄 (教育次長、～平成12年3月)

久保田裕久 (同上、平成12年4月～)

1) 平成12年度…博物館課埋蔵文化財係・庶務係

米山照実 (博物館課長)、小林正春 (博物館課埋蔵文化財係長)、馬場保之・渋谷恵美子・吉川金利・福澤好晃・伊藤尚志・下平博行・坂井勇雄 (以上博物館課埋蔵文化財係)、今村 進・松山登代子 (以上庶務係)

2) 平成13年度…生涯学習課文化財保護係、学校教育課総務係

中島 修 (生涯学習課長)、小林正春 (生涯学習課文化財保護係長)、馬場保之・渋谷恵美子・吉川金利・伊藤尚志・下平博行・坂井勇雄・羽生俊郎 (以上生涯学習課文化財保護係)、鈴木邦幸 (学校教育課長)、高田 清 (学校教育課総務係長)、宮田和久・福沢恵子 (以上学校教育課総務係)

3) 平成14年度…生涯学習課文化財保護係、学校教育課総務係

中島 修 (生涯学習課長)、小林正春 (生涯学習課文化財保護係長)、馬場保之・渋谷恵美子・吉川金利・伊藤尚志・坂井勇雄・羽生俊郎 (以上生涯学習課文化財保護係)、伊藤昌治 (学校教育課長)、高田 清 (学校教育課総務係長)、宮田和久 (学校教育課総務係)

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 自然環境

飯田市川路地区は飯田市街地から南東へ約6km、天竜川の右岸に位置する。西と南は標高450～550mの低い丘陵に囲まれ、天竜峡の渓谷に阻まれて形成された天竜川の氾濫堆積による平坦面が大半を占めている。かつては県道上川路大畑線から天竜川にかけて緩やかに傾斜をしており、広大な桑園地帯をなしていたといわれる。しかし、現在は昭和36年の水害「三六災」をはじめ幾たびか水害を受け、その旧情を留めていない。

伊那谷の基本的な地形は、天竜川の流れに沿ったほぼ南北方向への断層段丘地形を特徴としている。伊那盆地ができはじめたのは250万年位前からで、天竜川が流れ始めたのもこの頃からといわれる。この頃から60万年前までに南アルプスが隆起をはじめ、竜東側に巨大扇状地ができ、60万年前頃から中央アルプスが隆起をはじめ、伊那谷全体が巨大扇状地で埋め尽くされた。そして、10万年前頃から断層運動が活発となり、中央アルプスの上昇とともに盆地全体も上昇し、断層がたくさんできた。また、山地の上昇と気候の温暖化により、天竜川やその支流により段丘および扇状地の開析が進行した。伊那谷の生い立ちを知る上で、最も参考になるのが松尾から竜丘地区を貫く「念通寺断層」である。

川路地区は天竜川の浸食及び活断層に起因して上・中・下3段の段丘に大別される。下段は天竜川氾濫原から僅かに高まった部分、中段は現在国道151号が通過している標高400m前後の狭い段丘面である。丘陵地ともいえる上段は中段より30m前後の比高差をもっている。地質学的には、上段は中位ないし高位段丘、中段は低位段丘Ⅰ、下段は低位段丘Ⅱに概ね対比される。さらに、その段丘は北から相沢川・留々女川・南沢川・ねぎや沢川・観音沢川・大畑沢川・初沢川といった天竜川支流の小河川により細かく分断されている。

各小河川は低位段丘に出たところで、それまでの下刻作用から堆積作用に転じ自然堤防を形成しており、小河川右岸の自然堤防下流側には内湾状に低湿地が形成されている。

本遺跡は留々女沢川右岸の自然堤防上に立地する。

第2節 歴史環境

前節で区分した各段丘面の遺跡は、下段が北から久保田・辻前・留々女・殿村・富岡・梶垣外・井戸下の各遺跡、中段が北から花御所・今洞・御射山原・坊垣外・道上・初ノ免・月の木・大畑の各遺跡、上段が北から琴原・藤治ヶ峯・上平・弥宜屋平・川路大明神原・中原の各遺跡となっている。これまで発掘調査が実施された遺跡は少ないため、治水対策事業にかかる諸遺跡・古墳の発掘調査や、財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが三遠南信自動車道建設に先立ち発掘調査を実施している川路大明神原遺跡の途中成果を中心に本地区の考古学的成果を概括したい。



1. 殿村遺跡 大荒神の塚古墳 殿村1号古墳 2. 久保田遺跡 正清寺古墳 饒魔王塚古墳
3. 辻前遺跡 4. 留々女遺跡 5. 井戸下遺跡 6. 月の木遺跡 月の木古墳群
7. 花御所遺跡 花御所1号古墳 8. 今洞遺跡 9. 下辻古墳 10. 川路城山城跡
11. 大明神原遺跡 12. 細新遺跡 13. 開善寺境内遺跡 開善寺 14. 上の坊遺跡
15. 安宅遺跡 16. 駄科北平遺跡

挿図1 調査遺跡および周辺遺跡位置図

飯田市内では、西部山本地区の石子原遺跡・竹佐中原遺跡で中期旧石器時代以前に遡ると考えられる石器群が調査されているが、川路地区では、周辺地区と同様、縄文時代より古く遡る遺跡はこれまでに確認されていない。しかし、火山灰が確認される低位段丘Ⅰや中位段丘上では、他地区の上溝遺跡・八幡原遺跡・猿小場遺跡（松尾地区）や下の原遺跡（伊賀良地区）等で旧石器時代の遺物が出土しており、地区内にもこの時代の遺跡がある可能性は高い。

縄文時代には本遺跡で有舌尖頭器が出土している。隣接地域の上川路地籍開善寺境内遺跡で断片的ながらも草創期～早期の遺物出土があるし、上の坊遺跡でも尖頭器の先端部分が出土している。低位段丘上まで活動の舞台が広がったことが推察される。さらに前期になると、川路地区の今洞遺跡・月の木遺跡・川路大明神原遺跡で住居址等が調査されており、氾濫原から20m程の高所で集落が営まれるようになる。今洞遺跡・月の木遺跡と同じ段丘面に相当する上の坊遺跡でも土坑群が調査されており、該期集落の立地傾向が指摘できる。ただし、集落の全体像を把握するまでには至っていない。なお、辻前遺跡では前期後葉の遺物が出土しており、引き続き低地へも進出していたと考えられる。縄文時代中期では中位および低位段丘Ⅰ上が中心になる。川路大明神原遺跡では、中期初頭から後葉にかけての30軒を越す集落が現在調査中であり拠点的な集落が形成されていたと考えられる。初ノ免遺跡・藤塚原遺跡でも縄文時代中期の遺物が表面採集されている。後・晩期には遺跡数も少なく断片的な資料のみとなる。今洞遺跡からは浮線網状文の施された米Ⅰ式土器が出土している他、辻前遺跡でも後期前～中葉にかけて断片的に遺物が出土している。全国的に縄文時代後・晩期は低地に進出し、河川を積極的に利用していることから、低位段丘Ⅱ付近に同時期の遺跡が存在する可能性が高い。

弥生時代中期前半には井戸下遺跡で3棟の竪穴住居址が調査されており、疎らな分布状況を示すことから、なお未調査部分に集落の中心が存在すると推定されている。また、本遺跡では中期前半の住居址1棟が調査されている。飯田下伊那地方では、該期の集落は天竜川沿岸の低地部で見つかっており、氾濫原周辺部の微高地に集落が営まれた、稲作農耕受容期の地域的特徴を示している。弥生時代後期には東原遺跡で竪穴住居址1棟が調査されたとされるが、他に集落址の調査例はない。しかし、調査中の川路大明神原遺跡では遺物出土が伝えられているし、上川路地籍開善寺境内遺跡や龍江地区細新遺跡で集落が調査されており、安定した集落の姿が想定される。墓域の調査としては久保田遺跡で後期と考えられる方形周溝墓が3ないし4基調査されている。

古墳時代には地区内に多くの古墳が築造される。久保田1号古墳（正清寺古墳）をはじめ、48基の古墳が確認されている。古墳は花御所地籍・久保田1号古墳周辺・月の木地籍に集中しており、古墳群を形成している。その立地は久保田1号古墳周辺の古墳を除き、低位段丘面上に位置している。古墳の多くは破壊され、地区内に多くの出土品が伝えられている。川路最大の古墳である正清寺古墳は、全長約60m（墳丘部分）の前方後円墳で、後円部に横穴式石室の存在が推測され、五鈴鏡・玉類・馬具・武器類が出土したと伝えられている。平成10・11年度の治水対策事業に伴う発掘調査では、二重周溝を有し、周溝部分が一度造り直されていることが判明している。周溝内からは多数の埴輪・須臾器・土師器類が出土し、5世紀末～6世紀と推定されている。猿魔王塚古墳は6世紀中頃から後半にかけて築造された円墳で、周溝内法径26m、同外法径45mを測る。また、花御所1号古墳からは金銅装の馬具類・玉類等の豊富な出土品が知られている。また下辻古墳は全長8.8mの横穴式石室を有し、馬具類・玉類等の出土品がある。さらに最低位段丘面にあった殿村1号古墳からは四腕鏡・素文鏡が出土している。

一方、古墳時代の集落についてみると、前期は詳かではない。中期以降になると、井戸下遺跡・留々女遺跡・辻前遺跡・久保田遺跡で大規模な集落が確認されている。このうち井戸下遺跡（飯田市教育委員会 2001）では古墳時代中期を中心とする30軒の住居址が確認されており、天竜川を挟んで東側に位置する細新遺跡（同 1998b）と集落の消長が同様の傾向を示していることが指摘されている。辻前遺跡では溜め池施設等から多数の木製品が出土し、当時の生活の様子が明らかにされ、同時に畿内からの強い影響が指摘されている。今後、他遺跡の報告が行われる中で、天竜川兩岸における古墳時代の様相が判明すると期待される。

古代東山道の経路については異論があるが、推定伊那郡衙とされる座光寺地区の恒川遺跡で、奈良時代の正倉建物址が確認されている。また、松尾地区の久井遺跡でも大規模な掘り方を持つ2棟の掘立柱建物址が調査されており（同 1993）、古代官衙址に関連した何らかの建物の存在が予想されている。安宅遺跡では官衙ないし寺院の可能性をもつ大型の掘立柱建物址・柱列址があり、かつ灰釉陶器碗の転用碗が出土している。また、駄科北平遺跡では、平成元年度に実施した詳細分布調査に際して、平安時代の円面碗が表採されている。辻前遺跡でも掘立柱建物址の配置や古瓦や銅碗の出土から、寺院址の存在が推定される。こうした官衙的遺跡・遺物の存在は、川路・竜丘・松尾・座光寺を東山道が通過していたことを強く示唆するといえ、三穂地区から阿智駅への道筋が考えられる。

奈良・平安時代の川路地区は断片的な資料のみであったが、久保田遺跡では奈良時代末～平安時代の竪穴住居址2棟、留々女遺跡でも11棟の平安時代住居址が調査されている。また、井戸下遺跡では奈良時代～平安時代と推定される水田址・溝址が確認され、低位段丘面一帯に集落と水田が営まれていたと推定される。

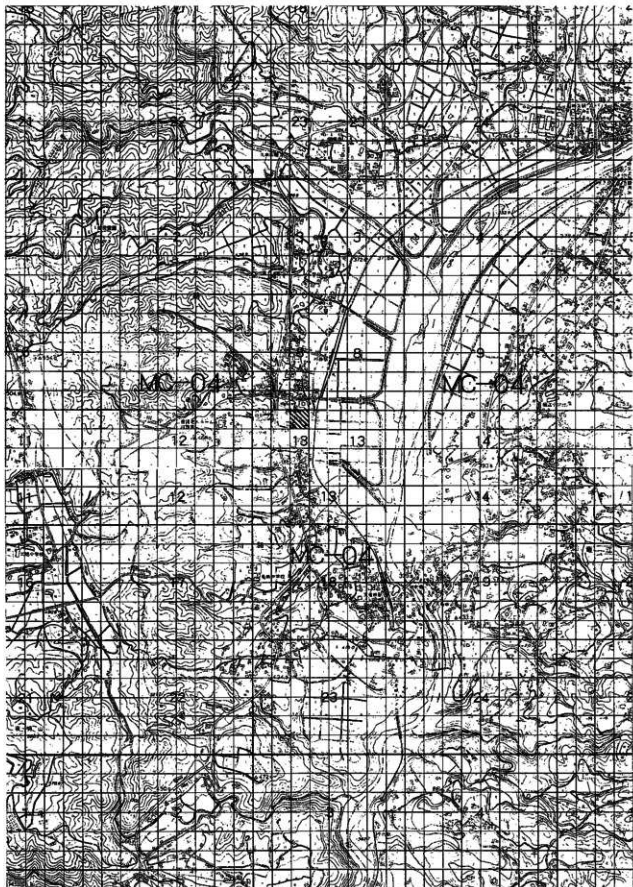
川路地区が文献上に現れるのは、貞和2（1346）年の三浦和田文書中の7月19日室町幕府下知状案である。これは、鎌倉時代に伊賀良庄地頭であった江馬（間）氏の氏人江馬尼浄元が庄内の中村・河路両郷を開禅寺（開善寺）寺領として寄進し、それを新給人が了承した旨の記載がある。また、織田氏の信濃攻略により開善寺より持ち出された梵鐘（現高遠町桂泉院に現存）には文和4（1355）年の銘があり、その文中に伊賀良庄上河路郷の記載がある。こうした史料から河路は鎌倉時代には伊賀良庄に含まれ、貞和2～文和4年の間には上河路郷・下河路郷に分かれたと考えられる。また、康永3（1344）年小笠原貞宗讓状の中に伊賀良庄が記載されており、室町時代には小笠原氏が川路地区を領有していたことがわかる。その後、武田氏の伊那侵攻後、天正7（1579）年の上諏訪造営帳に伊賀良庄内の役銭納入状況が記されており、その中にも上河路郷・下河路郷等の記載がみられる。

下河路郷の詳細は不明であるが、井戸下遺跡からは14世紀代から15世紀代にかけての堤防に覆られた屋敷跡が確認されており、留々女遺跡でも同時期と考えられる掘立柱建物址群が検出されている。また、久保田遺跡でも正清寺古墳南側周溝付近で該期の遺構・遺物が断片的ながらも把握されている。こうした成果から下河路郷の集落の実態がある程度判明すると思われる。

地区内西側山中の城山にはかつて尾根を利用した山城が確認されている。伝承等も無く、詳細は不明な点が多いが、戦国期の山城と推定されている。また、月の木遺跡では、慶安2（1649）年の検地帳によれば「じょうばた」・「おもてきど」・「うらきど」・「ほり」等の小字名が残されていたことから「幾島館跡」と伝えられてきた。月の木遺跡発掘調査の結果では、城郭等の痕跡は確認できず、一方で瀬戸産の灰釉四耳壺や火葬墓が存在することから、墓域としての姿が把握されている。



挿図2 調査地点位置図



挿図3 基準メッシュ図区画調査位置

第三章 調査結果

第1節 微地形（挿図2）

調査区の南側には窪地状の部分があり、これより南側は今調査で検出された溝址群や試掘調査時の所見から、溝址が幾条も分布すると考えられる。

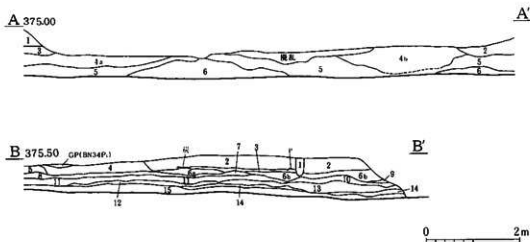
東側については比高差2m以上で「三六災」以前には住宅等が立ち並んでいた部分にあたる。表土下に「三六災」時の洪水砂が検出され、その下位に建物基礎や井戸跡等が確認された。その下位は洪水砂が堆積しており、遺構・遺物は遺存していない。

調査区の北半は天竜川の支流、留々女沢川の自然堤防にかかり、土砂の堆積作用が著しい部分で、縄文時代の遺構・遺物の検出面と弥生時代以降の遺構面の間には、50cm程度の間層がある。

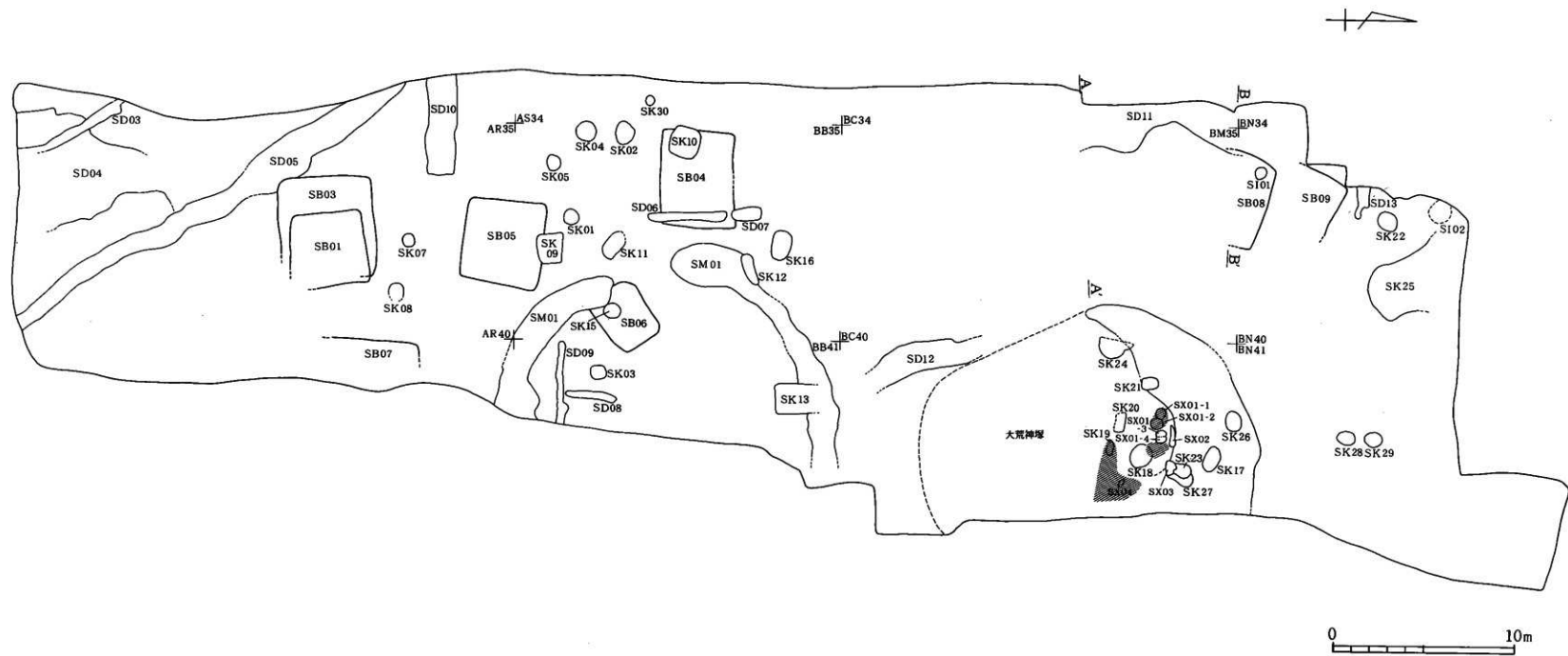
大荒神の塚古墳北側の周溝埋土中層やSM01周溝埋土上層、それにSB01・SB07埋土上層には黄褐色シルトが堆積していた。同様のシルトは上流側900mに位置する前方後円墳、久保田1号古墳（正清寺古墳）の周溝埋土にもみられる。古墳築造以降に今調査地点周辺が冠水する洪水があったことは確実である。さらに、前述の調査地点東側の「三六災」以前の砂の堆積からこの冠水以降に天竜川の氾濫により大荒神の塚古墳付近まで削り取られ、氾濫原と化したことが考えられる。

第2節 基本層序（挿図4・5）

大荒神の塚古墳西側A-A'およびB-B'（挿図5）の2箇所ですら層の堆積状況を把握した。断面A-A'は上部を削平されている。断面B-B'15層が断面A-A'3層に対比される。断面A-A'の4b層及び6層は砂礫層であり、留々女沢川の氾濫に起因するものと考えられる。断面A-A'5層中からは縄文時代前期の土器等が出土しており、大荒神の塚古墳の墳丘下部に連続して分布する状況が観察されている。6層上面は断面からみれば限り、起伏に富んでいたと考えられる。



挿図4 基本層序



挿図5 遺構全体図

第3節 遺構と遺物

当初本調査範囲としていた部分のうち、県道大畑時又線に隣接する部分については試掘調査の結果、古墳時代以降の天竜川の氾濫により流亡していることが確認されたが、大荒神の塚古墳付近の段から西側では遺構・遺物が確認された。

耕作や宅地化のために後世の削平がかなりおよんでおり、遺構の遺存状態は必ずしも良好でない。なお、SB02については検出時に番号を付したが、SM01の土橋部北側埋土1層であることが判明し、欠番とした。同様にSD14についてもSM01の周溝の一部と判明し、欠番とした。またSK14は検出時に把握されたものの、調査途中でSB06の一部と判断したため、遺構図が未掲載である。SK15の東隣に位置する。

(1) 竪穴住居址

1) 弥生時代中期

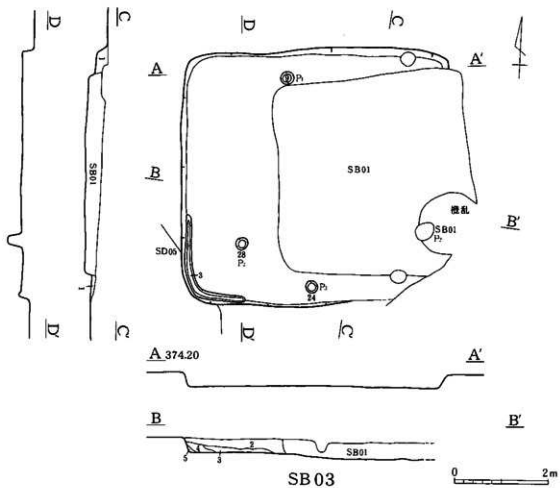
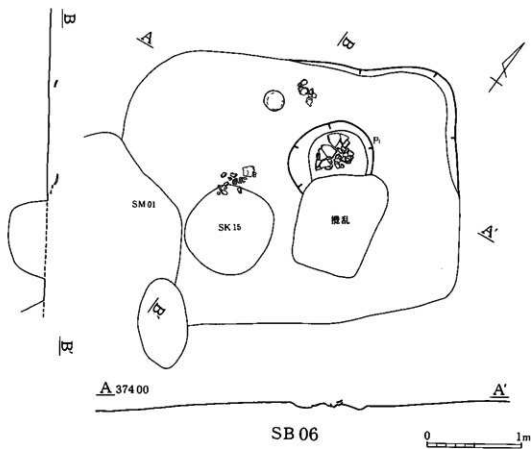
① SB06 (挿図6、第1図1)

〔検出位置〕AV40付近 〔規模〕3.6×2.7m、深さ-cm 〔床面積〕9.4㎡ 〔形態〕掘り方から隅丸長方形を呈すると考えられる 〔主軸〕N55° E 〔重複〕SM01と重複して検出され、出土遺物からSM01に切られる。また、遺物の分布状況からSK15を切る 〔調査所見〕甕と台石が出土したことにより、把握された。上部は削平を受けており、プランは十分把握できず。甕1個体と、台石と考えられる扁平礫が同レベルにあり、遺物の下部が床面と考えられる。甕の下部に炭あり 〔埋土〕不明。礫・焼土・炭化物なし 〔壁〕不明 〔床〕貼り床されており、全体的に堅固。床面に焼土・炭化物なし 〔周溝〕なし 〔柱穴〕不明 〔炉〕不明 〔付属施設〕なし 〔増改築〕なし 〔床下検出遺構〕なし 〔出土遺物〕僅少。中央付近や台石北東側に弥生時代中期甕出土 〔時期〕出土甕から弥生時代中期阿島式期に比定される。

2) 古墳時代前期

① SB03 (挿図6、第1図2～7)

〔検出位置〕AM37付近 〔規模〕5.4×-m、深さ34cm 〔床面積〕(28.1)㎡ 〔形態〕方形を呈する 〔主軸〕N87° E 〔重複〕SB01・SD05に切られる 〔調査所見〕平面および断面観察結果から本址が切られると判断された 〔埋土〕分層され、自然埋没と考えられる 〔壁〕やや緩やかな立ち上りを示す 〔床〕硬い部分等把握できず 〔周溝〕南西壁下に幅10～20cm、深さ6cm程の周溝あり 〔柱穴〕P2が主柱穴と考えられるが、他の主柱穴は確認できず。平面円形を呈し、径30cm、深さ28cmを測る 〔炉〕出土遺物からみて地床炉をもつと考えられるが確認できず。SB01に壊されたと考えられる 〔付属施設〕なし 〔増改築〕なし 〔床下検出遺構〕なし 〔出土遺物〕非クロコ系土師器-坏D1・高坏A1・高坏A2・器台・甕A・甕F・甕・(小型甕D)・小型甕F・壺B・壺D・台坏甕、その他-弥生土器甕・高坏混入。南西隅壁からやや離れて編物石3点がまとまって出土 〔時期〕古墳時代前期に比定される。



擇圖 6 SB 06, SB 03

②SB04 (挿図7、第1図8～12、第5図5)

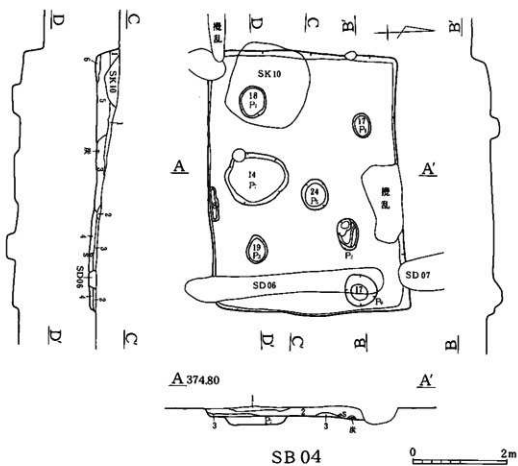
〔検出位置〕AX36付近〔規模〕5.5×4.1m、深さ50cm〔床面積〕(20.6)㎡〔形態〕隅丸長方形〔主軸〕N90°W〔重複〕SD06・SD07・SK10に切られる〔調査所見〕広範に焼土等が認められることから、焼失住居の可能性もある〔埋土〕自然埋没と考えられる〔壁〕西壁側が良好に遺存しており、急な立ち上がりを示す〔床〕中央やや南側P7とその周辺に焼土が検出された〔周溝〕あり〔柱穴〕P1～P4の4本と考えられるが、P2はだらだらと掘りくぼむ程度である。また、P4は位置が南西隅に偏っている。柱穴は不整形円形を呈し、長径50～70cm、深さ17～19cmと浅い〔炉〕P7に大量の焼土があり、地床炉と考えられる〔付属施設〕なし〔増改築〕なし〔床下検出遺構〕なし〔出土遺物〕出土量やや少ない。層は全般、位置は全体から出土しており、破片が多い。非ロクロ系土師器-坏D1・高坏A1・高坏A2・高坏A3・鉢A1・甕F・小型甕A・(小型甕D)・小型甕F・小型甕・(壺A)・(壺B)・壺D・壺・台付甕・ミニチュア土器、その他-弥生時代後期壺・甕や中世の土鍋混入。また、P3から非ロクロ系土師器-〔高坏〕・(甕)、P5から非ロクロ系土師器-甕、P6から非ロクロ系土師器-高坏・甕・小型甕と弥生時代後期甕、P7から非ロクロ系土師器-高坏・小型甕・台付甕・ミニチュア土器、周溝から非ロクロ系土師器-器台が出土。壺(第1図12)は胴下半に小孔が穿たれる〔時期〕古墳時代前期に比定される。

③SB05 (挿図7、第1図13～19、第5図3・4)

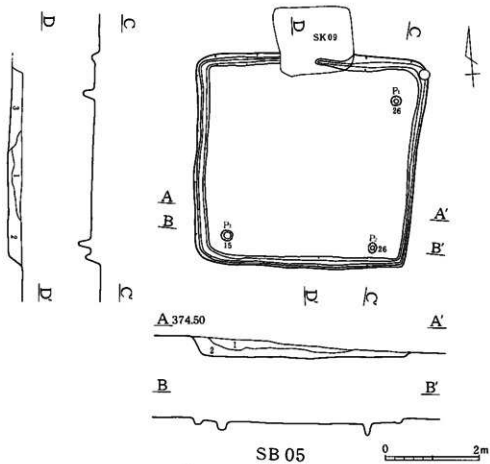
〔検出位置〕AR38付近〔規模〕4.7×4.5m、深さ32cm〔床面積〕19.8㎡〔形態〕不整形を呈する。北東隅付近が大きく歪む〔主軸〕N84°W〔重複〕SK09に切られる〔調査所見〕埋土が不明瞭ながら地山と異なり把握された〔埋土〕自然埋没〔壁〕西壁側は遺存状態が良好で、やや急な立ち上がりを示す〔床〕貼り床されていたが、硬い部分は確認されなかった。床面に焼土・炭化物等はない〔周溝〕一部SK09に壊されて把握できなかったもの、全周する。幅10～22cm、深さ5cmを測る〔柱穴〕隅付近に検出されたP1～P3が主柱穴と考えられる。平面円形を呈し、径20～25cm、深さ15～26cmを測る〔炉〕出土遺物から地床炉をもつと考えられるが、位置等不明〔付属施設〕なし〔増改築〕なし〔床下検出遺構〕なし〔出土遺物〕出土量僅少。層位的な偏りはなく、中央部分に多いが、破片が多い。非ロクロ系土師器-坏D1・坏D・高坏・(小型甕D)・小型甕F・壺D、その他-弥生時代後期壺・甕や陶器中碗(灰釉/瀬戸美濃系/近世)〔時期〕古墳時代前期に比定。

④SB08 (挿図8、第1図20～23、第5図6～8)

〔検出位置〕BN36付近〔規模〕2.6×-m、深さ22cm〔床面積〕-㎡〔形態〕方ないし長方形を呈すると考えられる〔主軸〕北辺の方向N73°W〔重複〕なし〔調査所見〕埋土が不明瞭ながら地山と異なり把握された。上部は耕作時の攪乱で破壊されている。検出面から床面まで浅い。本址南側には調査前住宅があり、これにより1/2が壊されていた〔埋土〕単層であるが、自然埋没と考えられる〔壁〕検出面より浅いため、立ち上がりの状態は不明である〔床〕薄く灰層が底面付近に広がることから、直下を床面と判断。硬く締まる〔周溝〕なし〔柱穴〕浅いがP2が主柱穴と考えられる〔炉〕北壁寄り中央84×42cmの範囲に焼土が検出され、この部分に地床炉があったと考えられる。焼土・炭の分布が2箇所に分かれており、複数あった可能性あり〔付属施設〕なし〔増改築〕なし〔床下検出遺構〕



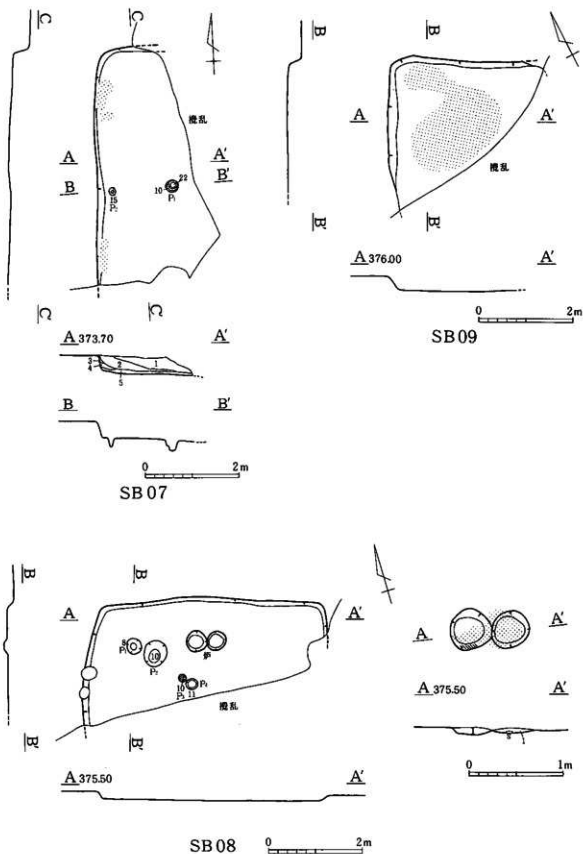
SB 04



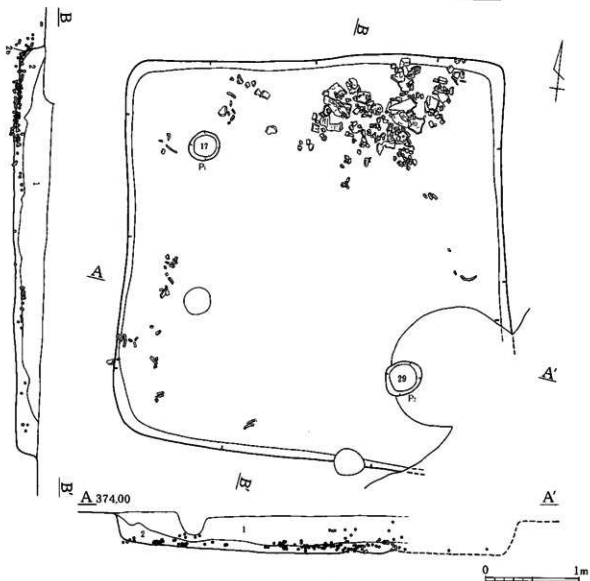
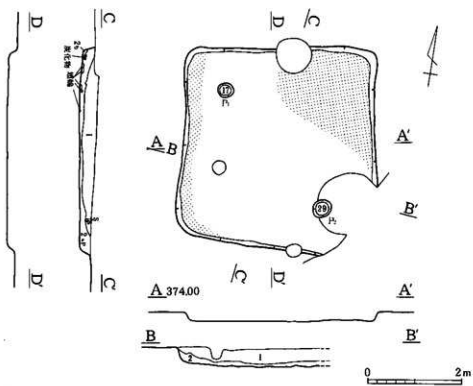
SB 05

挿圖 7 SB 04, SB 05

なし [出土遺物] 出土量僅少。非ロクロ系土師器—高坏A・鉢D・甕F・小型甕・壺D、その他—磁器混入。炉から非ロクロ系土師器—小型甕が出土。 [時期] 古墳時代前期と考えられる。



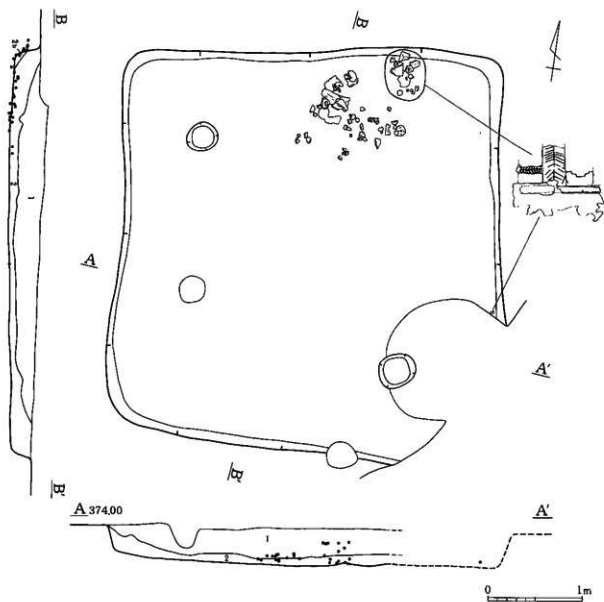
挿図8 SB07~SB09



挿図9 SB01・同墳輪出土状況

◎SB09 (挿図8、第2図1～5、第11図4・5)

[検出位置] B P 37付近 [規模] 一×一m、深さ34cm [床面積] 一㎡ [形態] 方ないし長方形を呈すると考えられる。[主軸] 西辺の方向N28° W [重複] なし [調査所見] 遺物が集中する部分があり、竪穴住居址と考えた。精査したが、埋土が微妙に地山と異なる程度で、プランは明確に把握できなかった。削平を受け、大部分が破壊されている [埋土] 単層であるが、自然埋没と考えられる [壁] 緩やかな立ち上がりを示す [床] 明瞭であり、硬く締まる。掘り方なし。スクリーントーン貼付部分に薄く炭が広がる [周溝] なし [柱穴] P 1・P 2が確認されたが、いずれも浅く、主柱穴とは考え難い [炉] 不明 [付属施設] 不明 [増改築] なし [床下検出遺構] なし [出土遺物] 出土量僅少。非ロクロ系土師器一高坏A 3・甕A・甕F・(小型甕D)・(台付甕)、その他縄文時代中期かと考えられる深鉢片、弥生時代後期壺および陶器土瓶(鉄釉)混入。床下より非ロクロ系土師器一鉢C [時期] 古墳時代前期と考えられる。



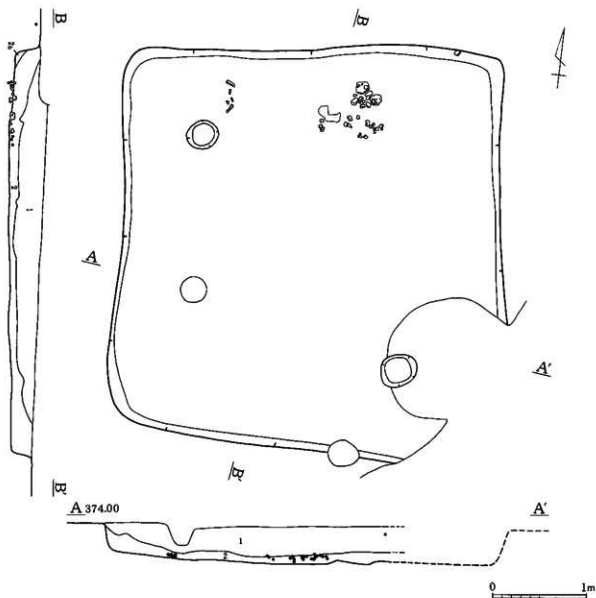
挿図10 SB01 船形埴輪・家形埴輪 2 出土状況

(2) 竪穴

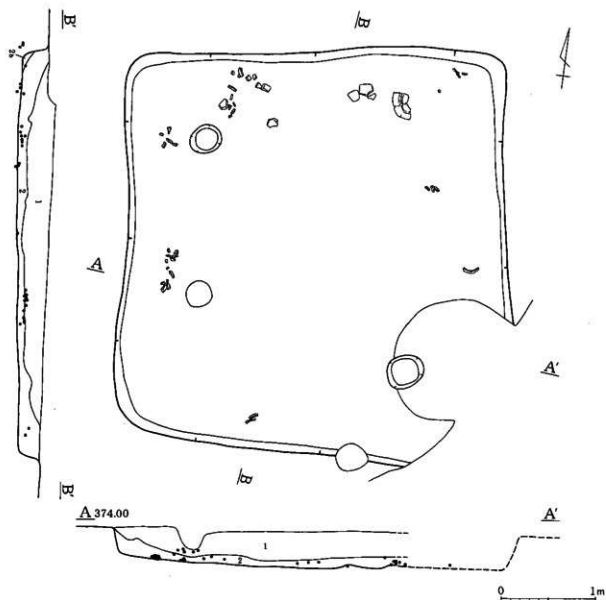
埴輪が出土したS B01・S B07の2基がある。S B01は北壁寄りを中心に埴輪が出土しており、生活用具と考えられる遺物はほとんど出土していない。壁際を中心に炭が多く出土しており、祭祀等が行われた可能性もある。

①S B01 (挿図9～14、第5図9～11、第13～21図)

[検出位置] AN38付近 [規模] 42×41m、深さ29cm [床面積] 15.8㎡ [形態] 方形を呈する [主軸] N9°W [重複] S B03を切る。新旧関係は平面および断面で把握した [調査所見] 当初北壁の東半分がやや張り出すと考えられたが、遺物取り上げ後の精査において地山と類似の覆土であることが判明し、最終的に方形を呈することとなった。南東隅付近は削平を受け、把握できず。西壁下および埴輪類が集中出土した北辺東半部分を中心に炭が多く出土(挿図9上 スクリーントーン貼付部分)。炭は壁際に多くかつ厚く、壁から離れるほど薄くなり、中央部では認められない。埴輪と炭が混じった状態で出土することから、祭祀が行われた可能性を想定し、2層を全量持ち帰り乾燥後、篩にかけて微細遺物の検出に努めたが、祭祀を物語る遺物は検出されなかった [埋土] 1層は天竜川の氾濫起源と考えら



挿図11 S B01 人物出土状況



押図12 SB01 朝顔形埴輪等出土状況

れる黄褐色シルト [壁] 北・東壁は明瞭で急に立ち上がるが、南・西壁は不明瞭で緩やかな立ち上がりを示す [床] 地山の砂層を床面としており、軟弱である。貼り床なし [周溝] なし [柱穴] 主柱穴と考えられるものは検出できず [炉・カマド等] なし [付属施設] なし [増改築] なし [床下検出遺構] なし [出土遺物] 遺物量が多いが、埴輪類を除くと少ない。埋土下層の2層からの埴輪出土が多い(押図9)。埴輪類は、船形埴輪・人物・家形埴輪3個体・朝顔形埴輪・[円筒埴輪]が出土。船形埴輪は約1mの範囲にまとまって出土しており、各部位はほぼ製作時の位置関係をとどめているものと考えられる(押図10)。人物は船形埴輪の中央付近、船形埴輪よりわずかではあるが上位からまとまって出土しており(押図11)、船形埴輪に乗った状態で埋没したと考えられる。家形埴輪1は火を受け爆ぜて細片化している。部位別にみると、堅魚木・屋根は船形埴輪・人物出土位置と重なり、まとまっている。妻庖部分は西壁下を中心に散乱する。これに対して、全体部分はSB07との接合関係がある(押図14)。家形埴輪2は大部分が北壁際中央北側で出土したが、東壁南側の削平された付近からも破片が出土している(押図10)朝顔形埴輪は頸部以上のみが出土し、その分布は船形埴輪・人物出土位置と重な

る(挿図12)。朝顔形埴輪ないし円筒埴輪の撞は南西隅から南壁中央にかけての壁際から散在して出土(挿図14)。埴輪以外の遺物として、非ロクロ系土師器一坏D2・高坏A・甕B・甕F・(小型甕D)・壺、その他一縄文土器深鉢細片・弥生土器壺・甕・高坏混入出土。他にごく微量の焼骨細片と、床直上からモモ核(内果皮)が出土 [時期] 家形埴輪が6世紀前半代に位置づくと考えられることから古墳時代後期に比定される。

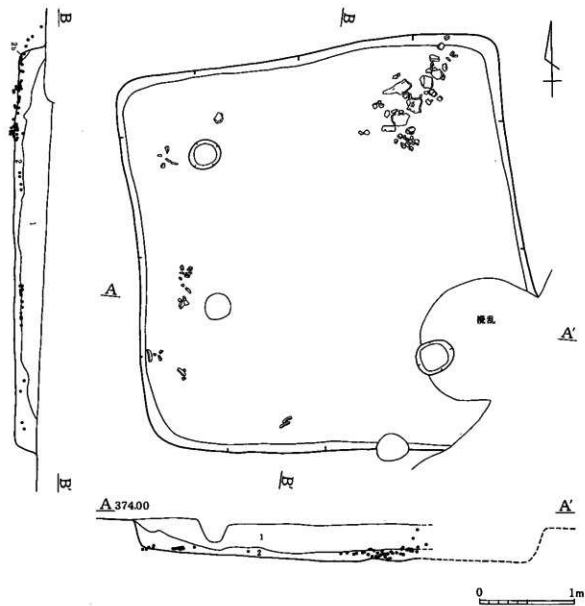
②SB07(挿図8、第18・20図)

[検出位置] AO41付近 [規模] $\times \times - m$ 、深さ37cm [床面積] $- m^2$ [形態] 方ないし長方形を呈すると考えられるが、SB01との関係からみて方形の可能性が高い [主軸] 西辺の方向 $N 3^\circ E$ [重複] なし [調査所見] 当初攪乱と考えたが、埋土がSB01の埋土1層と同質の黄褐色シルトであり、掘り下げたところ埴輪・炭が出土した。その出土状況はSB01と同様で、炭(スクリーントーン貼付部分)は西壁際床面上に多くかつ厚く、埴輪と炭が混じった状態で出土する。東半は後世の天竜川氾濫により流亡している [埋土] 上部は天竜川の氾濫により埋没、下部はSB01と同様、投棄されたと考えられる [壁] ほぼ垂直に立ち上がる [床] 不明瞭であり、硬さや遺物の広がりから判断した [周溝] なし [柱穴] 2基礎確認されたが、主柱穴とは考え難い [炉・カマド等] なし [付属施設] なし [増改築] なし [床下検出遺構] なし [出土遺物] 遺物量は多いが、埴輪類を除くと僅少である。本址からはSB01ほど多くの埴輪が出土してはいないが、家形埴輪はSB01との接合関係がある。非ロクロ系土師器一坏D1・高坏A・高坏・台付甕・ミニチュア土器、その他一縄文土器(条線文)、弥生時代後期壺・甕および陶器混入 [時期] SB01との間に遺物の接合関係があることや、同一の形態的特徴を有することから、SB01と同時期の古墳時代後期に比定される。

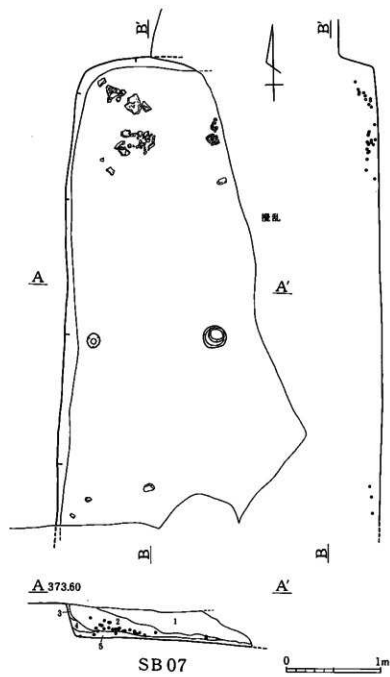
(3) 円形周溝墓

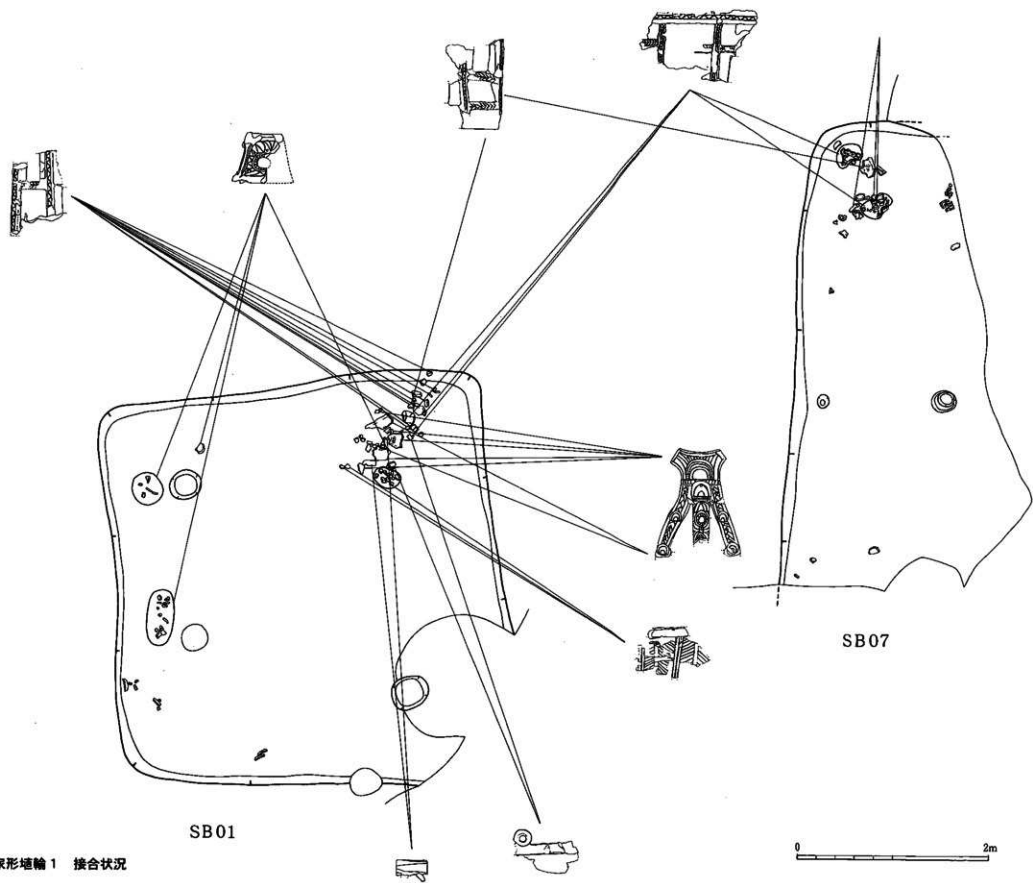
①SM01(挿図15、第2図6～9・21・22、第6図1)

[検出位置] AV40付近 [重複] SB06・SK12・SK13を切り、SK15と重複する [調査所見] 大荒神の塚古墳南側で検出された。大荒神の塚古墳周辺には、煙滅した古墳として下井戸古墳や殿村1・2号古墳の存在が伝えられ、いずれかの古墳周溝である可能性も考えられるが、本遺構は周溝墓として取り扱った。天竜川の氾濫により東半が流亡し、周溝の約 $1/2$ を調査した。土橋部よりも北東側は検出面から浅く、また攪乱との重複が著しいため、幅が狭く、周溝の立ち上がりの状態ははっきりしない [規模] 周溝内法 $15.1 \times - m$ 、周溝外法 $19.4 \times - m$ [内法面積] $- m^2$ [形態] 円形を呈すると考えられる。 [主軸] $N 111^\circ W$ [周溝] [規模] 幅 $90 \sim 240 cm$ 、深さ $7 \sim 55 cm$ [断面形] 緩やかに掘りくぼむ [土橋部] あり。1箇所と考えられる [埋土の状況] 自然埋没。埋土1層は天竜川の氾濫に起因する [出土遺物] 出土量少ない。埋土1層遺物は、弥生時代後期甕の他、非ロクロ系土師器一坏D・坏D(内黒)・高坏A・甕F・小型甕・(台付甕)。埋土2・3層遺物は弥生時代後期壺・甕の他、非ロクロ系土師器一坏D・坏D(内黒)・高坏A・高坏・甕B・甕F・小型甕・壺Aがある。北側から土師器甕が粉々に砕けた状態でまとまって出土しており、その出土高は周溝基底より $10 cm$ ほど上位である。遺物の状況から周溝内埋葬ではなく、死者埋葬後に祭祀等で供献されたものと考えられる [埋葬施設] [有無]

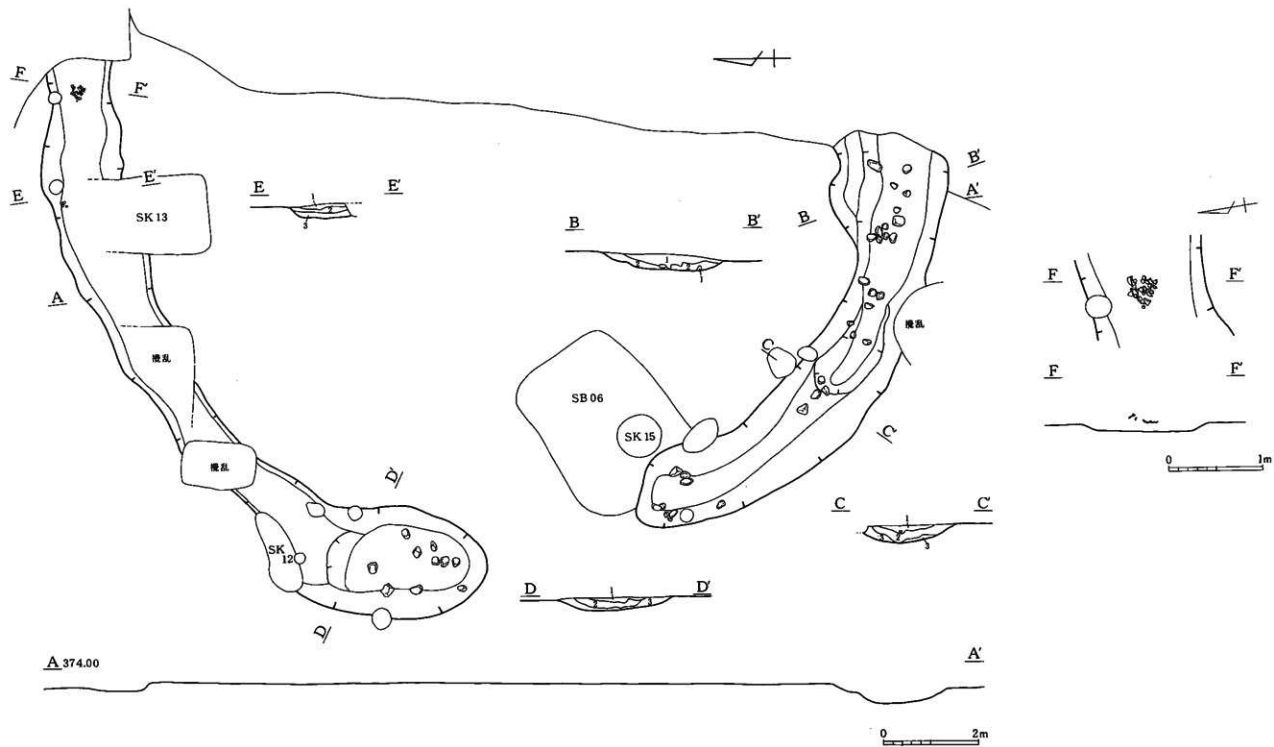


挿圖13 SB01・SB07 家形埴輪1出土状況





榑圖14 SB01・SB07 家形埴輪1 接合狀況



挿圖15 SM01

削平されたと考えられ、把握できず【その他】[墳丘]削平されたと考えられ、遺存せず【外表施設】土橋南側の周溝埋土上層には礫が集中しているが、礫は多くなく蓋石の転落したものと考えたい【付属施設】不明【時期】形態・遺物等から古墳時代中期のものと考えられるが、埋土の上部にS B 01・S B 07および大荒神の塚古墳周溝埋土1層と同じ堆積層が認められることから、後期に近い時期と考えられる。

以下、特記されるものについて記述する。

(4) 土坑

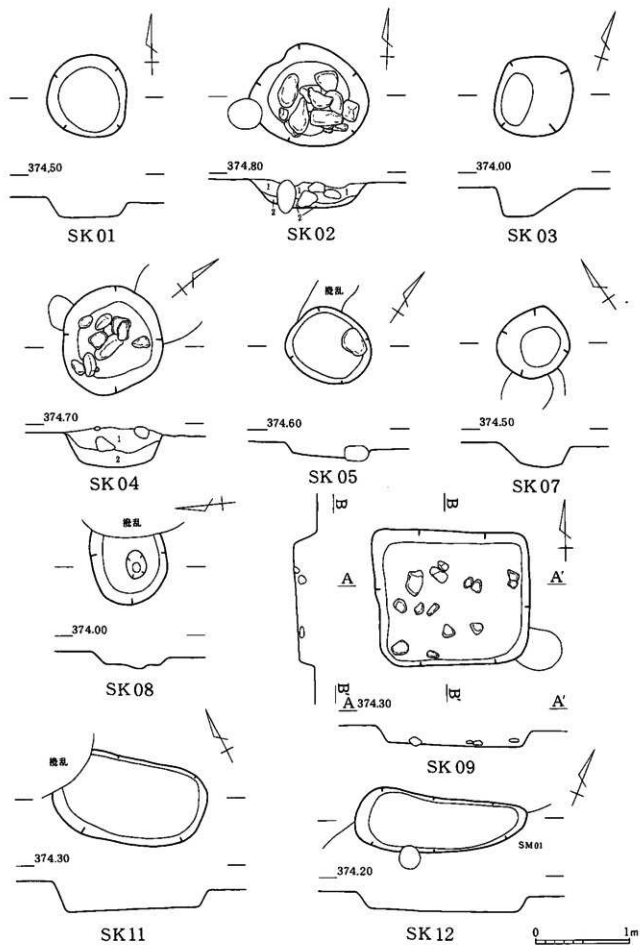
S K 02・S K 04は不整形ないし楕円形を呈する土坑で、坑内に10～40cm 大の礫が中央部を中心に集積している。S K 02は礫は底部付近に、S K 04は埋土上層に位置する。いずれも壁は緩やかに立ち上がる。S K 09・S K 13は長辺1.5m超・短辺1.5m程の長方形を呈し、検出面からの深さは約30cm を測る。坑内底面に10～30cm 程の礫が散漫に分布している。S K 10は10～20cm 大の礫が底部付近、南北方向を長軸にほぼ長方形にまとまっている。平面形はやや丸味を帯びるが、S K 09・S K 13とほぼ同規模で類似性が指摘できる。S K 14はA U 39・A U 40・A V 39・A V 40のグリッド境界で検出され、215×160cm、深さ12cm の不整形長方形を呈する。出土土器(第2図11・12)は胎土から縄文時代前期のものと考えられる。S K 15は不整形形を呈し、底部が西側に寄る。S K 17は大荒神の塚古墳周溝を切って検出された。S K 18～S K 21は鍛冶関連遺構と隣接し同一面で検出されたこと、内部から炭が出土することから鍛冶関連の遺構と考えられる。S K 21からは延宝元(1673)年初鑄の『寛永通宝』(いわゆる「新寛永」)が出土しており、17世紀後半以降に比定される。

(5) 溝址・溝状址

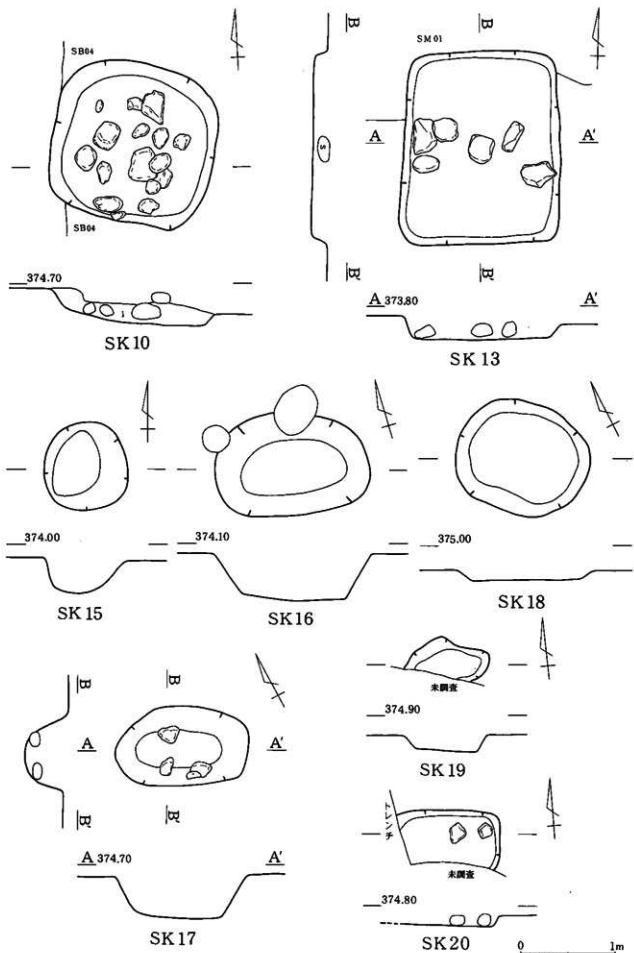
S D 03は内部に扁平礫が、長辺を溝の短辺方向、平板な面を上にして蓋石状に並べられていた。『寛永通宝』が出土しており、近世以降の暗渠排水である。S D 04は幅が一定せず、埋土に砂が多く含まれることから、自然流路と考えられる。S D 06・S D 07は連続しないもののほぼ同一方向をとることから、一体的に機能していたと考えられる。

(6) 集石(挿図19)

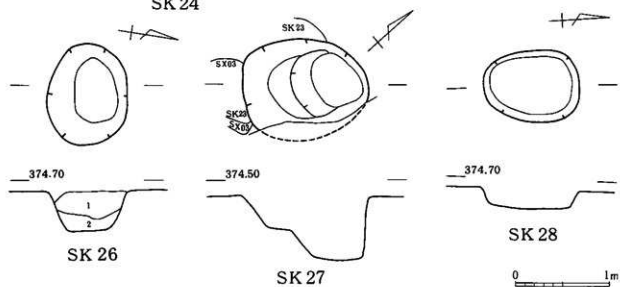
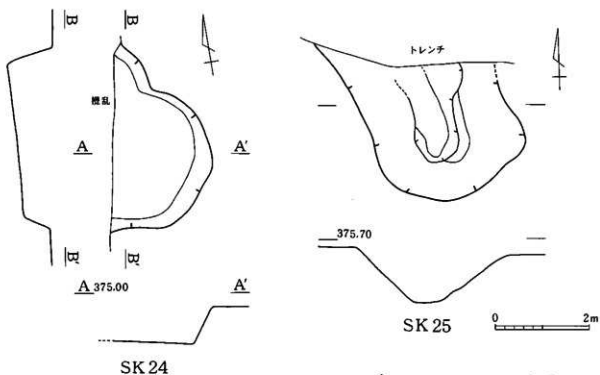
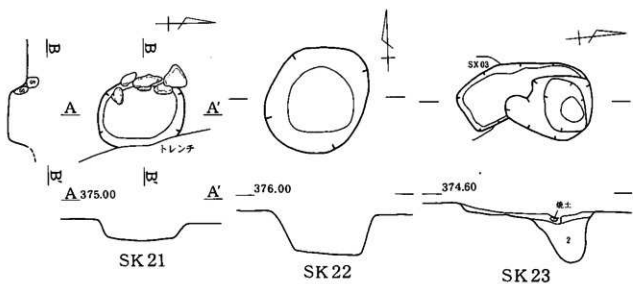
S I 01はS B 08下部で検出され、内部に炭化材等がびっしりと詰まっていた。掘り方は不整形楕円形を呈し、長径70cm・短径60cm、深さ30cm を測る。礫は10～20cm 大で北西半にまとまり、底部より10cm ほど浮いて入れられていた。縄文時代の焼礫集積遺構と類似することから焼礫集積遺構と考えられる。詳細時期は不明であるが、周辺から縄文時代前期の遺物が出土していることから縄文時代前期の遺構と考えられる。S I 02は調査区北西隅で調査された。試掘トレンチにより壊され、また調査区外にかかるため規模等は不明であるが、概ね60cm の範囲に10～15cm 程度の礫が集中する。礫は大きなレベル差はない。掘り方は確認できなかった。



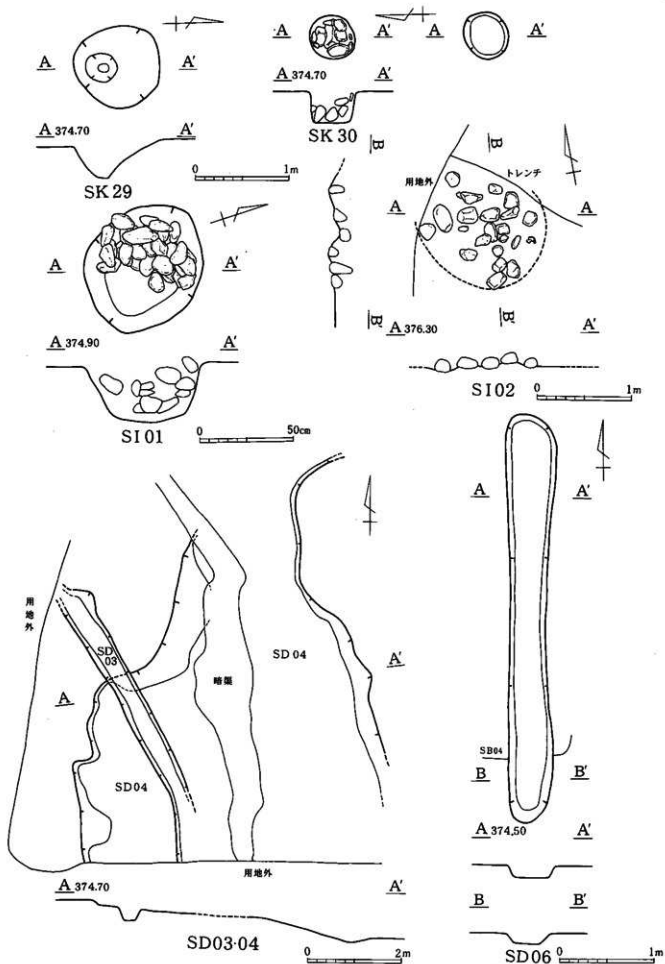
挿圖16 SK01~SK05・SK07~SK09・SK11・SK12



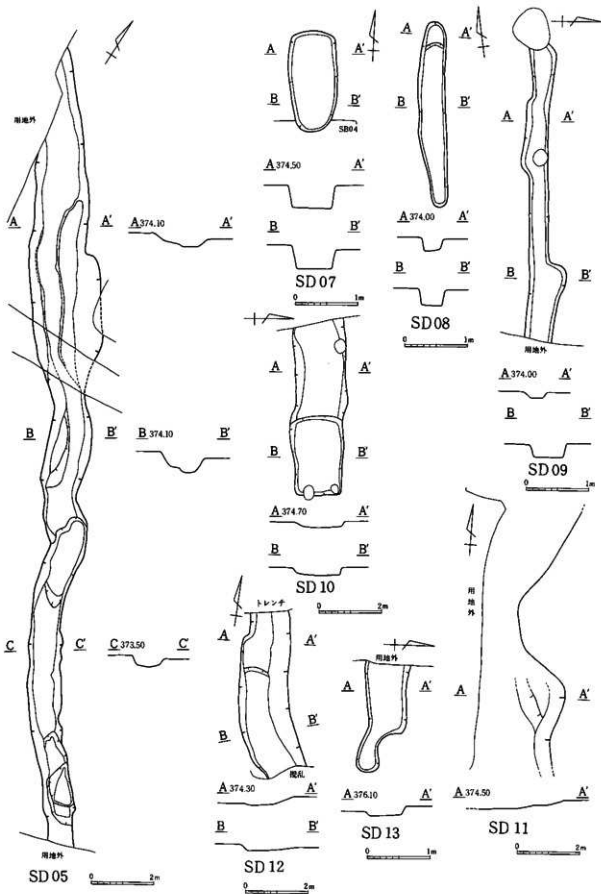
挿圖17 SK 10・SK 13・SK 15～SK 20



挿図18 SK 21~SK 28



挿圖19 SK29・SK30・SI01・SI02・SD03・SD04・SD06

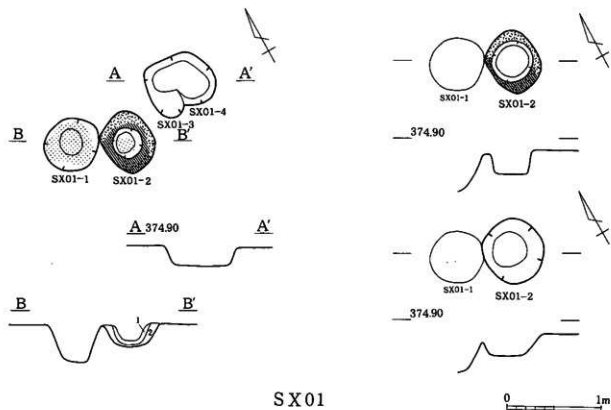


挿図20 SD05・SD07～SD13

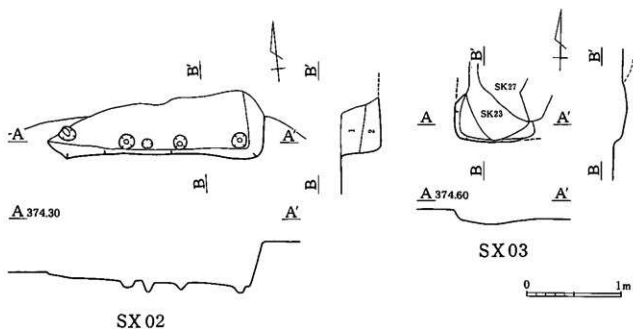
(7) その他

① 鍛冶関連遺構

大荒神の塚古墳北側の墳丘から周溝にかけて調査された。SX01-1～4は同じ面で検出され、相互に関連があるものと考えられる。SX01-1は底面および側面に粘土が貼られたポット状を呈するも



SX01

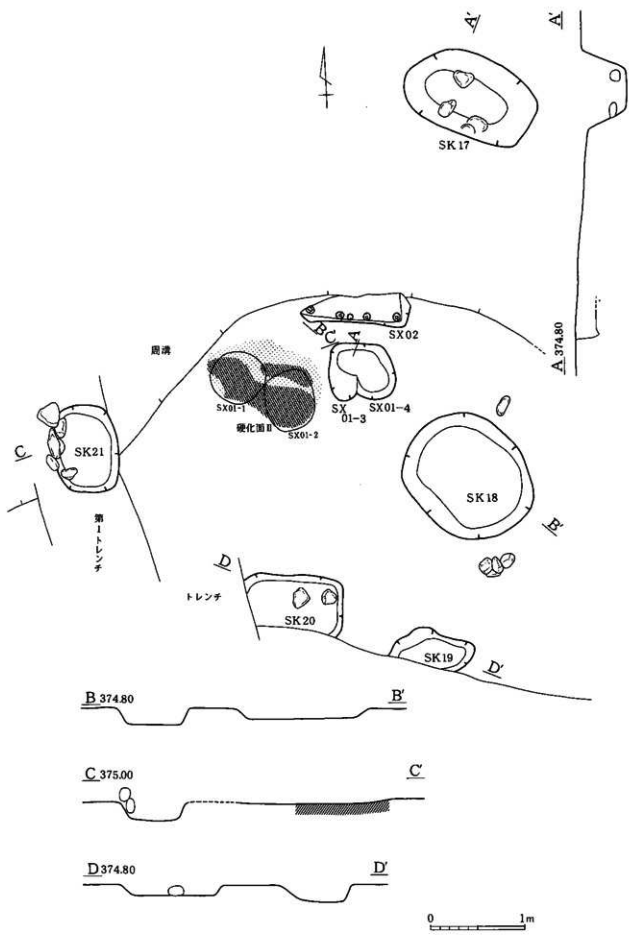


SX02

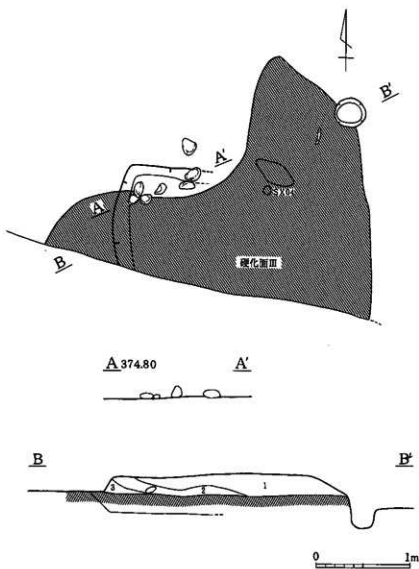
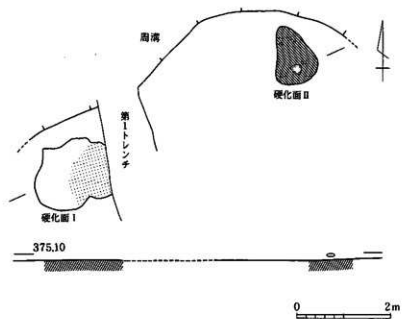
SX03

0 50cm

挿図21 SX01～SX03



挿図22 S X01・S X02・S K17~S K21 関連図



挿図23 硬化面 I ~ III

ので、硬く焼け締まっていた。1・2層の層界で剥がれ易くなっている。内部からは増埴がまとまって出土している。付着していた緑青から銅合金に関連する遺構と考えられる。SX01からは寛永13(1636)年初鑄の『寛永通宝』(いわゆる「古寛永」)や輪羽口が出土している。本址に関連すると考えられるSK21から「新寛永」が出土していることから、本址の年代も17世紀後半以降に比定することができよう。

また、大荒神の塚古墳周溝埋土上層からは鉄滓が出土しており、小鍛冶が行われたと考えられるが、詳細時期不明である。

②硬化面 (挿図23)

大荒神の塚古墳北側、鍛冶関連遺構に重複して硬化面Ⅰ～Ⅲが把握された。鍛冶関連遺構との関係や施設の全体像は不明であるものの、検出位置からみて鍛冶関連遺構と一体的に機能していたものと考えられる。

③周辺柱穴

調査区のはほぼ全面から中・近世に掘り込まれたと考えられる径20～30cm程度の小柱穴が多数検出されている。規則的な配列は抽出することができなかったが、掘立柱建物址等を構成するものと考えられる。AV36P3・AY39P1から青磁碗片が出土している。

(8) 遺構外出土遺物

①縄文時代

草創期の遺物は、大荒神の塚古墳とSD12の間付近から有舌尖頭器が出土している。

前期には大荒神の塚古墳北西側、SB08下部を中心に、基本層序の断面A-A'5層に対応する層中から土器・石器類が出土している。

中期にはSD05等から流れて著しく摩耗した土器片が出土するなど、留々女沢川上流にかけて該期集落の存在が推定される。

他に、晩期かと考えられる遺物がある。

②弥生時代

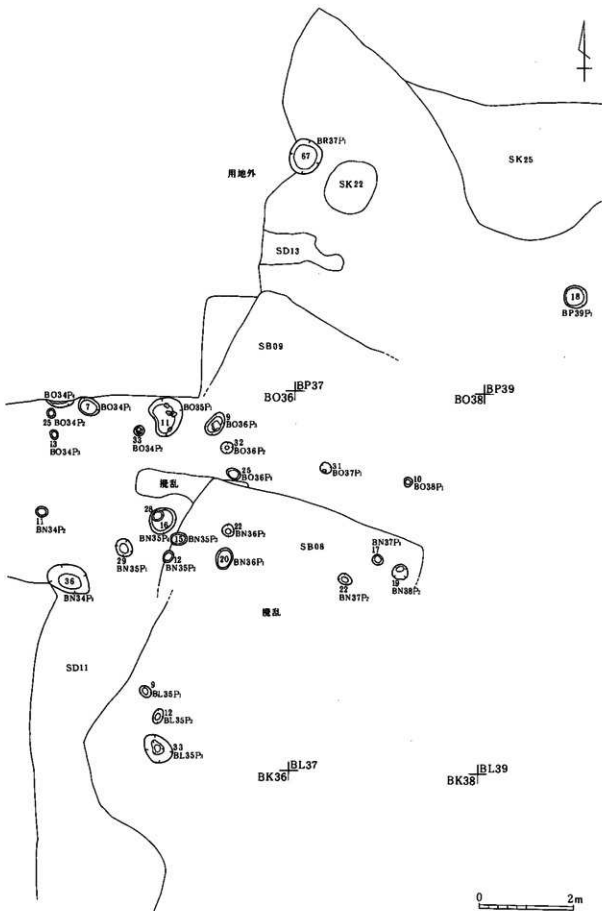
他の遺構中に混入するなど、弥生時代中・後期の壺・甕・高坏が出土している。中期はSM01付近から北側に散漫な遺物分布がみられる。後期には出土量が増加し、分布域もSB01付近まで拡大する。殊にA542・AT38～42・AU38付近、AV36・AW35～37・AX36～38・AY35付近の分布が顕著であり、この部分に調査では確認できなかったものの該期の遺構が存在した可能性が指摘できる。

③古墳時代

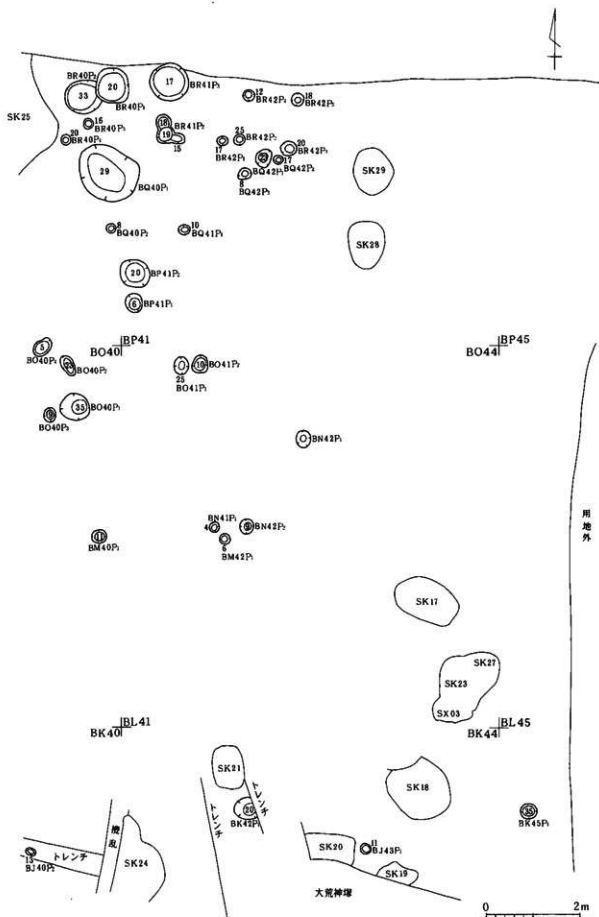
土師器甕・甔等の他、大荒神の塚古墳南西側やSB01南側窪地から円筒埴輪片が出土している。

④中・近世

SB04から土鍋が出土した他、大荒神の塚古墳北側周溝から中世の青磁碗片が出土している。また、大荒神の塚古墳の墳丘や周辺から近世から近代にかけての陶磁器類が出土しており、磁器-小碗・中碗(波佐見系?他)・小皿・五寸皿・小鉢・酒杯、陶器-中碗(瀬戸美濃系)・小皿・土鍋・土瓶・急須・中瓶・燗徳利(瀬戸美濃系)・灯明皿・灯明受皿(瀬戸美濃系)・摺鉢(瀬戸美濃系)・控鉢(瀬戸美濃系)・中甕・〔花生〕、土師質-燈炉・火鉢等がある。その中には近代の鉄道土瓶(「下川路…」銘あり)が含まれる。



挿圖24 周辺柱穴平面圖(1)



榊園25 周辺柱穴平面図(2)

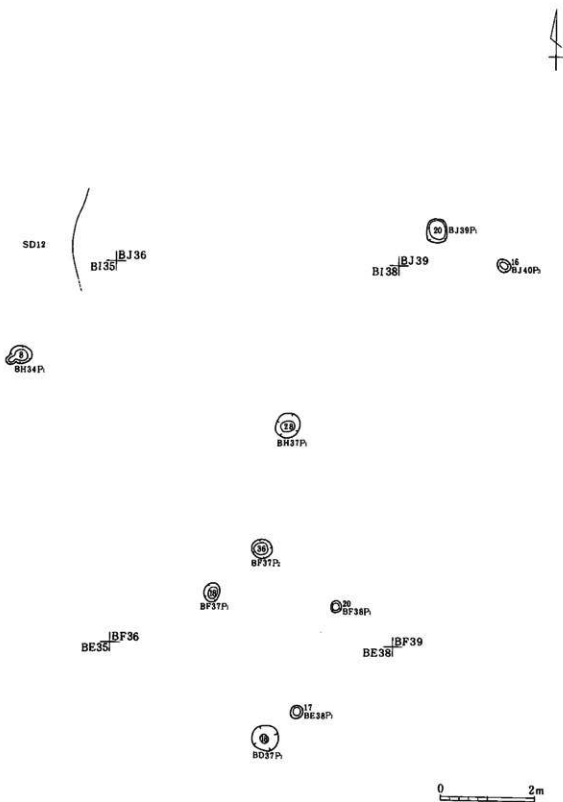
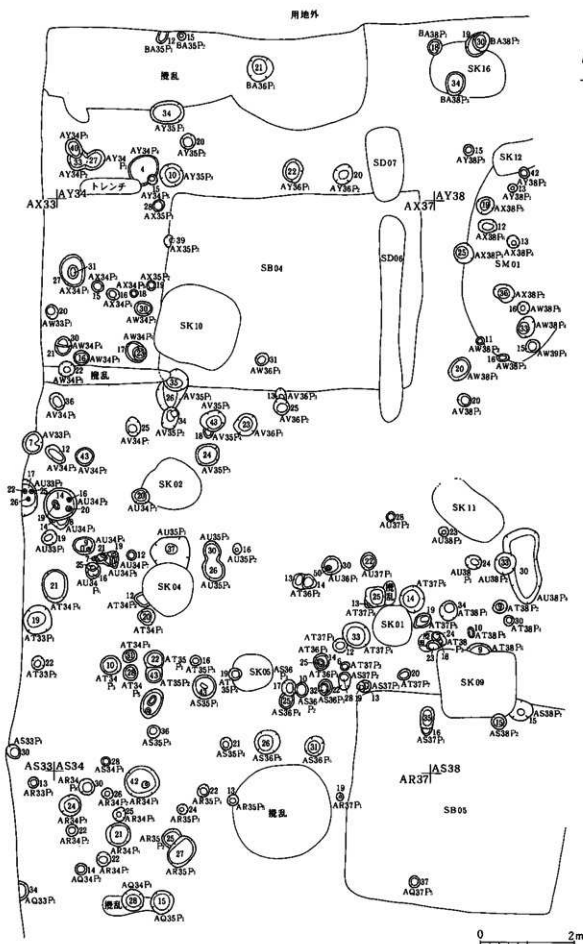
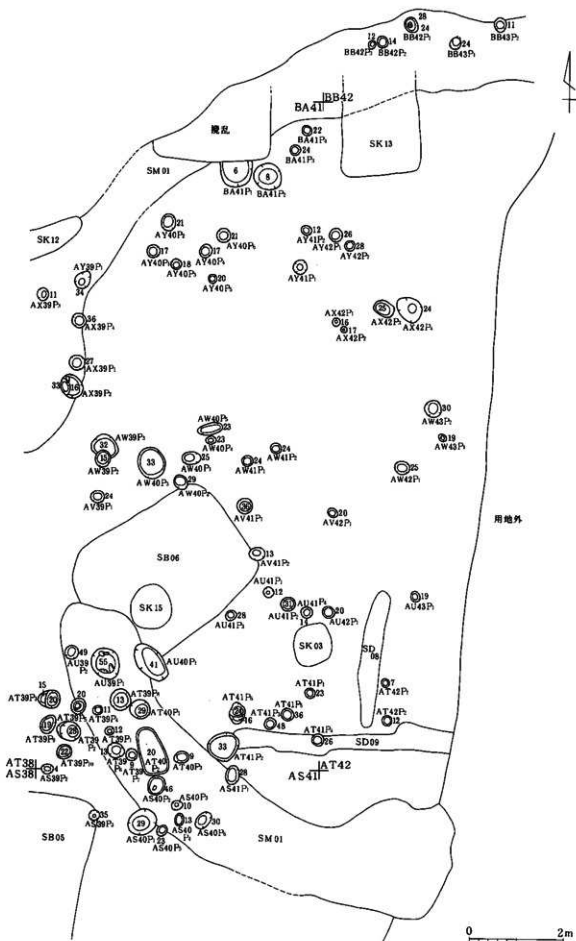


插图26 周边柱穴平面图(3)



挿図27 周辺柱穴平面図(4)



挿図28 周辺柱穴平面図(5)

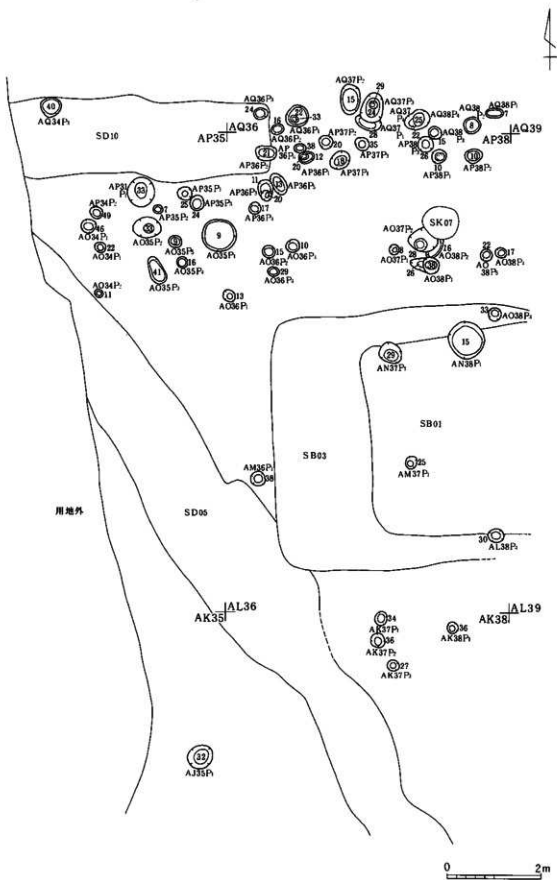
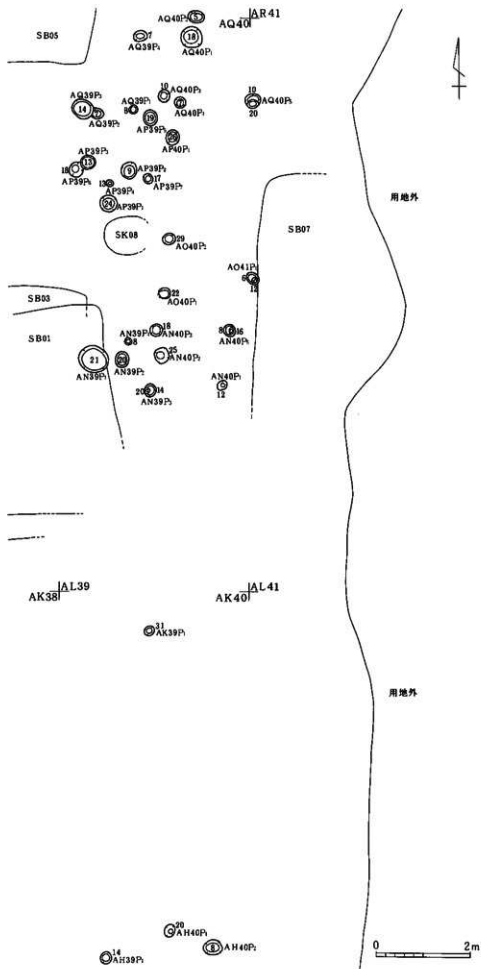


插图29 周边柱穴平面图 (6)



棒图30 周边柱穴平面图 (7)

第IV章 SB01・SB07出土の埴輪について

埴輪片は残存状態が悪く、大半が小片で出土した。船形埴輪と家形埴輪を1個体分ずつ接合できたものの、接合可能な破片をすべてつなぎ合わせても完形品とはならない。とくに家形埴輪は欠損箇所が多い。他に人物とかさざ製品が出土しているが、胎土や焼成からみて船形埴輪と一体として製作された可能性が高い。

(1) 船形埴輪 (第13・15図)

全長77.3cm、最大幅24.8cm、船先の基部で推定幅13.5cm、艫で幅17.3cmを測る。櫂座と櫂が貼り付けられた、左右の舷側板が残存する。舷側板の延長にある船先と艫は確認できるが、船底は一部しか残存しない。船先と艫に近い箇所には隔壁が取り付けられ、艫は左右舷側板が接合する。艫側の隔壁は直線状を呈しほぼ垂直に取り付けられるのに対し、船先側の隔壁は湾曲し外傾して取り付けられる。隔壁はともに中央に上方から方形の欠き込みが施される。舷側板がほぼ完形に近い状態で残存しており、櫂座は左右4対ずつと推測される。他に、胎土の類似性から3個体の台がある。

焼成は甘く、胎土も石英質の砂粒を多く含んでいる。色調は様ではなく、船先に行くほど暗い赤褐色をしており、船底に近い付近は一面が黒斑に覆われている。艫付近は明るい赤褐色を呈しており、火の通りが様ではなかったことを示している。船底部の割れ具合から、粘性の低い小さな粘土塊を寄せ集めて製作したものと思われる。

舷側板は内外面ともにケズリで整えられ、とくに外面はケズリの後にナデ消して調整されている。なお、赤色顔料は塗布されていない。

①船先

舷側板と接合しないが、おそらく船先側から1対目の櫂座に連続して接続するものと思われる。左右両舷とも端部が大きく外側へ外反する、特異な形状をしている。この点も、現実には波浪に叩かれてしまうことから、実際の構造を忠実に模したものは考え難く、埴輪製作者の意匠によるものと思われる。

外反箇所の手前に突起が貼り付けられているが、櫂を表現した突帯は貼り付けられておらず、また舷側板に認められる櫂座とは形状が異なることから、性格は不明である。

②艫

左右両舷とも、舷側板がそのまま上部構造物を形成する、通有の構造をしている。先端をやや鋭角に仕上げ、約30°ほどの角度で反り上がる。先端から7cm程内側へ入った箇所には隔壁が取り付けられており、接合のための孔があげられている。艫の角度はほとんどなく、垂直に近い。

操舵櫂を表現した突帯は貼り付けられていない。

船底部分の復元が困難なため、艫の舷側板と上部構造物が一体式か分離式か不明であるが、隔壁の剥離痕から一体式の可能性が高い。

③舷側板

内面は舷側板を意識した表現をしているが、外面に舷側板表現はない。

櫂座が取り付けられているほか、櫂座の直前に同様の突起があり、船底部に帯状に延びることから櫂を

表現したと判断される。權座、權ともに舷側が開く角度に傾斜して取り付けられている。

舷先から3番目と4番目の權座の間に孔が開くが、隔壁が取り付けられた痕跡はなく、隔壁は舷先と舷の2箇所のみと考えられる。

左舷側ほぼ中央の船縁にはヘラ状の工具によると考えられる線刻文が付される。

④船底

胎土や焼成状態から船底と考えられる破片があり、ごく一部分のみが残存している。平坦面に径3.3cmの円形の孔が開けられ、舷側板へつなげると考えられる屈曲部を有している。孔は水抜き孔もしくは装飾部品装着用の孔と考えられる。孔の中心から舷側板への屈曲部まで6.0cmを測ることから、孔は船体のほぼ中央底部に位置するものと考えられる。調整から、平坦な側が内面と考えられる。内面はハケナデが施されるが、外面は欠損する。

⑤座板

船底部の復元ができず、漕ぎ手の座板等の表現は確認できない。

⑥台（第15図2～4）

台はいずれも楕円筒形を呈し、径の大きな台1（第15図2）と、小さな台2（同3）・台3（同4）とがある。台2と台3はそれぞれ短側面中央に孔が少なくとも1孔空けられており、孔の位置からみて別個体と考えられる。それぞれ胎土に粗大な石英・長石粒を含む。

台1は長径18cm・短径16.2cm、残存高7.5cmで、調整の方向や、粘土の土圧による潰れやみ出しがみられることから、底部側が遺存する。外面下端付近が黒色を呈する。調整は内面ハケナデ、外面ケズリ後ナデが施される。

台2は推定で長径9.9cm・短径8.1cm、残存高18.5cmを測る。一端が残存しており、長側面側の端部が短側面側に比べ6mm高くなっている。また反対側は裾がやや開いており、端部側が、上面側が遺存する。調整は内面ナデ、外面ケズリ後ハケナデが施される。上端はナデ調整され、殊に短側面側が丁寧にナデられ、平滑に仕上げられている。船体に接合されていたのではなく、別作りと考えられる。

台3は遺存状態が悪く、長径・短径とも不明であるが、湾曲具合からみて台2と同程度の大きさと考えられる。調整の方向とやや裾が広がることから上下方向を判断した。残存高15cmを測る。孔は外側の径が内より大きく、台2と同様粘土のみみ出しがある。孔の右下に断面U字状の垂下する沈線が付される。内面は遺存せず、外面ハケナデされる。

台2・台3の孔がほぼ中央に開けられているとすれば、推定高は23.0cm程度となる。

台は大形のもの1点、小形のもの2点という構成からみて、台1が中央、台2・台3がその前後に配され、上に船体が乗せられたと考えられる。置き据えた際の安定性を考慮すると、短軸方向が船体の軸線に乗るものと考えられる。

⑦その他

第13図3は胎土から船形輪軸の一部と考えられるものの、具体的な部位は特定できない。図右側が湾曲からみて外面側にあたる。舷側板と形状を異にし、開けられた孔も舷側板のそれとは異なる。孔は内面側の方が径が大きい。隔壁の一部とも考えられるが、舷側板内面には接合箇所は見出せず、詳細は不明である。

(2) 人物 (第14図1～3)

単体の、いわゆる「人物埴輪」ではない。全長が小さく、頭部が極端に大きい3頭身であること、足裏に剥離痕が認められることから、何らかの付属品と考えられる。色調が船に類似することから船に付属していた可能性が高い。上述したように船底部がほとんど残存しないため接合せず、確証はない。背面と左側面の大半が欠損する。

全体は、頭・顔・頸・腕・胸・腰・脚に分けられる。顔と頸は、頭と肩をつなぐ役割を果たしているが、実際には口を構成しており、上唇が顔面、下唇が頸に相当する。胸の上部は上腕を兼ね、頸を差し込んだ後に、肩直下に腋穴を開いたものと思われる。腰は2本の脚をつなげる役割を果たし、さらに胸が上から差し込まれている。

次に計測値は以下のとおりである。全長28.0cm、頭・顔部—長9.5cm・幅9.7cm・厚7.8cm、頸部—幅6.3cm・厚5.5cm、胸部—(腋の下からの)長6.8cm・幅(下腕)1.4cm・厚(同)3.0cm、胸部—(帯上端までの)長5.8cm・厚7.5cm、脚部—(股下)長7.0cm・幅(踵)2.5cm・厚5.7cm、帯上端から踵までの長13.0cmを測る。

色調は船の樋付近によく似ている。また、粘性の低い小さな粘土塊を寄せ集めた作りをしている。

全面にケズリ調整がかけられているが、顔面と胸を除けばナデ消されていない。また、頭頂部はほとんどケズリ調整がかけられておらず、板オサエによる成形がそのまま残されている。

①頭部

やや前よりに取り付けられているため顎が作り出されず、肩の上に直接頭部が載る。また、頭頂部は大きく穴が開けられているが、周囲に剥離痕などはなく、おそらく焼成時に火の通りをよくするためのものと思われる。

側頭部に大きく耳穴を開きさせ、美豆良と一体となった耳たぶを穴の周りに貼り付けてある。美豆良はいわゆる上げ美豆良である。耳環の表現はない。

顔面は別に粘土板を作ることなく、頭部に直接目と口を開け、眉鼻を貼り付ける。口は何事かを喋っているかのように大きく開口させ、鼻の下にほとんど接している。

鼻と眉は一体化したT字形の粘土板を貼り付けるが、鼻梁は窪ませている。

眉から数本の沈線が認められるが、ハケの端部で軽くつけたようなものであるため、頭髪か刺青を表現したものか明確ではない。中央部の長めの沈線は頭髪の分け目を表す可能性もある。

②胸部・腕部

後肩部が頸との間に段差を設けているため、段差のなくなった胸前に断面三角形の突帯を貼り付け、後部の段差を延長させている。整領(あげくび)の表現と考えられる。

腕は右腕のみが接合するものの、両腕が出土している。おそらく、右腕は下へ下げ、左腕(第14図2)は前へ水平に差し出し、肘ないし手首で胸前側へ折り曲げる姿勢を取っていたものと思われる。また、左腕は折り曲げた中間部分が大きく窪んでおり、操舵櫂か何か、持物を持たせていた可能性がある。

腰は大きめの帯で表現しており、胸部に沈線や赤彩といった装飾は認められない。

③脚部

2本の短めの円筒で表しており、足裏には剥離痕と接合のナデつけが認められる。右足外側縁と左足爪先に接合の粘土が残存する。帯下に、大刀や鞘といった付属物が貼り付けられていた痕跡はない。

服装は禰かと考えられるが、確認はできない。

左足は高さ4cmほどの粘土帯2段構成、右足は高さ5cmの基台の上に1cm幅の短い粘土帯を縦ぎ足して腰に接続していることから、おそらく左足を先に製作したものと思われる。

④その他

第14図3は胎土・色調や立体的な表現から人物の一部であると考えられるが、胴部には接合しそうな箇所は見出せない。部位等詳細は不明である。

(3) かさ状製品 (第15図1)

飾りなどの突起物が一切なく、区画線なども認められないことからかさ状製品としたが、蓋を表したものの可能性もある。そのサイズと、柄の底部に差し込んだような刺痕が認められること、色調が船の爐付近に類似していることから、船に付属した可能性が高い。

傘部外面はケズリ後同心円状にハケナデが、また端部はナデが施されているが、下面は軸棒を接続する箇所にはナデ痕が認められるのみで、とくに調整されたようには見られない。また、軸棒はナデなどの調整はなく、手捏ねによる成形のみである。

(4) 家形埴輪

形状や胎土・調整・焼成からみて3個体が出土しているが、大部分が家形埴輪1の破片である。

1) 家形埴輪1 (埴図16~20)

家形埴輪1は堅魚木・千木・棟持柱を備えた大型の建物であり、屋根・壁面・棟持柱に様々な装飾が施され、特殊な性格を有する建物と考えられる。屋根と身舎が別に作られて組み合わせられるもので、身舎は二階建てと考えられる。

屋根の片側と、壁の一部が出土している。壁は底部・戸口などいくつかの部品は残存するが、全体形状が復元できる程には接合しない。屋根は鍛造りで、千木と堅魚木を載せ、さらに棟持柱が大棟に取り付けられる。軒は鋸歯文が沈線を描かれ、一部には騎を模したものとも思われる円形鋸歯文が装飾される。壁は大壁式で、矢羽根文・鋸歯文を沈線で描いた突帯を格子状に貼り付ける。突帯で区切られた空間には、窓が互い違いに開けられる。沈線は断面V字状を呈しており、へら状工具によると考えられる。

色調は全体に明るい赤褐色を呈しており、屋根と壁底部付近は白色に近い箇所も認められる。黒斑は少ない。戸口付近は赤褐色に近く、棟持柱のある正面から離れた箇所に入出口が設けられていた可能性がある。また、全体にケズリ調整が施されているが、正面および壁の突帯に囲まれた空間はナデ消されている。船形埴輪と同様、赤色顔料は塗布されていない。

①屋根 (第16図3・第17図)

屋根一面に、屋根覆を表す綾文が描かれている。縦方向のラインは、沈線のある突帯と平行沈線が交互に繰り返しており、屋根覆の押えと垂木を区別して表現しているものと思われる。縦の平行沈線の間には径1.5mm前後の孔が3箇所以上にあげられており、乾燥時の支え棒を入れた痕跡と思われるが、完成時の装飾も計算したのかもしれない。正面に向かって左側面の屋根の孔は破風の大棟・入側桁・側桁およびその間に開けられた孔ときちんと対応するのに対して、右側面側の孔は入側桁との対応が崩れ

ている。左側面側が正面に準じて扱われたものと考えられる。第16図3は孔の開け具合からみて、右側面側と考えられる。孔は石見型の盾に施される孔との関連が想定される。

屋根上部には棟覆が貼り付けられており、さらに堅魚木が載る。大棟は家の長辺を縦貫するような粘土棒を中心とし、その左右に上から棟覆を載せ、下に屋根の支えを当てる。屋根支えは左右それぞれに持つが、接合点が大棟直下に来て落ち込まないよう、左側をやや長めに作ってある。屋根本体は棟覆と屋根支えの間に挟み込むようにして固定し、棟覆には屋根本体と同じく孔があげられる。

軒は屋根下端に取り付けずに壁の上部に貼り付けられ、壁とともに屋根に接合する。したがって、扉と壁の間に隙間はない。

第18図4は妻側の鋸屋根と思われる台形の破片で、直弧文が描かれる。側面観が屋根の傾斜に等しく、かつ梁と思われる部材が貼り付けられていることから、屋根の軒先の一部と考えられる。中央に、径4cmの穴が開き、その周囲に車輪文、さらに鋸歯文が配置される。中央孔上部の小孔は内外面両側から穿たれるが、それぞれ途中で止まる。外面および中央孔内側は丁寧にナデ調整される。なお、剥離のため詳細ははっきりしないが、おそらく上面になんらかの部品が載っていたものと思われる。

②屋根飾り (第17図)

屋根飾りには、堅魚木、千木などが使われている。殊に妻側に多くの線刻文が施され重点が置かれている。千木は本来破風板の延長で交差部に段表現がみられるものであり、本例は忠実に表現したものとは言いがたい。適当な呼称も見つからないことや、部位からひとまず千木としておく。

堅魚木は厚さ2cm、幅12cmの粘土板を巻いた中空式のもので、最大径5cmの円筒形を呈している。2本以上の堅魚木が取り付けられている大棟は残存しないが、間隔はおよそ10cm前後と思われる。第17図の堅魚木は右側面に比して左側面からの穿孔の脚が長くなっている。この穿孔の脚が長い側は、第16図1では図右端側、同2では配置図右にあたる。

破風は屋根の厚みよりも、若干幅が広くなっている。破風板は直線の幅が狭く、畿內的でない、網代文が施され、大棟と入側桁2本、その下位の側桁2本が網代文を描いた後に取り付けられている。いずれも半円形で、凹面によって二重半円が表現されている。棟木の間には孔があげられ、最上部のものは破風を突き抜けて屋根まで達している。

屋根上部には千木が取り付けられている。線刻文様から、破風の網代の延長と考えられる。破風は棟覆の位置で一度押えられ、さらに大棟に近い内側のみを束ねて左右をつなぎ、残りは外側へ解けるに任せた形状をしている。したがって、破風の網代は左右別々に作りつけたのではなく、本来1枚のものを棟の上で折り曲げたもので、千木がデフォルメされたものと考えられる。

大棟は入側桁・側桁と同じく二重半円形だが、下面に沈線が描かれ、孔があげられている。沈線は単なる装飾か、あるいは斗束を意図したものであろうか。

大棟の直下には、棟持柱が取り付けられている。

③棟持柱

棟持柱は屋根に挟まれた上半部分が残存するのみだが、正面2箇所にて径3×2cmの楕円形の孔が開けられ、孔を中心に線刻文が描かれている。斗束は表現されていない。棟持柱裏側には縦方向のケズリが施され、その後ナデ等の調整が施された痕跡はない。正面に開けられた孔は、実用性を離れ装飾性が重視されている。中空化の故かもしれない。上段の孔は入側桁に対応する位置にあたる。

④壁体

大壁式で、突帯が縦横に貼り付けられている。隅柱・縦材は突帯で表現されており、横位の突帯も草葺きの押縁表現ではなく、横架材の表現と考えられる。横架材が隅柱や縦材より一段低く表現され、組物に忠実な表現がなされている。隅柱は斜め外側を向く。横架材には矢羽文、縦材には2本の線刻に挟まれた鋸歯文が描かれるが、妻側の縦材には第19図のとおり斜格子が描かれ、妻側と平側で表現を変えていると考えられる。壁の高さは不明だが、最低でも3段の横突帯を持つものと思われる。

第18図1は底部が遺存するもので、平側と考えられる配置図左の中段と下段には、窓が互い違いに開けられている。妻側上段には縦に沈線が1条描かれており、合わせ扉の表現である可能性もある。底部付近は黒色を呈する。

第19図は内面に指おさえ痕を明瞭にとどめる。縦材の沈線の描き順は、第18図1が鋸歯→縦沈線であるのに対して、第19図のそれは縦沈線→鋸歯となっている。

第20図1は壁体の上端に軒が取り付けられ、壁の縦突帯と同じ2本の沈線に挟まれた鋸歯文が施されている。軒の出は小さく、突帯の貼り付け方は乱雑で、正面向かって右側の平側にあたると思われる。縦材の沈線の描き順は縦沈線→鋸歯である。内面はコーナーに比べ、ケズリ後ナデでやや平滑に仕上げられる。

第18図2は横架材の表現とみられる突帯が上部に貼付されており、右側面図の右側縁は窓枠と考えられる。

⑤出入口

第19図は出入口を模した破片で、底部付近のコーナーに隣接して設けられており、鴨居が表現される。

⑥床

壁体の内面には床が接合された痕跡は認められず、また、床と考えられる破片も見つかっていない。

⑦その他

第18図2・3は胎土から家形埴輪1の部分と考えられる。2は上部に横架材と考えられる突帯が貼付される。配置図右は妻側で、右側縁は窓枠と考えられる。3は直弧文が付されることから妻側で、破風の一部分とも考えられるが、詳細は不明である。

2) 家形埴輪2 (第18図5、第21図1~3)

芯壁式と考えられるもので、壁体が膨らむこと、胎土や焼成が家形埴輪1と異なること、出入口の形式が異なることから、家形埴輪1とは別個体である。

①出入口

第21図1は平側の上段付近と思われ、柱を挟んで左右に窓が隣接する。切り欠きがあり、内側に開く通有の型式である。直下に突帯がめぐっているが、底部の破片に突帯が認められないことから、戸口下部にのみ設けられたバルコニー状施設を模したものであると思われる。柱には矢羽文が線刻で施されている。切り欠きは後から嵌め込まれたもので、上面には4箇所沈線が、また外面に斜位の沈線が施される。柱の内面側に粘土がはみ出す。

②その他

第21図2は突帯の形状と胎土から、3は胎土からそれぞれ家形埴輪2と同一個体と考えられる。前者

は横架材、後者は縦材を表すと考えられるが、位置は不明である。

3) 家形埴輪3 (第20図2)

家形埴輪の部分と断定できる材料はないが、第20図2は屋根飾りの一種かと考えられる。左側の頂部を欠損しており、左右1対の三日月形の孔が開けられている。孔の両側には縦3本の浅い沈線が付される。円柱状を呈する部分の両端はナデが施されており、円柱接合部と反対側下端に剥離した面がある。三日月形の孔が開けられている部分が千木から転化したもの、円柱状を呈する部分が堅魚木の可能性が高い。

他に、同じ胎土の特徴を有する壁体破片が出土している。

(5) 朝顔形埴輪 (第14図4)

朝顔形埴輪の頭部が出土している。欠損破片はほとんどないが、隣り合う破片で色調が大きく異なるものがあり、破損後二次焼成を受けたと考えられる。

(6) 円筒埴輪

朝顔形埴輪と胎土の異なる箇所部分が出土しており、円筒埴輪の部分と考えられる。

第V章 飯田市周辺天竜川流域出土埴輪の胎土分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

飯田市周辺の天竜川流域には、およそ5～6世紀頃の古墳が比較的多く分布している。これらの古墳からは埴輪が出土しているが、この地域における埴輪の生産や供給状況については不明なことが多い。さらに最近行われた川路地区に所在する殿村遺跡では、竪穴から家形埴輪や船形埴輪が出土し、調査地点の近くに埴輪窯が存在することが想定され、この地域における埴輪の生産に関わる遺跡である可能性が指摘されている。また、殿村遺跡の近傍の正清寺古墳からは殿村遺跡と同様の家形埴輪が出土していることから、両遺跡間の関係も注目されている。

今回の分析調査では、これらの遺跡から出土した埴輪を含めて、飯田市周辺の天竜川右岸各地に分布する古墳から出土した埴輪の材質すなわち胎土の特徴を把握し、本地域における埴輪の生産と供給状況を解明するための資料を作成する。また、今回は、比較対照試料として7～8世紀とされる瓦窯跡から出土した瓦片と、古墳時代の集落遺跡から出土した土師器甕を加え、埴輪の分析結果との比較を行う。

1. 試料

試料は、飯田市周辺の天竜川右岸に分布する古墳および集落遺跡から出土した埴輪片35点と、対照試料として選択された金井原瓦窯址出土の瓦片1点および開善寺境内遺跡出土の古墳時代中期後半～後期前半とされる土師器甕の破片1点の合計37点である。なお、各試料には仮試料No.として番号が付されており、本報告においてもこの番号を試料番号として用いる。なお、本文中では単にNo.とのみ表記する。今回の試料のうち埴輪片はNo.1～35であり、瓦片はNo.42、土師器片はNo.46である。

2. 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉碎による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。前者の方法は、縄文土器、弥生土器および土師器のような比較的粗粒の砂粒を含み、しかも比較的低温焼成のため鉱物の変質が少ない胎土の土器の分析に有効であり、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。また、後者の方法は土器の材質（種類）に拘わらず、再現性の高い数値によるデータが得られる。ここでは、試料が埴輪であることから、重鉱物分析を用いて試料間のデータを比較検討する。以下に分析の処理過程を述べる。

試料は、適量をアルミナ製乳鉢で粉碎、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4mm～1/8mmの粒子をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物のプレバートを作製した後、偏光顕微鏡下にて同定した。鉱物の同定粒数は、250個を目標とした。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを「不透明鉱物」とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。

3. 結果

分析結果を第1表、挿図31に示す。今回の試料の重鉱物組成は、斜方輝石、角閃石、不透明鉱物のいずれかが優占し、また試料によっては、ジルコンあるいはザクロ石が少量ながらも特徴となる組成を示すものもある。これらの鉱物の組み合わせとその量比から、今回認められた重鉱物組成は、以下のように分類整理することができる。

a類：不透明鉱物が多く、少量～中量の角閃石を伴い、微量または少量のジルコンを含む。これに分類される試料は、No.1～4、14～16の7点である。

b類：a類と同様に不透明鉱物が多く、少量～中量の角閃石を伴うが、微量または少量の斜方輝石とザクロ石を含むことでa類と区別する。これに分類される試料は、No.9、10、13、17の4点である。

c類：不透明鉱物と角閃石がほぼ同量程度で多く、微量または少量の斜方輝石、ザクロ石、ジルコン、緑閃石などの鉱物を伴う。これに分類される試料は、No.23～25、29、31の5点である。なお、No.29は「その他」とした変質粒が多いが、これは焼成による影響であることが考えられることから、焼成以前の状態（「その他」を除いた組成）を考慮してc類とした。

d類：斜方輝石、角閃石、不透明鉱物の3鉱物を主体とする組成。これらの中では、不透明鉱物が多い。これに分類される試料は、No.28、30の2点である。

e類：角閃石が多く、少量～中量の不透明鉱物を伴い、微量または少量の斜方輝石やジルコンなどを含む。これに分類される試料は、No.7、8、18、46の4点である。

f類：角閃石が多く、少量または中量の斜方輝石と不透明鉱物を伴い、微量または少量のザクロ石を含む。これに分類される試料は、No.11、12、19～21の5点である。

g類：角閃石が多く、少量または中量の斜方輝石と不透明鉱物を伴い、微量または少量のジルコンとザクロ石を含む。これに分類される試料は、No.26、27、34、35の4点である。

h類：斜方輝石と角閃石が同量程度に多く、少量の不透明鉱物と微量の単斜輝石を含む。これに分類される試料は、No.22の1点のみである。

i類：斜方輝石、角閃石、不透明鉱物の3鉱物が多く、少量の単斜輝石、ザクロ石、緑閃石、電気石を伴う。これに分類される試料は、No.5、6の2点である。

j類：斜方輝石が多く、少量の単斜輝石、角閃石、不透明鉱物を伴う。これに分類される試料は、No.32、33の2点である。

k類：「その他」とした変質粒がほとんどであり、わずかに角閃石が同定される。これに分類される試料は、No.42の1点のみである。

4. 考察

今回の分析結果より、飯田市周辺の天竜川流域出土の埴輪には、a～k類までの11種類の胎土が存在することがわかった。これを古墳ごとにもみると、胎土の異なる埴輪が混在しているのは、全13基のうち、塚原二子塚古墳、内山塚古墳、妙前大塚古墳、北本城古墳、高岡1号墳の5基である。この数字だけからみれば、胎土の異なる埴輪が混在する古墳は少ないとはいえない。今回の古墳出土の試料は全て円筒埴輪であるから、形態等による材質選択の可能性は少ない。すなわち、これらの胎土の違いは、製作地

0 50 100

船士	通船別	運船別	地区	運船名	船号	通船名	その他の記	運船の時期
1	田							
2		集落	川路	船形通船	TNM	SB01		6世紀前半
3	a	集落	川路	船形通船	TNM	SB01		6世紀前半
4	a	集落	川路	船形通船	TNM	SB01		6世紀前半
5	i	古墳	川路	長行通船	TNM			5世紀末～6世紀初
6	i	古墳	川路	正明寺古墳	KB E 953-3	内周	S D 15 A D 43	5世紀末～7世紀初
7	e	古墳	川路	正明寺古墳	KB E 953-3	内周	S D 15 A R O D 陶磁	5世紀末～7世紀初
8		集落	三郷	堀山古墳			赤塚	
9		古墳	三郷	堀山古墳			赤塚	
10	b	古墳	電丘	御室古墳	OSDK		赤塚, Rm. N (後円部北)	6世紀前半～中頃
11	b	古墳	電丘	御室古墳	OSDK		赤塚, Rm. N (後円部北)	6世紀前半～中頃
12	f	集落	電丘	高の原通船	KNT		B C 26 織土	
13	b	古墳	電丘	高の原通船	KNT		B 1 2 6 織土	5世紀末～6世紀初
14	a	古墳	電丘	堀二子遺古墳	TKB K 1	外周	A ~ E 26 織土	5世紀末～6世紀初
15	a	古墳	電丘	堀二子遺古墳	TKB K 1	外周	A ~ E 25 ~ 27	5世紀末～6世紀初
16	a	古墳	電丘	堀二子遺古墳	TKB K 1	内周	A O 20 灰土	5世紀末～6世紀初
17	b	古墳	電丘	内山遺古墳	TKB K 2	周溝		5世紀末～6世紀初
18	f	古墳	電丘	内山遺古墳	TKB K 2	周溝		5世紀末～6世紀初
19	f	古墳	松尾	代田獅子遺古墳	M S S K	堀丘		
20	f	古墳	松尾	代田獅子遺古墳	M S S K	堀丘		
21	h	古墳	松尾	妙見大塚古墳	M Y Z K 3	周溝		5世紀中頃
22	h	古墳	松尾	妙見大塚古墳	M Y Z K 3	周溝		5世紀中頃
23	c	古墳	上郷	栗口の遺古墳	M Z K K	内周	F m. N (前方部北)	5世紀後半 (3/4)
24	c	古墳	上郷	栗口の遺古墳	M Z K K	内周	A C 30	5世紀後半 (3/4)
25	c	古墳	上郷	栗口の遺古墳	M Z K K	内周		5世紀後半 (3/4)
26	e	古墳	鹿光寺	新井原 2 号古墳	A R B K 2	外周	O d	5世紀後半
27	d	古墳	鹿光寺	新井原 2 号古墳	A R B K 2		D 28 a, 30 d 扉土積層	5世紀中頃
28	d	古墳	鹿光寺	北本城古墳	K H J K		西側	5世紀中頃
29	d	古墳	鹿光寺	北本城古墳	K H J K		北側	6世紀初～前半
30	d	古墳	鹿光寺	高田 1 号古墳	K H J K		赤塚	6世紀前半
31	c	古墳	鹿光寺	高田 1 号古墳	K H J K		赤塚	6世紀前半
32	j	古墳	鹿光寺	高田 4 号古墳	T K O K 4	周溝	A 1 B a 漆黒	5世紀後半
33	j	古墳	鹿光寺	高田 4 号古墳	T K O K 4	周溝		5世紀後半
34	e	古墳	鹿光寺	鎌田 1 号古墳			赤塚	6世紀前半
35	k	古墳	鹿光寺	堤 1 号古墳			赤塚	6世紀前半
42	k	集落	鹿光寺	赤井 互 塚址	UNO	KNGY1	B M 1 産	7 ~ 8 世紀
46	e	集落	電丘	同集落内遺跡	K Z K, N	S B 10	A Y 10	古墳時代中期後半～後期前半

船形通船
 長行通船
 正明寺古墳
 堀山古墳
 御室古墳
 高の原通船
 堀二子遺古墳
 内山遺古墳
 代田獅子遺古墳
 妙見大塚古墳
 栗口の遺古墳
 新井原 2 号古墳
 北本城古墳
 高田 1 号古墳
 高田 1 号古墳
 高田 4 号古墳
 鎌田 1 号古墳
 堤 1 号古墳
 赤井 互 塚址
 同集落内遺跡
 船形通船
 長行通船
 正明寺古墳
 堀山古墳
 御室古墳
 高の原通船
 堀二子遺古墳
 内山遺古墳
 代田獅子遺古墳
 妙見大塚古墳
 栗口の遺古墳
 新井原 2 号古墳
 北本城古墳
 高田 1 号古墳
 高田 1 号古墳
 高田 4 号古墳
 鎌田 1 号古墳
 堤 1 号古墳
 赤井 互 塚址
 同集落内遺跡
 船形通船
 長行通船
 正明寺古墳
 堀山古墳
 御室古墳
 高の原通船
 堀二子遺古墳
 内山遺古墳
 代田獅子遺古墳
 妙見大塚古墳
 栗口の遺古墳
 新井原 2 号古墳
 北本城古墳
 高田 1 号古墳
 高田 1 号古墳
 高田 4 号古墳
 鎌田 1 号古墳
 堤 1 号古墳
 赤井 互 塚址
 同集落内遺跡
 船形通船
 長行通船
 正明寺古墳
 堀山古墳
 御室古墳
 高の原通船
 堀二子遺古墳
 内山遺古墳
 代田獅子遺古墳
 妙見大塚古墳
 栗口の遺古墳
 新井原 2 号古墳
 北本城古墳
 高田 1 号古墳
 高田 1 号古墳
 高田 4 号古墳
 鎌田 1 号古墳
 堤 1 号古墳
 赤井 互 塚址
 同集落内遺跡
 船形通船
 長行通船
 正明寺古墳
 堀山古墳
 御室古墳
 高の原通船
 堀二子遺古墳
 内山遺古墳
 代田獅子遺古墳
 妙見大塚古墳
 栗口の遺古墳
 新井原 2 号古墳
 北本城古墳
 高田 1 号古墳
 高田 1 号古墳
 高田 4 号古墳
 鎌田 1 号古墳
 堤 1 号古墳
 赤井 互 塚址
 同集落内遺跡
 船形通船
 長行通船
 正明寺古墳
 堀山古墳
 御室古墳
 高の原通船
 堀二子遺古墳
 内山遺古墳
 代田獅子遺古墳
 妙見大塚古墳
 栗口の遺古墳
 新井原 2 号古墳
 北本城古墳
 高田 1 号古墳
 高田 1 号古墳
 高田 4 号古墳
 鎌田 1 号古墳
 堤 1 号古墳
 赤井 互 塚址
 同集落内遺跡
 船形通船
 長行通船
 正明寺古墳
 堀山古墳
 御室古墳
 高の原通船
 堀二子遺古墳
 内山遺古墳
 代田獅子遺古墳
 妙見大塚古墳
 栗口の遺古墳
 新井原 2 号古墳
 北本城古墳
 高田 1 号古墳
 高田 1 号古墳
 高田 4 号古墳
 鎌田 1 号古墳
 堤 1 号古墳
 赤井 互 塚址
 同集落内遺跡
 船形通船
 長行通船
 正明寺古墳
 堀山古墳
 御室古墳
 高の原通船
 堀二子遺古墳
 内山遺古墳
 代田獅子遺古墳
 妙見大塚古墳
 栗口の遺古墳
 新井原 2 号古墳
 北本城古墳
 高田 1 号古墳
 高田 1 号古墳
 高田 4 号古墳
 鎌田 1 号古墳
 堤 1 号古墳
 赤井 互 塚址
 同集落内遺跡
 船形通船
 長行通船
 正明寺古墳
 堀山古墳
 御室古墳
 高の原通船
 堀二子遺古墳
 内山遺古墳
 代田獅子遺古墳
 妙見大塚古墳
 栗口の遺古墳
 新井原 2 号古墳
 北本城古墳
 高田 1 号古墳
 高田 1 号古墳
 高田 4 号古墳
 鎌田 1 号古墳
 堤 1 号古墳
 赤井 互 塚址
 同集落内遺跡
 船形通船
 長行通船
 正明寺古墳
 堀山古墳
 御室古墳
 高の原通船
 堀二子遺古墳
 内山遺古墳
 代田獅子遺古墳
 妙見大塚古墳
 栗口の遺古墳
 新井原 2 号古墳
 北本城古墳
 高田 1 号古墳
 高田 1 号古墳
 高田 4 号古墳
 鎌田 1 号古墳
 堤 1 号古墳
 赤井 互 塚址
 同集落内遺跡
 船形通船
 長行通船
 正明寺古墳
 堀山古墳
 御室古墳
 高の原通船
 堀二子遺古墳
 内山遺古墳
 代田獅子遺古墳
 妙見大塚古墳
 栗口の遺古墳
 新井原 2 号古墳
 北本城古墳
 高田 1 号古墳
 高田 1 号古墳
 高田 4 号古墳
 鎌田 1 号古墳
 堤 1 号古墳
 赤井 互 塚址
 同集落内遺跡
 船形通船
 長行通船
 正明寺古墳
 堀山古墳
 御室古墳
 高の原通船
 堀二子遺古墳
 内山遺古墳
 代田獅子遺古墳
 妙見大塚古墳
 栗口の遺古墳
 新井原 2 号古墳
 北本城古墳
 高田 1 号古墳
 高田 1 号古墳
 高田 4 号古墳
 鎌田 1 号古墳
 堤 1 号古墳
 赤井 互 塚址
 同集落内遺跡
 船形通船
 長行通船
 正明寺古墳
 堀山古墳
 御室古墳
 高の原通船
 堀二子遺古墳
 内山遺古墳
 代田獅子遺古墳
 妙見大塚古墳
 栗口の遺古墳
 新井原 2 号古墳
 北本城古墳
 高田 1 号古墳
 高田 1 号古墳
 高田 4 号古墳
 鎌田 1 号古墳
 堤 1 号古墳
 赤井 互 塚址
 同集落内遺跡
 船形通船
 長行通船
 正明寺古墳
 堀山古墳
 御室古墳
 高の原通船
 堀二子遺古墳
 内山遺古墳
 代田獅子遺古墳
 妙見大塚古墳
 栗口の遺古墳
 新井原 2 号古墳
 北本城古墳
 高田 1 号古墳
 高田 1 号古墳
 高田 4 号古墳
 鎌田 1 号古墳
 堤 1 号古墳
 赤井 互 塚址
 同集落内遺跡
 船形通船
 長行通船
 正明寺古墳
 堀山古墳
 御室古墳
 高の原通船
 堀二子遺古墳
 内山遺古墳
 代田獅子遺古墳
 妙見大塚古墳
 栗口の遺古墳
 新井原 2 号古墳
 北本城古墳
 高田 1 号古墳
 高田 1 号古墳
 高田 4 号古墳
 鎌田 1 号古墳
 堤 1 号古墳
 赤井 互 塚址
 同集落内遺跡
 船形通船
 長行通船
 正明寺古墳
 堀山古墳
 御室古墳
 高の原通船
 堀二子遺古墳
 内山遺古墳
 代田獅子遺古墳
 妙見大塚古墳
 栗口の遺古墳
 新井原 2 号古墳
 北本城古墳
 高田 1 号古墳
 高田 1 号古墳
 高田 4 号古墳
 鎌田 1 号古墳
 堤 1 号古墳
 赤井 互 塚址
 同集落内遺跡
 船形通船
 長行通船
 正明寺古墳
 堀山古墳
 御室古墳
 高の原通船
 堀二子遺古墳
 内山遺古墳
 代田獅子遺古墳
 妙見大塚古墳
 栗口の遺古墳
 新井原 2 号古墳
 北本城古墳
 高田 1 号古墳
 高田 1 号古墳
 高田 4 号古墳
 鎌田 1 号古墳
 堤 1 号古墳
 赤井 互 塚址
 同集落内遺跡
 船形通船
 長行通船
 正明寺古墳
 堀山古墳
 御室古墳
 高の原通船
 堀二子遺古墳
 内山遺古墳
 代田獅子遺古墳
 妙見大塚古墳
 栗口の遺古墳
 新井原 2 号古墳
 北本城古墳
 高田 1 号古墳
 高田 1 号古墳
 高田 4 号古墳
 鎌田 1 号古墳
 堤 1 号古墳
 赤井 互 塚址
 同集落内遺跡
 船形通船
 長行通船
 正明寺古墳
 堀山古墳
 御室古墳
 高の原通船
 堀二子遺古墳
 内山遺古墳
 代田獅子遺古墳
 妙見大塚古墳
 栗口の遺古墳
 新井原 2 号古墳
 北本城古墳
 高田 1 号古墳
 高田 1 号古墳
 高田 4 号古墳
 鎌田 1 号古墳
 堤 1 号古墳
 赤井 互 塚址
 同集落内遺跡
 船形通船
 長行通船
 正明寺古墳
 堀山古墳
 御室古墳
 高の原通船
 堀二子遺古墳
 内山遺古墳
 代田獅子遺古墳
 妙見大塚古墳
 栗口の遺古墳
 新井原 2 号古墳
 北本城古墳
 高田 1 号古墳
 高田 1 号古墳
 高田 4 号古墳
 鎌田 1 号古墳
 堤 1 号古墳
 赤井 互 塚址
 同集落内遺跡
 船形通船
 長行通船
 正明寺古墳
 堀山古墳
 御室古墳
 高の原通船
 堀二子遺古墳
 内山遺古墳
 代田獅子遺古墳
 妙見大塚古墳
 栗口の遺古墳
 新井原 2 号古墳

第1表 重鉱物分析結果

試料番号	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	角閃石族	黒雲母	ジルコン	ザクロ石	緑レン石	電気石	紅柱石	珪線石	不透明鉱物	その他	合計
1	3	0	21	3	0	0	12	1	0	0	0	0	197	13	250
2	4	2	100	0	3	0	8	1	0	0	0	0	131	1	250
3	5	1	34	0	1	0	3	3	0	0	0	0	201	2	250
4	8	0	47	3	0	0	10	2	0	0	0	0	168	12	250
5	19	4	24	0	0	2	3	6	6	4	0	0	17	23	108
6	81	13	44	2	1	0	2	13	6	4	0	0	62	22	250
7	7	0	179	1	4	0	4	2	2	0	0	0	44	7	250
8	2	0	151	3	3	0	3	0	2	0	0	0	74	12	250
9	10	0	21	1	0	0	5	23	3	0	0	1	144	42	250
10	6	1	37	2	0	0	6	15	20	0	1	0	146	16	250
11	45	5	105	0	0	0	1	6	1	1	0	2	70	14	250
12	16	2	176	6	0	0	0	17	2	1	0	0	26	4	250
13	12	2	52	1	0	0	2	3	0	0	0	0	175	3	250
14	0	0	93	2	0	0	10	1	2	0	0	0	140	2	250
15	3	0	52	0	0	0	12	1	1	1	0	0	176	4	250
16	4	0	14	0	0	0	8	1	4	0	0	0	216	3	250
17	20	0	39	0	0	0	6	23	1	0	1	0	155	5	250
18	3	0	192	10	0	0	3	1	1	0	0	0	36	4	250
19	23	3	89	1	0	0	0	0	2	0	0	0	10	122	250
20	35	0	132	4	0	0	1	4	3	0	0	0	63	8	250
21	18	0	98	34	0	0	0	3	1	0	1	0	47	48	250
22	81	10	81	3	0	0	1	2	2	0	0	0	40	30	250
23	5	1	97	0	1	0	14	3	6	0	0	0	106	17	250
24	7	0	87	4	0	0	5	2	6	0	0	0	123	16	250
25	6	0	108	2	2	0	2	0	4	0	1	1	116	8	250
26	46	7	82	1	0	0	1	6	8	0	0	0	54	45	250
27	78	6	81	0	0	0	4	5	4	2	1	0	44	25	250
28	56	3	42	1	1	0	2	0	6	0	2	0	61	76	250
29	2	0	23	0	0	2	3	3	2	0	0	1	24	170	230
30	47	6	35	0	0	0	2	3	1	2	0	0	116	38	250
31	24	1	81	2	1	0	2	4	9	0	1	0	102	23	250
32	175	21	41	0	0	0	0	0	2	1	0	0	10	0	250
33	175	17	35	0	1	0	2	1	0	0	0	0	16	3	250
34	21	1	98	1	1	0	10	4	4	1	0	0	69	40	250
35	46	1	90	0	5	0	3	3	3	0	1	0	35	63	250
42	2	0	6	2	1	0	0	1	0	1	0	0	2	176	191
46	7	2	188	3	3	0	3	1	0	0	0	0	31	12	250

(者)の違いを反映している可能性がある。そうであるとすれば、複数の製作地(製作者)による埴輪が1つの古墳に供給されていた状況も想定される。今後、分析例を蓄積することにより、埴輪の製作地を複数有する古墳と単独の古墳とが明瞭になれば、古墳の性格を考える上で重要な要素になる可能性がある。なお、今回の分析結果では、殿村遺跡出土埴輪の胎土と正清寺古墳出土埴輪(円筒埴輪ではあるが)の胎土とは異なるものであることが確かめられた。

次に、胎土を地区ごとにみると、天竜川の下流側から、三穂地区はe類、川路地区と竜丘地区を合わせた試料はa、b、e、f、iの各類、松尾地区はf類とh類、上郷地区はc類、座光寺地区はc、d、g、j、kの各類となる。複数の地区に認められる胎土は、e、f、cの各類であるが、いずれも隣り合った地区に認められ、3地区間にわたって認められるような胎土はない。なお、開善寺境内遺跡出土土師器もe類であり、川路地区の胎土として異質ではない。一方、金井原瓦窯址出土瓦の胎土であるk類は、埴輪試料には認められないことから、これは地域性よりも瓦と埴輪の材質(焼成条件も含めて)の違いと言えらる。さて、埴輪の胎土分類と地区の位置関係とが調和的であることは、各胎土に明らかに地域性のあることを示唆している。また、もしこのような地域性が製作地を示すとすれば、埴輪の製作地は各地区間の距離(およそ3~4km)程度の範囲内ごとにあり、この距離を超えて窯から古墳に埴輪が供給されることは、余りなかった可能性もある。

ところで、今回の対象地域は、地質学的には領家帯とよばれる地質の分布域内にある。山田ほか(1990)によれば、今回の各地区が所在する背後の山地は、領家帯の主要な構成要素である花崗岩および花崗閃緑岩からなり、地区ごとに背景となる地質が大きく異なるということはない。したがって、今回認められた胎土の違いは、より局地的な要因を反映していると考えられる。現時点で考えられる局所的な要因の一つとしては、地形を考えることができる。すなわち、下流側の川路、三穂、竜丘の各地区は、花崗岩からなる山地が、すぐ背後まで迫っているが、松尾地区から上流の地区は、更新世に形成された段丘が広く分布している。上記下流側の各地区の試料は、角閃石または不透明鉱物の多い胎土を主とする傾向があり、松尾地区から上流の地区の試料は、斜方輝石が比較的多い傾向がある。角閃石は花崗岩に由来し、斜方輝石は段丘表層の土壌層中に含まれる御岳山を主たる給源とする火山砕屑物に由来すると考えれば、胎土の地域性と地形の違いとが調和する。今後、胎土のもととなった粘土や砂の採取地を特定するためには、実際に各所各層位の自然堆積物の重鉱物分析例を蓄積する必要がある。各胎土の地域性が特定できれば、上述したような埴輪の供給範囲がさらに明瞭になるものと期待される。

第VI章 大荒神の塚古墳

大荒神の塚古墳は傾斜地に築かれた円墳で、『下伊那史 第二巻』（1955年）によれば「約百年前に発掘して直刀を得た」とあり、また、「大正八年十月、鳥居龍藏氏が調査した時に、円筒埴輪の破片一を拾得した。」とある。石室位置や規模、時期等が不明であり、最低限これらを確認する必要がある、確認トレンチを石室と推定される部分1ヶ所、墳丘から周溝にかけて2ヶ所、計3ヶ所を設定した。なお、トレンチで確認された周溝については全掘し、図面・写真等記録の上埋め戻しを行った。

①石室

現況で墳丘南側に祠の基礎の石積みがあり、この部分を中心に確認トレンチを入れて石室の把握を行った。石室用材と考えられる大きな礫は散見されるものの、構築時の位置を保っているものではなく、石室の位置や規模・構造等は不明である。

②墳丘

墳丘と考えられる部分に2本の確認トレンチを入れた。墳丘の北側は近世の鍛冶関連の遺構により削平されており、墳丘の遺存状態は悪い。

③外表施設

墳丘の北側部分に一部分葺石と考えられる円礫の石積みが確認された。この周辺では周溝埋土上層中に礫が集中しており、転落した葺石と考えられる。その間から鉄滓が出土していることから、近世の鍛冶関連施設構築の際に破壊されたと考えられる。

④周溝

墳丘の北側部分で把握された。埋土の上層には転落した葺石が多く入り、中層には洪水起源の黄褐色シルトが堆積していた。墳丘の東側では周溝は確認できず、北側周溝からすると、現況の墳丘よりかなり東側に周溝が巡っていた可能性がある。西側にはほぼ周溝と考えられる位置にSD12がある。埋土は北側周溝のそれとは異なり、また北側周溝とレベル差があったため別遺構としたが、SD12の延長部分が把握されていないことから、周溝の可能性もある。

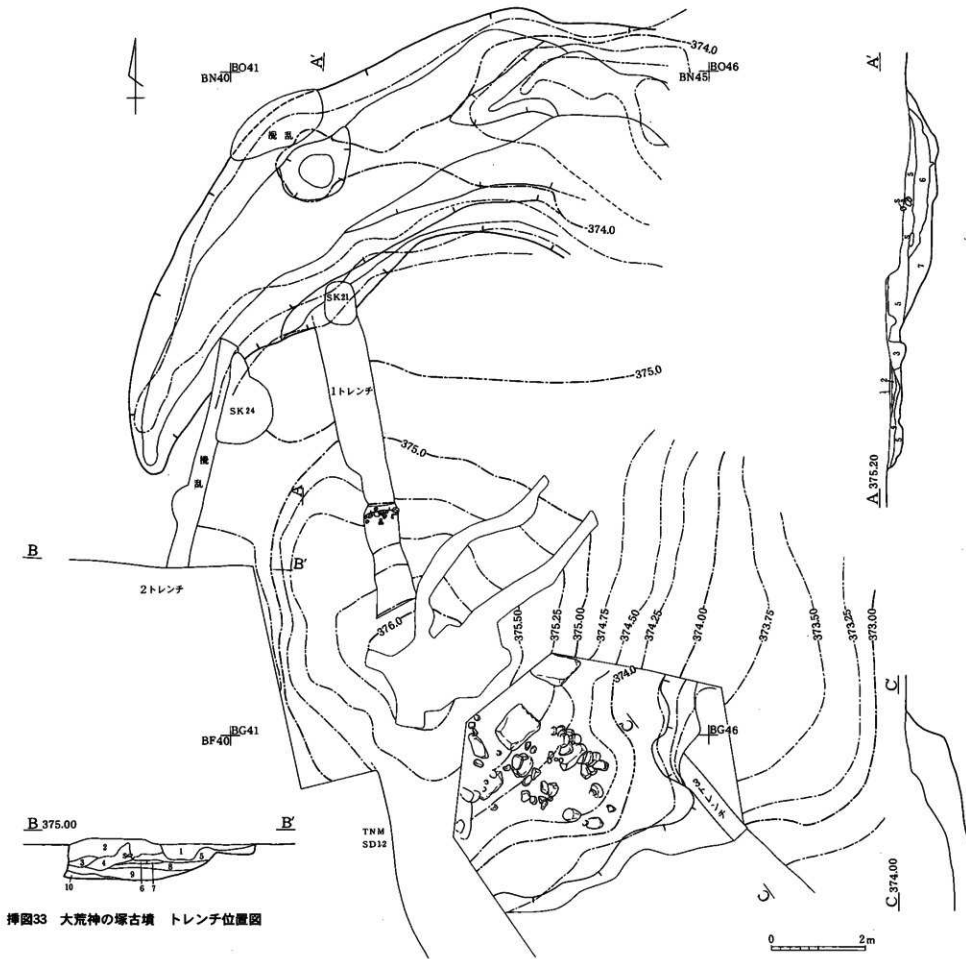
⑤出土遺物（第12図）

周溝埋土各層からの遺物出土がある。【埋土3層】非ロクロ系土師器-高坏・甕A・甕・小型甕【埋土2層】非ロクロ系土師器-坏D・坏・高坏・甕B・甕F・小型甕、須恵器-坏B・甕【埋土1層】坏D2・坏D・高坏・甕F・小型甕B・【小型甕F】・小型甕・【壺】、須恵器-坏B・（坏C）・坏蓋B・坏蓋・甕・【壺】。鍛冶関連遺構からの混入と考えられるものに、鑢羽口・鉄滓・不明鉄製品、陶器播鉢（鉄軸/瀬戸美濃系）がある。他に混入遺物としては縄文土器片、弥生時代中期前半の甕や後期後半の甕、中世の青磁碗片等が出土している。

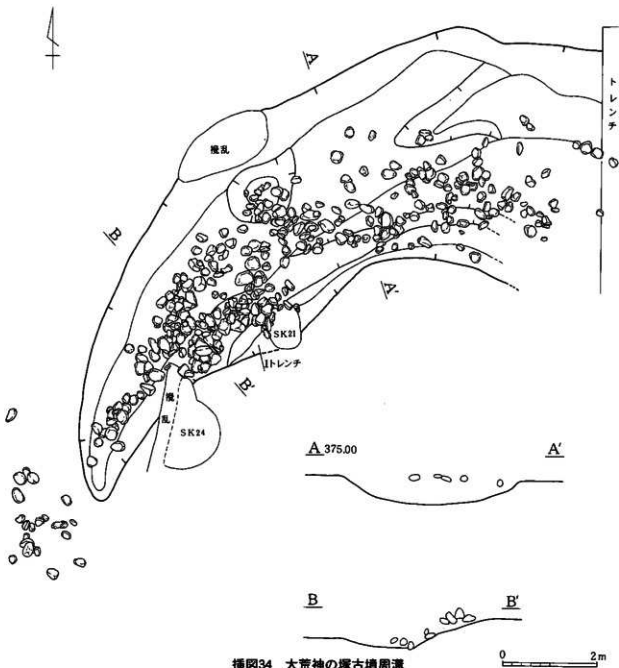
なお、本古墳とSM01の間から円筒埴輪片が出土しているが、本址に伴うものとは考えられない。



博図32 大荒神の塚古墳 現況図



押図33 大荒神の塚古墳 トレンチ位置図



挿図34 大荒神の塚古墳周溝

第VII章 総括

今次の発掘調査ではこれまでみてきたとおりの遺構・遺物が調査され、様々な知見が得られた。その中で、船形埴輪や家形埴輪といった埴輪類と、これらが出土したS B01・S B07という2基の堅穴が特筆されるものである。それらに位置づけを整理し、さらに時代毎の本遺跡の状況をまとめ、総括とした。

第1節 S B01・S B07出土の埴輪について

第Ⅲ・Ⅴ章で詳述したとおり出土埴輪のうち船形埴輪および家形埴輪1にみるべきものがある。

船形埴輪はこれまでに34例ほどの出土が知られており(辰巳 2001)、東日本での出土例は静岡県磐田市堂山2号墳・栃木県真岡市鶯塚古墳があり、他に茨城県新治郡玉里村舟塚古墳出土が伝えられているにすぎない。下部を欠くため構造のすべては不明であるが、舳先・櫓の形状や船縁の櫓座の配置から、準構造船であり、辰巳分類によるA型—「例り船を船底材として、舳先寄りと櫓よりのそれぞれに波避けを兼ねる堅板を立て、舷側板(欄板)を継ぎ足して船体容積を増やした型」—に相当する(辰巳 同前)。本遺跡例は全長77.3cm、最大幅24.8cmを測る。大きさからみて中型品ということができる。

本遺跡の船形埴輪の大きな特徴は、まず舳先と櫓の表現が異なり、区別が明確な点が挙げられる。これまで出土した船形埴輪で舳先・櫓が遺存しているものは、舳先・櫓が同形で区別が付きにくい。本遺跡例は舳先端部が大きく外側へ外反しており、『古事記』垂仁天皇段にみえる「二俣小舟」を連想させるものである(吉川弘文館刊 1991、岩波書店刊 1982)。

第2は人物が船に乗ると考えられることである。船体と人物の具体的な接合箇所は見出せなかったものの、胎土や出土状況からみて船に乗ることは疑いない。これまで船に人物が乗る例は確認されておらず、古墳壁画等絵画資料にみられる世界を具象化したものといえる。

第3に櫓座とともに櫓が表現されている点である。櫓座の表現のあるものは宮崎県西都原169号墳や大阪市平野区高廻り1・2号古墳等に例があるが、櫓の表現のあるものはない。

第4は船体が(横)円筒台に乗ると考えられる。台部については2個の例が多いが、大阪府南河内郡河南町寛弘寺古墳に3個の例がある。ただし、台の大きさが異なる例はないことから、さらに慎重な検討を要する。

第5は左舷上部中央に線刻が施されることである。線刻の類例が見あたらないが、強いて挙げれば宝塚1号墳例で下段舷側板の上下突帯間に付された方形張付への「X」の線刻くらいであろうか。ただ、宝塚1号墳例が丸木の底部と舷側板をつなぐ補強材と考えられる(福田 2001)のに対し、本遺跡例は船縁に施されたものであることから船側の装飾、あるいは葬送に関わる何か象徴的な図柄であると考えられる。

全体として、船体に施された装飾は高廻り2号古墳や三重県松坂市宝塚1号古墳に比較して暖味・単純・粗雑であり、飾り立てられた『王の船』とは印象を異にする。しかし、舳先の装飾からみて「飾り船」であること、蓋とも考えられるかさ状の土製品が伴うことや、湖沼地帯を除く内陸では考え難い準

構造船であることから、『王の船』として作られたものと考えられる。

次に年代については、共存する円筒埴輪について検討が困難であることから、各埴輪にみられる特徴で製作年代を推定していきたい。

船形埴輪は大阪府高槻市塚廻り古墳や、真岡市鶏塚古墳・玉里村舟塚古墳例が6世紀代に下る以外は4世紀後半～5世紀に位置づけられている。人形の土製品は人物埴輪伝播の最初期に位置づけられるとされている。腕の製作技法は中実技法であり、5世紀中葉の県内長礼山2号墳等で中実技法による土製品の出土がある(若松 1992)。また、胴部が粘土紐の巻き上げによるのに対し、頭部はこれによらず、頭部と胴部を別体式に製作し、本体と組み合わせる古い特徴(若松 同前)を有している。さらに耳袋表現は環形でやや古い様相を示している。これらの諸特徴から、船形埴輪は5世紀代の技法を踏襲していると考えられる。

家形埴輪1は大壁式で宮本長二郎氏の4形式分類のうち「大壁の四隅と壁面を縦横に方格区分」するもの(宮本 1996)に相当する。宮本氏は「方格突帯は草壁に縦横の押縁を表現する形式」とするが、本遺跡例は草壁を表現したものではないと考えられる。大壁式の家形埴輪が主流となるのは5世紀後期(宮本氏は1世紀を前・中・後の3期に区分)以降であるとされており、特に方格突帯の形式は6世紀に入るとされる(宮本 同前)。なお、隅柱は斜めに向いており、東国的な様相を示す。

棟持柱を持つ例は大阪府今城塚古墳等6例ほどが知られている。ほとんどが切妻造で4世紀末～5世紀後半に属しているが、今城塚古墳に入母屋造例があり、6世紀前半に位置づけられている。堅魚木と同様、入母屋造の棟持柱採用は切妻造より後出であると考えられる。また、施文される直弧文については、当地方には妙前大塚古墳第2主体部や溝口の塚古墳から出土した鹿角製刀装具例があり、前者は5世紀末～6世紀初頭、後者は5世紀後半に比定されている。本遺跡例も5世紀後半～6世紀初頭の時期が考えられる。

大棟は宮本氏による障泥板形に分類される。5世紀後半に出現し6世紀に盛行するが、入母屋造への採用は6世紀になってからとされる。葺覆は省略され、堅魚木が直接に置かれている。障泥板に開けられた孔は樋貫のための孔と考えられる。屋根覆を表す綾杉文は群馬県伊勢崎村上植木本町出土例に類似がある。綾杉文は6世紀前期までは残るとされている(宮本 同前)。屋根覆に開けられた孔について石見型盾のそれとの関連を先に想定したが、東海地方では5世紀後半ないし末、畿内では6世紀前半以降に盛行する(高橋 1992)とみられる。棟木は断面半円形を呈するが、4～5世紀が主流で、西日本では一部6世紀前期まで残存するとされる(宮本 同前)。なお、破風板は直線的で幅が狭く、畿内的ではない。

堅魚木は中空式で類例が少ない。入母屋造の堅魚木は5世紀中期に出現して6世紀に盛行する(宮本 同前)。千木としたものについては、これまで類例は知られていない。別の棟筋りの可能性もあるが、破風板から連続する形状を重視すれば、前述のように千木をデフォルメしたものと考えることができよう。一般に千木は6世紀に入って出現するとされており、デフォルメされたものとするればやや下るものと考えられる。

以上の諸点を総合し、家形埴輪の製作年代はひとまず6世紀前半代としておくが、船形埴輪の年代観と差があり、5世紀後半まで上げることができるかもしれない。

なお、当地方の埴輪祭式について渋谷恵美子は「5世紀後半から6世紀前半代に盛行し、中頃以降急速に衰退」（渋谷 1996）するとしており、本遺跡の埴輪についても、その年代観の中に収まるものと考えられる。本遺跡で船形埴輪や家形埴輪がセットで出土していることからみて、当地方の埴輪祭式は畿内の影響が強いと考えられる。しかし一方で、家形埴輪には各所に独自性及び東国的な様相を看取することができる。本遺跡の埴輪類は畿内から東国への埴輪祭式の波及を原点に置き、他の要因も考慮した検討が必要といえる。

第V章のとおり、今次調査では出土埴輪と対比資料の胎土分析を行った。発掘資料が少なくまた分析資料が限られていて、埴輪製作地等について得られた情報は不十分といわざるを得ない。しかし、分析の結果、少なくとも船形埴輪・家形埴輪が他地域から搬入されたものではないことは明らかとなった。また、分析対象の13基の古墳のうち5基の古墳で胎土の異なる埴輪が混在しており、製作地の違いが反映されている可能性が指摘された。一方、渋谷によれば塚原二子塚古墳や三徳塚山古墳では1個体に2種類の粘土が使われているものが確認されているし、塚山古墳の場合には2種類の粘土が練り合わされたものがあるといわれ（渋谷 前掲）、必ずしも異なる胎土が異なる製作地を示すとは限らないことが明らかとなっている。また、渋谷は高岡1号古墳で埴輪によって胎土が使い分けられた可能性を指摘しており、同一製作地で異なる胎土が使用されたのか、あるいは器種によって埴輪製作地が異なるのかといった問題はひとまず置くとして、肉眼観察結果と胎土分析結果が対応していることが明らかにされた。併せて、胎土の違いを製作地の違いと断定するには尚早であることも明らかになった。当地方の埴輪研究はまだ手がついたらばかりで、今後各地域の古墳の埴輪について更に分析を進めることで、埴輪生産や流通、そして古墳で執り行われた祭式の実態が解明されるものと期待される。

第2節 S B01・S B07の性格について

埴輪類が出土したのは当地方に通例みられる古墳時代の竪穴住居址状の施設である。この竪穴状の施設内には炉・カマド等の住居と認定すべき施設はなく、床面もかなり軟弱で通常の住居ではないと判断された。また、両施設の壁面沿いや床面付近に多量の炭化物が検出され、通常の住居址から出土する日常の什器である土器類がほとんど認められないこと等、両施設が特異な性格を持つものであったと推定できる。さらに竪穴床面と埴輪・炭化物出土層との間に間層は認められず、竪穴廃絶から埴輪類が遺されるまでの間に時間的な間隙がない。

こうした状況から、両施設の性格として、以下6つほどの可能性が考えられる。すなわち、①埴輪製作の工房址、②消滅した古墳の一画（周溝の一部）、③殯の施設、④祭祀施設、⑤古墳へ設置前の埴輪仮保管施設、⑥廃棄の場等である。①～⑤が主に本来の目的のために竪穴が掘り込まれたものであるのに対し、⑥は竪穴が二次的に利用された場合である。

個別の可能性について検討すると、①の工房址の可能性は施設内からは材料の粘土が出土しておらず、また、焼成前の埴輪の痕跡もないことから該当しないと判断される。②はS B01・S B07の間に削平された古墳の存在を想定する必要があるが、2つの施設の形態・位置関係から、また溝槽の検出状況から

もその存在はあり得ないと考えられる。③は埴輪の散乱状況から一定期間安置されたとするれば何らかの痕跡の存在が推定されるが、埴輪の配置等に規則性も認められず、首長層に関連する装身具等も皆無であることから、積極的に考え難いといえる。④の祭祀については、出土埴輪の内容・炭化物の出土状況を勘案すると、可能性が高い1つといえる。埴輪を用いての祭祀行為がどのようなものであったかは、埴輪本来の姿が古墳に関わってのものがほとんどであり、本例のような集落の一面から出土する例は乏しく、具体的な祭祀の内容を推し量ることは困難である。ただ、遺跡の立地や集落内での位置関係、それに埴輪のセット関係等から2つの祭祀の性格が考えられる。1つは近在に豪族居館が存在し、首長の死去という重大事にあたり集落の一面で行われた葬送に関する何らかの祭祀行為である。宮本氏は、千木付き建物が堅魚木付きの一般的な祭殿とは異なり、特殊な儀礼を行う建物を表現したものであることを指摘しているし（前掲）、古墳で執り行われた葬送儀礼と同じセットが出土していることからみて、この可能性が高い。さらに飯田下伊那で形象埴輪が出土している古墳は、座光寺地区高岡1号古墳・北本城古墳・新井原12号古墳・畦地1号古墳、松尾地区妙前大塚古墳、竜丘地区大塚古墳・塚原二子塚古墳・内山塚古墳、御嶽堂古墳・権現1号古墳、川路地区正清寺古墳、喬木村郭2号古墳・里原4号古墳等（下伊那誌編纂会 1955a・b、渋谷 前掲）であり、盟主的な古墳から出土している。こうした点からみて有力視されるものといえる。2つめは本遺跡が天竜川の氾濫原に立地することから、そこでの生業活動に関わる祭祀行為である。この場合、近在に天竜川通航に関わる津の存在がどのようにであったか、また船形埴輪に表現された準構造船が古墳時代に急流の天竜川を通航可能であったか等、解明を要する点が多いといえる。ただ2者いずれの場合も、前述したように埴輪以外の祭祀具は出土しておらず、また、埴輪・炭化物が壁際にまとまって出土する状況から、両施設で祭祀が行われた可能性は低く、周辺で祭祀行為が行われこれに付随する施設であったことが考えられる。なお、朝顔形埴輪が破損後再加熱されていることは祭祀行為の内容に関わる可能性もある。⑤の埴輪仮保管施設については、出土した埴輪類が赤色塗彩されていないことから古墳に設置される前であったことが想定されるが、炭化物と混ざって出土していることや、家形埴輪1がSB01・SB07から出土ししかも接合関係があることから、保管施設とは考え難い。⑥は多量の炭化物と一緒に壁際を中心に埴輪類が出土した状況から、④とともに可能性が高いものの1つといえる。④で想定された祭祀行為の一環で行われたものと、近くに埴輪窯があり失敗品が投棄された可能性が考えられる。後者の場合、両壁穴の直近に埴輪窯の存在が推定し難い。また、出土した船形埴輪は焼け歪等なく、船底は遺存状態が悪いものの、ほぼ各部が残存しており、失敗作とは考えられない。さらに隣接する2つの施設が二次的に、しかも同時に利用される状況は想定しにくく、単なる廃棄とは言い難い。

以上検討した結果、具体的な祭祀の姿は明らかではないものの、両施設は何らかの祭祀行為のために作られ、周辺で祭祀が執り行われたと考えられる。

第3節 各時代の概観

縄文時代には、ごく断片的に遺構・遺物が把握されているにすぎないが、本遺跡と同じ自然堤防上に立地する辻前遺跡でも、前期以降の遺物出土が少なからずある。この時期には一段上位の月の本遺跡で

は堅穴住居址が、また、今洞遺跡でもまとまった遺物出土があり、定住した姿がある。本遺跡や辻前遺跡での定住の確証はないものの、かなり頻繁な活動があったことは疑いない。

縄文時代と弥生時代の遺構面の間には50cm程度の間層がある。本遺跡が留々女沢川の自然堤防上に立地し、局地的な状況を示す可能性を排除できないものの、この時期の間層の存在は辻前遺跡でも認められており、天竜川流域の低地に共通する堆積状況である可能性がある。

弥生時代には堅穴住居址1棟があり、また、他遺構からの混入として中期阿島式期と後期後半～終末の遺物がある。遺構の分布状況や遺物量からみて大規模、あるいは継続的な集落の姿は想定し難く、散在的な集落であったと考えられる。

古墳時代には前期に集落が営まれるが、中期以降円形周溝墓や古墳が築かれており、調査区東端一帯から留々女沢川にかけての部分が墓域と転化していたことが考えられる。こうした墓域形成は久米川に面した正清寺古墳・峽魔王塚古墳等の久保田古墳群と共通する様相であり、相沢川の自然堤防上に立地する辻前遺跡と対照的である。なお、中期以降の集落は井戸下遺跡や辻前遺跡等今次調査地点より低所で調査されていることから、試掘調査等で確認できなかったものの今次調査地点東側でもかなり深い位置に該期集落が埋もれている可能性がある。

これまで飯田下伊那では埴輪生産が行われた場所は見つかっていない。出土した埴輪は胎土からみて、地元で生産されたと考えられるもので、古墳以外からの出土であることからすれば、本遺跡で埴輪生産が行われ、調査地点西側に埴輪窯の存在が求められる可能性もある。

近世には大荒神の塚古墳墳丘北半付近で鍛冶関連の遺構が確認されており、銅等を扱った小鍛冶が行われている。調査地点から出土した陶磁器類からみて、おそらく近世後期には一帯に町並みができあがり、その一画で行われた生業活動の具体的な一端を示すものと考えられる。

調査地点周辺は、古墳時代以降に少なくとも2度の水害に遭っている。すなわち、大荒神の塚古墳や円形周溝墓周溝等にみられる冠水と、同古墳やSM01の一部を流亡させた洪水とである。前者は、正清寺古墳後円部周溝で確認された冠水の跡と類似しており、さらに辻前遺跡で確認された平安時代以前の遺構に被る砂礫層との関連も想定される。また、後者については少なくとも近世以降に正徳5年の未満水、寛政元年の西満水、文化元年の子満水、文政11年の子満水、明治元年の辰満水等（川路村水害豫防組合 1936）があり、中世の状況は不明であるものの、これらのいずれかによるものと考えられる。

本報告書は調査された遺構・遺物に関して主に個別の記述にとどまるものであり、注目を集めた船形埴輪や家形埴輪は復元作業そのものも未了で、詳細なデータについては今後修正もあり得る。またこれら埴輪の位置づけや、当地域を取り巻く情勢等、今後解明されるべき数多くの課題を残すものである。本遺跡周辺の多くが治水対策事業の完了により厚い盛土下に没した今、周辺地の調査は望むべくもないが、今後一層の文化財保護に取り組み中でこれら課題が少しずつ解明されるものと期待される。

【引用参考文献】

- 飯田市教育委員会 1993 『久井遺跡』
- 飯田市教育委員会 1998a 『美女遺跡』
- 飯田市教育委員会 1998b 『細新遺跡Ⅱ』
- 飯田市教育委員会 2001 『井戸下遺跡』
- 飯田市教育委員会 2002a 『久保田遺跡・久保田1号古墳・蛭魔王塚古墳 その1集落編』
- 飯田市教育委員会 2002b 『月の木遺跡・月の木古墳群』
- 飯田市教育委員会 2003a 『辻前遺跡』
- 飯田市教育委員会 2003b 『留々女遺跡』
- 飯田市教育委員会 2003c 『上の坊遺跡』
- 岩波書店刊 1982 『古事記』日本思想大系1
- 亀井正道 1995 『人物・動物はにわ』日本の美術346 至文堂
- 川路村水害豫防組合 1936 『川路村水防史』
- 渋谷恵美子 1996 「埴輪からみた伊那谷の古墳」『飯田市美術博物館研究紀要』第6号
- 下伊那誌編纂会 1955a 『下伊那史 第二巻』
- 下伊那誌編纂会 1955b 『下伊那史 第三巻』
- 高橋克壽 1992 「2 埴輪の種類と編年 2 器財埴輪」『古墳時代の研究』9 雄山閣
- 辰巳和弘 2001 『古墳の思想—象徴のアルケオロジー—』白水社
- 福田哲也 2001 「松阪宝塚1号墳の埴輪にみる古代船」『考古学ジャーナル』474 ニュー・サイエンス社
- 宮本長二郎 1996 『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版
- 三輪嘉六・宮本長二郎 1995 『家形はにわ』日本の美術348 至文堂
- 望月幹夫 1995 『器財はにわ』日本の美術347 至文堂
- 山田直利・脇田浩二・広島俊男・駒沢正夫 1990 『20万分の1地質図幅「飯田」(第2版)』地質調査所
- 吉川弘文館刊 1991 『国史大辞典』12
- 若松良一 1992 「2 埴輪の種類と編年 3 人物・動物埴輪」『古墳時代の研究』9 雄山閣

辺科名	層	JS標準色票	土壌色	土性	しまり	粘性	備考
基本層序A	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐	SL	良	なし	
	2	10YR4/2	灰黄褐	SL	良	あり	
	3	10YR3/1	黒褐	LiC	良		
	4a	7.5Y2/2	オリーブ黒	SiCL	良		
	4b	10R4/1	暗赤灰	砂礫	良	なし	
	5	7.5YR2/2	黒褐	S	良	なし	
基本層序B	6	10YR4/2	灰黄褐	砂礫	良	なし	
	1	10YR4/3	にぶい黄褐	LiC	良	ややあり	SB08埋土
	2	2.5Y4/3	オリーブ褐	LiC	良	ややあり	
	3	10YR3/2	黒褐	LiC	良	ややあり	
	4	10YR3/3	暗褐	砂礫	良	なし	
	5	7.5YR3/1	黒褐	砂礫	良	なし	
	6a	10YR4/3	にぶい黄褐	砂礫	良	なし	
	6b	10YR4/2	灰黄褐	S	良	なし	礫を多く含む
	7	2.5Y4/2	暗灰黄	S	良	なし	
	8	5Y3/2	オリーブ黒	S	良	なし	
	9	10YR4/2	灰黄褐	SL	良	なし	
	10	5YR4/2	灰褐	LiC	良	ややあり	
	11	2.5Y4/2	暗灰黄	SiCL	良	ややあり	
	12	5YR4/3	にぶい赤褐	S	良	なし	
	13	2.5Y3/3	暗オリーブ褐	砂礫	良	なし	
14	7.5YR3/2	黒褐	S	良	なし		
15	10YR3/1	黒褐	LiC	良	なし	礫混。縄文土器片出土。基本層序A3層に対比	
SB01	1	2.5Y6/4	にぶい黄褐	砂質土	良	ややあり	
	2	2.5Y3/1	黒褐	土	やや良	ややあり	
SB03	2b	2.5Y3/2	黒褐	土	やや良	ややあり	炭を含む
	1	2.5Y3/2	黒褐	土	やや良	ややあり	
	2	2.5Y3/2	黒褐	土	やや良	ややあり	
	3	2.5Y3/1	黒褐	土	やや良	ややあり	
	4	2.5Y3/2	黒褐	砂	不良	なし	
SB04	5	10YR3/1	黒褐	土	良	あり	
	1	10YR3/2	黒褐	SiC	良	ややあり	
	2	10YR4/4	褐	SiC	良	ややあり	
	3	10YR3/3	暗褐	SiC	良	ややあり	
	4	10YR2/3	黒褐	SiC	良	ややあり	
	5	10YR3/2	黒褐	SiC	良	ややあり	
SB05	6	10YR3/2	黒褐	SiC	良	ややあり	
	1	10YR3/1	黒褐	LiC	良	ややあり	
	2	2.5Y4/2	暗灰黄	LS	良	なし	
	3	10YR4/3	にぶい黄褐	SL	良	なし	
SB06	4	2.5YR3/3	暗オリーブ褐	S	良	なし	
	10YR4/3	にぶい黄褐	LiC	良	なし		
SB07	1	2.5Y5/6	黄褐	シルト	良	あり	
	2	2.5Y2/1	黒	土	良	ややあり	
	3	2.5Y3/1	黒褐	土	やや良	ややあり	
	4	2.5Y2/1	黒	土	やや良	ややあり	
	5	2.5Y4/2	暗灰黄	土	良	なし	
SB08		2.5Y4/3	オリーブ褐	LiC	良	ややあり	
SB08炉	1	-	黒褐	SiCL	不良	なし	
SB09		-	-	-	-	-	
SM01 B~D	1	10YR4/4	褐	HC	良	あり	
	2	10YR2/1	黒	LS	良	あり	
	3	10YR3/4	暗褐	LiC	良	ややあり	
SM01 E	1	2.5Y4/3	オリーブ褐	シルト	良	あり	
	2	2.5Y3/2	黒褐	砂質シルト	やや良	あり	
	3	2.5Y3/2	黒褐	砂礫多い	やや良	あり	

第2表 土層注記表(1)

通稱名	層	JS標準色票	土壌色	土性	しまり	粘性	備考
SK01		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
SK02	1	5Y3/2	オリーブ黒	砂質土	やや良	ややあり	
	2	5Y4/2	灰オリーブ	砂	不良	なし	
SK04	1	2.5Y3/4	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
	2	5Y2/2	オリーブ黒	砂質土	不良	なし	
SK05		2.5Y4/2	暗灰黄	S	-	-	
SK06		-	-	-	-	-	
SK07		10YR3/1	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
SK08		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
SK09		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
SK10		10YR2/3	黒褐	LiC	良	ややあり	
SK11		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
SK12		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
SK13		10YR3/3	暗褐	SL	良	なし	
SK14		-	-	-	-	-	
SK15		10YR2/2	黒褐	LiC	良	なし	
SK16		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
SK17		-	-	-	-	-	
SK18		-	-	-	-	-	
SK19		10YR3/2	黒褐	LiC	良	ややあり	
SK20		10YR3/2	黒褐	SiC	良	ややあり	
SK21		10YR3/4	暗褐	SiC	良	ややあり	
SK22		10YR4/3	にぶい黄褐	LiC	良	ややあり	
SK23	1	2.5Y4/2	暗灰黄	砂質土	不良	なし	
	2	2.5Y2/1	黒	砂質土	不良	なし	炭化物主体層
SK24		7.5YR3/3	暗褐	LiC	良	なし	
SK25		10YR3/3	暗褐	LiC	良	ややあり	
SK26	1	10YR4/3	にぶい黄褐	土	不良	-	
	2	10YR4/4	褐色	土	不良	-	
SK27		-	-	-	-	-	
SK28		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
SK29		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
SK30		10YR3/2	黒褐	SiC	良	ややあり	
SD02		-	-	-	-	-	
SD03		-	-	-	-	-	
SD05		-	-	-	-	-	
SD06		10YR3/3	暗褐	SiCL	やや良	なし	
SD07		10YR3/2	黒褐	SL	良	なし	
SD08		10YR4/3	にぶい黄褐	LiC	良	ややあり	
SD09		-	-	-	-	-	
SD10		10YR3/4	暗褐	SiCL	やや良	なし	
SD12		10YR4/3	にぶい黄褐	HC	やや良	あり	
SD13		10YR3/4	暗褐	LiC	良	ややあり	
SD14		-	-	-	-	-	
SI01		10YR3/1	黒褐	SiC	不良	なし	
SI02		-	-	-	-	-	
SX01		-	-	-	-	-	
SX01-1		-	-	-	-	-	
SX01-2	1	7.5R4/2	灰赤	LiC	良	なし	
	2	2.5YR3/1	暗赤灰	SiC	良	ややあり	
SX01-3		10R4/1	暗赤灰	LiC	良	なし	
SX01-4		7.5Y3/1	オリーブ黒	LiC	良	なし	
SX02	1	2.5Y4/2	暗灰黄	土	不良	ややあり	
	2	2.5Y3/1	黒褐	土	不良	なし	炭・鉄滓粒・銅製品片を含む
SX03		-	-	-	-	-	
SX04		-	-	-	-	-	
硬化面Ⅲ	1	2.5Y5/6	黄褐	土	やや良	なし	灰褐色土が少量混入

第3表 土層注記表(2)

辺り名	層	JS標準色票	土壌色	土性	しまり	粘性	備考
	2	2.5Y5/6	黄褐	土	やや良	なし	
	3	2.5Y4/3	オリブ褐	土	やや良	なし	
AH39P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AH40P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AH40P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AJ35P1		10YR3/1	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AK37P1		10YR3/1	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AK37P2		10YR3/1	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AK37P3		10YR3/1	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AK38P1		10YR3/1	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AK39P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AL38P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AM36P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AM37P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AN37P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AN38P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AN39P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AN39P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AN39P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AN39P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AN40P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AN40P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AN40P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AN40P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AO34P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AO34P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AO34P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AO35P1		5Y5/2	灰オリブ	-	-	-	
AO35P2		5Y5/2	灰オリブ	-	-	-	
AO35P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AO35P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AO35P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AO36P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AO36P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AO36P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AO36P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AO37P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AO37P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AO38P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AO38P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AO38P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AO38P4		10YR3/1	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AO38P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AO40P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AO40P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AO41P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP34P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP34P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP35P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP35P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP35P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP36P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP36P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP36P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP36P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP36P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP36P6		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP37P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	

第4表 土層注記表(3)

通稱名	層	JS標準色票	土壌色	土性	しまり	粘性	備考
AP37P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP37P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP38P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP38P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP38P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP39P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP39P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP39P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP39P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP39P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP39P6		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP39P7		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AP40P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ33P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ34P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ34P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ34P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ35P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ36P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ36P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ36P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ36P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ37P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ37P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ37P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ37P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ37P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ38P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ38P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ38P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ38P4		10YR3/1	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ39P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ39P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ39P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ39P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ40P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ40P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ40P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ40P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AQ40P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AR33P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AR34P1		10YR3/1	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AR34P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AR34P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AR34P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AR34P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AR34P6		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AR34P7		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AR34P8		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AR35P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AR35P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AR35P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AR35P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AR35P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AR37P1		10YR3/1	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS33P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS34P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS35P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	

第5表 土層注記表(4)

辺り名	層	JS標準色票	土壌色	土性	しまり	粘性	備考
AS35P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS35P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS35P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS36P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS36P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS36P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS36P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS36P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS36P6		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS37P1		10YR3/1	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS37P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS37P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS38P1		10YR3/1	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS38P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS39P2		10YR3/1	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS39P3		10YR3/1	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS40P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS40P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS40P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS40P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS40P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS40P6		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AS41P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT33P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT33P2		-	-	-	-	-	
AT34P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT34P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT34P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT34P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT34P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT34P6		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT35P1		10YR3/1	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT35P2		10YR3/1	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT35P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT35P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT36P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT36P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT37P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT37P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT37P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT37P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT37P6		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT37P7		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT37P8		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT37P9		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT38P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT38P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT38P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT38P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT38P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT38P6		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT39P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT39P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT39P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT39P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT39P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT39P6		10YR3/4	暗褐	S i C L	良	ややあり	
AT39P7		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	

第6表 土層注記表(5)

遺構名	層	JS標準色票	土壌色	土性	しまり	粘性	備考
AT39P8		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT39P9		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT39P10		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT40P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT40P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT40P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT41P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT41P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT41P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT41P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT41P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT41P6		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT42P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AT42P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU33P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU33P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU34P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU34P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU34P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU34P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU34P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU34P6		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU34P7		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU35P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU35P2		-	-	-	-	-	
AU35P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU35P4		10YR3/1	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU36P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU37P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU37P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU38P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU38P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU38P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU38P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU39P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU39P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU40P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU41P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU41P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU41P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU41P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU42P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AU43P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AV33P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AV33P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AV34P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AV34P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AV34P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AV34P7		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AV35P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AV35P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AV35P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AV35P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AV35P5		-	-	焼土	-	-	
AV36P1		10YR3/1	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AV36P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AV36P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AV38P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	

第7表 土層注記表(6)

辺り名	層	JS標準色票	土壌色	土性	しまり	粘性	備考
AV39P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AV41P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AV41P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AV42P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW33P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW34P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW34P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW34P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW34P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW34P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW34P6		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW36P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW38P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW38P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW38P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW38P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW38P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW39P1		10YR3/1	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW39P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW39P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW40P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW40P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW40P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW40P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW40P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW41P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW41P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW42P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW43P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AW43P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AX34P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AX34P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AX34P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AX34P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AX35P1		10YR3/1	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AX35P2		10YR3/1	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AX35P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AX38P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AX38P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AX38P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AX38P5		-	-	焼土	-	-	
AX38P6		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AX39P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AX39P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AX39P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AX39P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AX42P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AX42P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AX42P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AX42P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AY34P1		10YR3/1	黒褐	ややシルト	やや良	ややあり	
AY34P2		10YR3/1	黒褐	ややシルト	やや良	ややあり	
AY34P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AY34P4		-	-	-	-	-	
AY34P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AY35P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AY35P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AY35P3		-	-	-	-	-	

第8表 土層注記表(7)

遺構名	層	JS標準色票	土壌色	土性	しまり	粘性	備考
AY36P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AY36P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AY38P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AY38P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AY38P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AY39P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AY40P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AY40P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AY40P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AY40P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AY40P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AY40P6		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AY41P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AY41P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AY42P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
AY42P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BA35P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BA35P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BA36P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BA38P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BA38P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BA38P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BA41P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BA41P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BA41P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BA41P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BB42P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BB42P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BB42P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BB43P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BB43P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BD37P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BE38P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BF37P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BF37P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BF38P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BH34P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BH37P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BJ39P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BJ40P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BJ40P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BJ43P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BJ44P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BK42P1		10YR3/3	暗褐	LiC	不良	なし	
BK45P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BL35P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BL35P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BL35P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BM40P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BM42P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BN34P1		-	-	-	-	-	
BN34P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BN35P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BN35P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BN35P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BN35P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BN35P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BN35P6		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	

第9表 土層注記表(8)

辺材名	層	JS標準色票	土壌色	土性	しまり	粘性	備考
BN35P7		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BN35P8		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BN35P9		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BN36P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BN36P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BN36P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BN37P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BN37P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BN38P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BN38P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BN41P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BN42P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BN42P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BO34P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BO34P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BO34P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BO34P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BO35P1		10R4/1	暗赤灰	LiC	やや良	ややあり	
BO35P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BO35P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BO36P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BO36P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BO36P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BO36P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BO37P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BO37P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BO38P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BO40P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BO40P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BO40P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BO40P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BO41P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BO41P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BP39P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BP41P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BP41P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BQ40P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BQ40P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BQ41P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BQ42P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BQ42P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BQ42P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BR37P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BR40P1		10YR4/2	灰黄褐	SL	なし		
BR40P2		10YR3/2	黒褐	LiC	良	ややあり	
BR40P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BR40P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BR41P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BR41P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BR41P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BR42P1		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BR42P2		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BR42P3		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BR42P4		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	
BR42P5		10YR3/2	黒褐	ややシルト	良	ややあり	

第10表 土層注記表(9)

遺構名	検出位置	法量 (cm)	主軸	形状	出土量	出土遺物	備考
SK01	AT37	87×85×27	N0° W	円形	僅少	土一高坏 壘F、芥一壘、陶一(器種不明/鉄物)	
SK02	AV35	126×105×29	N85° E	不整楕円形			AU35P1・AT34P2に切られる
SK03	AU41	83×80×30	N18° W	方形	僅少		擾乱と重複
SK04	AU35	110×105×39	N50° W	不整円形			
SK05	AT36	86×74×16	N90° E	不整楕円形	僅少	土一高坏〔小型壘〕	
SK06	—	—	—	—		土一台阶壘、芥一後期壘、陶一壘 楕鉢(鉄物/瀬戸美濃系) 中皿 (鉄物/瀬戸美濃系) 土一〔小型壘〕〔壘G〕	
SK07	AP38	76×73×26	N55° W	不整円形	僅少		SB05・AT38P6・AS38P1に切られる
SK08	AO39	—×80×20	N85° W	不整楕円形	僅少		SB04を切る
SK09	AS38	163×147×31	N90° E	不整楕円形	僅少		
SK10	AW35	164×162×45	N20° E	方形	僅少		
SK11	AU38	160×90×27	N50° W	不整楕円形	僅少		
SK12	AY39	180×57×23	N67° E	不整形	僅少	土一高坏 壘B 小型壘、芥一壘 壘	SM01を切る SM01を切る
SK13	BA42	200×165×29	N3° W	方形			
SK14	—	—	—	—			
SK15	AU40	90×88×37	N0° W	円形	僅少	土一高坏 壘 小型壘	
SK16	BA38	164×110×50	N74° W	不整楕円形	僅少	土一〔坏〕、芥一中期壘	BA38P1・BA38P2に切られる
SK17	BM44	140×86×47	N65° W	不整楕円形	僅少	土一小型壘、芥一〔高坏〕	
SK18	BK44	138×117×16	N40° W	不整楕円形	僅少	土一高坏、芥一中期壘、陶一楕鉢(鉄物)	
SK19	BJ43	77×—×18	N70° W	不整形	僅少	土一高坏 壘、鍋一(鉄器か)	
SK20	BJ43	—×—×13	—	不整形	僅少	土一高坏 壘B 小型壘、芥一壘 壘	
SK21	BK42	90×70×22	N0° W	不整楕円形	僅少	磁一中国(染付透明物/燻反形) 小 鍋(半球形/透明物) 五寸皿(丸 形/染付透明物)、陶一土皿(鉄物)	近世
SK22	BR37	112×100×54	N21° E	不整円形	僅少	土一高坏 小型壘、円筒高脚 陶一磁器利(底口形/鉄物/	SX03を切る
SK23	BL44	143×70×62	N8° E	不整形	僅少	瀬戸美濃系) [中皿] (鉄物)	近世
SK24	BJ41	—×—×60	—	不整形		中壘(灰輪) [短型] 土一高坏 小型壘	
SK25	BR39	—×—×121	—	不整形			
SK26	BM43	109×85×48	N79° E	不整楕円形			
SK27	BL44	134×(105)×68	N40° E	不整楕円形			
SK28	BQ43	100×77×19	N0° W	不整楕円形	僅少	土一壘 小型壘A、芥一後期壘	SX03を切る
SK29	BQ43	90×80×40	N40° W	不整楕円形	僅少	土一高坏 壘	
SK30	AV34	50×46×31	N0° W	円形			

第11表 遺構属性表(1)

器物名	出土位置	法口 (cm)	土鐘	形状	出土口	出土遺物	備考
SI01	BN35	70×60×32	N17° E	楕円形			
SI02	BS37	(130)×(115)×-	不明	不整形			
SD02	-	-	-	-	僅少	土-小型甕, 須一尊	SD04を切る。近世
SD03	AC35他	620以上×40~80×20 ~40	N30° W	やや湾曲	僅少	陶-【中晩】(灰輪/瀬戸美濃系) 弥-後期壺 後期甕, 土-【小型甕】	SD03に切られる
SD04	AF36他	710以上×230~	N3° W	不整形	僅少	須一甕 縄文	SB03を切る
SD05	AJ37他	660×40~90	N35° W	直線状	僅少	土-高坏 小型甕	SB04を切る。古墳時代か
SD06	AW37他	2470以上×90~	N0° W	直線状	僅少	土-環D1 小型甕	SB05を切る。古墳時代か
SD07	AY37他	230×30~65	N6° W	直線状	僅少	了土器	
SD08	AU42他	430×40~50×10	N5° E	直線状	僅少	土-高坏 【器台】 ミニチュア	
SD09	AT41他	290×25~44×20~30	N87° W	直線状	僅少	土-高坏 【小型甕】 弥-一尊	古墳時代か
SD10	AP34他	200×30~40×10	N89° E	直線状	僅少	土-高坏 甕F 【小型甕】 縄文	AT41P2・AT41P4に切られる。古墳時代か
SD11	BK34他	540以上×140~ 170×20~40	不明	不明	僅少	土-小型甕, 縄文	AQ34P3に切られる
SD12	BE41他	830以上×110~ 270×30	N15° W	やや湾曲	僅少	土-一尊, 須一尊, 陶-一尊 漆鉢 (鉄輪/瀬戸美濃系) 【中晩】(灰輪/瀬戸美濃系)	近世
SD13	BQ36他	180×10~70×2~10	N90° W	直線状	僅少	土-高坏 【小型甕】、縄文	
SD14	-	-	-	-	僅少	土-環F4 (内黒) 環D 環F (内黒) 高坏 (内黒) 甕A 甕B 甕F 小型甕 F 小型甕, 弥-後期甕, 縄文	古墳中期以降
SX01	-	-	-	-	僅少	陶-陶器 漆鉢 (灰輪/瀬戸美濃系) 弥-中晩 (袋付透明釉/くらわんか手/波佐見系か) 土師窯コシロ 出灰、縄文、弥-一尊、土-環G1 高坏 小型甕 【台付甕】	近世
SX01-1	BK42	56×55×43	-	-	僅少	陶-不明 (鉄輪)、磁-潘坏 (型作り/19C以降)	SX01-4を切る
SX01-2	BK43	60×50×26	-	-	僅少	瀬戸) 甕の羽口	SX01-3に切られる
SX01-3	BK43	59×-×21	-	-	僅少	陶-急須 内: 灰輪	SK23・SK27に切られる
SX01-4	BK43	59×-×22	-	-	僅少	瓦貫火鉢、縄文	近世
SX02	BK44	-×-×27	-	-	僅少	土-一尊 高坏	
SX03	BL44	-×-×24	-	-	僅少	陶-一尊	
SX04	BJ44	46×21×-	-	-	僅少	土-一尊 高坏	

AS35P1

第12表 近網属性質表 (2)

遺構名	検出位置	法量 (cm)	主軸	形状	出土量	出土遺物	備考
AS35P4					僅少	土-[小型甕]	
AS36P3					僅少	土-小環 [小型甕]	
AS36P6					僅少	土-小環	
AS37P1					僅少	土-小環	
AS38P2					僅少	土-小環	
AS39P3					僅少	土-後期と思われる甕	
AS40P2					僅少	土-小環	
AT33P1					僅少	土-[小型甕]	
AT34P1					僅少	土-高環	
AT36P2					僅少	土-小型甕	
AT37P6					僅少	土-[甕]	
AT38P1					僅少	土-小環	
AT38P3					僅少	土-小環	
AT38P6					僅少	土-小環	
AT39P2					僅少	土-小環	
AT39P3					僅少	土-小環	
AT39P5					僅少	土-[小型甕]、弥-後期後半甕	
AT39P8					僅少	土-[小型甕]	
AT40P1					僅少	土-甕、須-蓋	
AT40P2					僅少	土-小環	
AT41P1					僅少	土-高環	
AT41P2					僅少	土-高環、弥-中期甕	
AT41P3					僅少	土-[環]、彌-中期 (天目形/鉄輪 / 瀬戸美濃系)	
AT41P4					僅少	土-高環	
AT41P6					僅少	土-高環 (内黒) [小型甕]、弥-後期後半	
AT42P2					僅少	土-小環	
AM37P1					僅少	土-小環	
AN37P1					僅少	土-[高環]	
AN38P1					僅少	土-小環	
AN39P2					僅少	土-高環	
AO37P2					僅少	弥-後期後半甕	
AO38P1					僅少	土-[高環]	
AO40P1					僅少	土-高環	

第13表 遺構属性表 (3)

遺構名	検出位置	法尺 (cm)	主軸	形状	出土品	出土遺物	備考
AF36F2					很少	土-[小型竪]	
AF37F3					很少	赤-後期後半段	
AF39F1					很少	土-環、縄文	
AP40P1					很少	土-不明	
AQ37F1					很少	土-環D1	
AQ37F3					很少	土-環	
AQ38F4					很少	赤-中期段	
AQ40F1					很少	赤-[環] 小型竪	
AQ40F5					很少	土-環	
AR34P1					很少	土-小型竪	
AR34P2					很少	土-小型竪	
AR34F3					很少	赤-[竪]	
AR34F6					很少	赤-環	
AU33F1					很少	土-環D2 小型竪	
AU34F1					很少	土-環 高環	
AU34F2					很少	土-環 不明	
AU34P4					很少	土-高環	
AU34F5					很少	土-高環	
AU34F6					很少	土-高環	
AU35F1					很少	土-環 [小型竪]	
AU35F4					很少	土-環D 小型竪	
AU38F1					很少	土-環 小型竪、赤-中期段 後期段	
AU40P1					很少	土-小型竪、赤-後期段	
AU42P1					很少	土-高環	
AV33F1					很少	土-環 高環 小型竪	
AV33F2					很少	土-高環 [竪]、赤-後期段	
AV34F1					很少	土-環D 高環	
AV34F5					很少	土-高環、赤-後期後半段	
AV34F6					很少	赤心之思わ打る-高環	
AV34P7					很少	土-高環 鉢D [小型竪] 並D、赤	
AV35F1					很少	-中期段 後期強、縄文	
AV35F2					很少	土-[竪]、赤-[竪]	
AV35F3					很少	土-高環	
AV36P1					很少	土-不明、赤-後期段	

通稱名	出土位置	法量 (cm)	主軸	形状	出土量	出土遺物	備考
AV38P2					僅少	土一環	
AV36P3					僅少	高環 赤一[蓋]、磁一青磁碗 (中世) 青磁碗 (印刷文) 瓦鉢小	
AV40P1					僅少	赤一中間甕	
AW33P1					僅少	土一高環 甕、赤一中期小と思われれる	
AW34P1					僅少	土一[不明]、赤一後期甕	
AW34P2					僅少	土一高環 不明	
AW34P3					僅少	土一高環 小甕、須一不明、赤一後期甕	
AW34P4					僅少	土一高環 小甕、繩文	
AW34P5					僅少	土一高環 小甕、赤一後期後半甕	
AW34P6					僅少	土一高環 小甕	
AW36P1					僅少	土一不明、繩文小	
AW38P1					僅少	土一高環 小甕	
AW38P4					僅少	赤一後期甕	
AW39P1					僅少	赤一後期甕	
AW40P1					僅少	赤一後期甕	
AX34P1					僅少	土一環D 高環 [小型甕]	
AX35P2					僅少	土一環	
AX38P2					僅少	土一環	
AX38P5					僅少	土一小型甕	
AX38P6					僅少	土一不明	
AX39P2					僅少	土一環	
AX39P4					僅少	土一小型甕	
AY34P1					僅少	土一高環 小甕	
AY34P3					僅少	土一高環 小甕	
AY34P4					僅少	土一[鉢] 甕 不明、赤一[蓋]	
AY35P1					僅少	土一環 甕 小甕	
AY35P2					僅少	土一環 甕 小甕	
AY35P3					僅少	土一高環 [鉢] 甕	
AY38P1					僅少	土一[小型甕] [合付甕]	
AY38P2					僅少	土一環 (内黒) 高環 [鉢] 小甕	
AY39P1					僅少	土一環D1 小甕、磁一青磁碗 (中世)	中世
BR40P2					僅少	土一環D2 鉢D 小甕、甕の須口	
BR42P3					僅少	土一小型甕	
BA38P2					僅少	土一[合付甕] 小甕	

第15表 遺構属性表 (5)

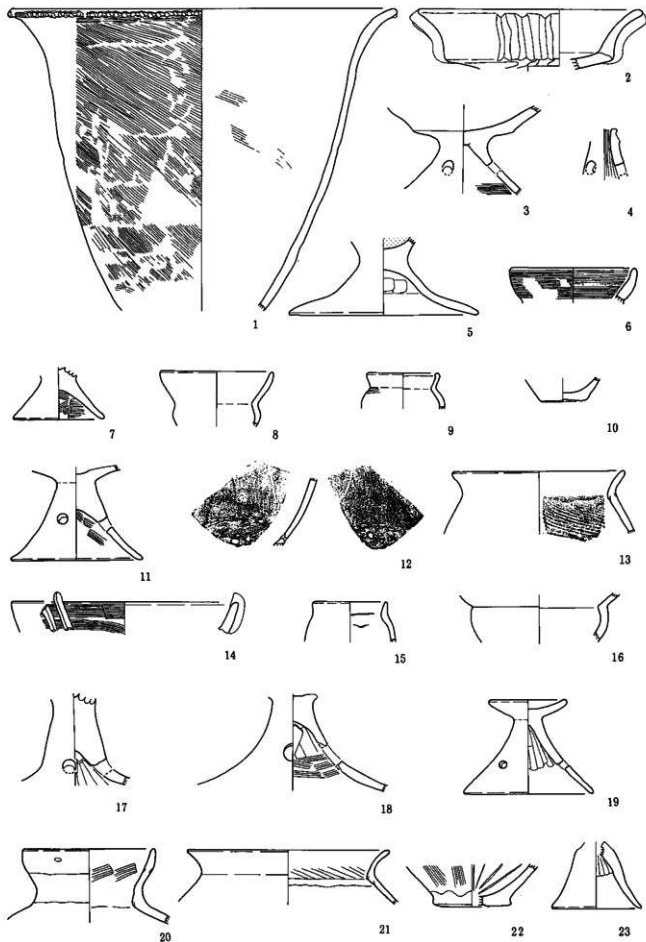
通稱名	検出位置	法目 (cm)	主産	形状	出土口	出土遺物	備考
BA41P4					僅少	芥-蓋	
BB42P1					僅少	土-高坏A (内黒)	小型甕
BB43P1					僅少	土-小型甕F	
BJ43P1					僅少	芥-蓋	
BJ44P1					僅少	土-不明	芥-漆器蓋 甕
BN34P1					僅少	土-[高坏]	小型甕
BN36P2					僅少	土-高坏 [蓋]	
BN42P1					僅少	土-不明	
BO36P4					僅少	織文 (摩耗)	
BF41P2					僅少	土-不明	
BR37P1					僅少	土-高坏A 1	小型甕
BR40P1					僅少	土-高坏	小型甕B、芥生

図版No.	器種	遺構名	区	層	遺物No.	石材	流量	備考
第5図	3 打製石斧	SB05	AR39			硬砂岩	105×66×29	
第5図	4 砥石	SB05	AR39			白色砂岩?	34×30×11	
第5図	5 横刃型石器	SB04	AW35			硬砂岩	68×51×16	
第5図	6 挟入打製石庖丁	SB08				硬砂岩	66×46×10	
第5図	7 有肩扇状形石器	SB08				硬砂岩	128×109×25	
第5図	9 横刃型石器	SB01		黒褐色土		硬砂岩	60×29×10	
第5図	10 横刃型石器	SB01		明黄褐色土		硬砂岩	59×44×8	
第5図	11 小型打製石斧	SB01		黒褐色土		緑色岩	87×51×11	
第6図	1 挟入打製石庖丁	SM01		1層		硬砂岩	83×44×12	北側周溝
第6図	2 砥石	SK21				不明	83×30×29	持砥石、仕上げ砥
第6図	3 石棒	SD01				緑色岩	105×31×34	破損
第6図	4 横刃型石器	SD01				硬砂岩	85×54×16	
第6図	5 横刃型石器	SD01				緑色岩	100×44×16	
第6図	6 横刃型石器	SD05				硬砂岩	103×76×24	著しく摩滅
第6図	7 敲打器	SD05				緑色岩	132×36×32	
第6図	8 打製石斧	SD07				硬砂岩	119×50×23	
第6図	9 有舌尖頭器	SD12				赤色珪岩	(62)×19×6	
第6図	10 磨石	BK42P1				不明	84×78×35	
第7図	1 打製石斧	遺構外	AT42			硬砂岩	175×78×33	
第7図	2 打製石斧	遺構外	AT42			硬砂岩	172×95×37	
第7図	3 打製石斧	遺構外	AV34	褐色土		硬砂岩	133×67×25	
第7図	4 打製石斧	AU35P1				硬砂岩	127×48×27	
第7図	5 打製石斧	遺構外				硬砂岩	125×56×24	
第7図	6 打製石斧	遺構外	BP38			硬砂岩	132×45×22	
第8図	1 打製石斧	遺構外	試掘			硬砂岩	124×68×25	
第8図	2 打製石斧	遺構外	攪乱			硬砂岩	107×62×22	
第8図	3 打製石斧	AQ37P1				硬砂岩	130×49×26	
第8図	4 打製石斧	遺構外	AS41			硬砂岩	128×59×26	
第8図	5 小型打製石斧	遺構外	試掘			緑色岩	93×40×18	
第8図	6 小型打製石斧	AV34P6				硬砂岩	96×50×22	
第8図	7 小型打製石斧	遺構外	AQ39			硬砂岩	97×50×14	
第8図	8 小型打製石斧	遺構外	ZZZ			硬砂岩	104×56×14	
第8図	9 小型打製石斧	遺構外	AV41付近			硬砂岩	95×46×14	
第8図	10 小型打製石斧	遺構外	AV38			緑色岩	98×44×17	
第8図	11 打製石斧	遺構外	AN40付近			硬砂岩	96×81×18	
第9図	1 打製石器	遺構外	AN36付近			硬砂岩	107×59×18	
第9図	2 小型打製石斧	遺構外	AS41			緑色岩	91×50×13	
第9図	3 小型打製石斧	遺構外	AT36	褐色土		緑色岩	82×38×11	
第9図	4 小型打製石斧	遺構外	BQ・BR40			硬砂岩	89×32×17	
第9図	5 小型打製石斧	遺構外	AL27	黒褐色土		硬砂岩	95×38×15	
第9図	6 打製石器	遺構外	AG39	褐色土		硬砂岩	88×65×22	
第9図	7 石錘	遺構外	試掘			硬砂岩	79×53×17	
第9図	8 打製石器	遺構外	攪乱			硬砂岩	79×85×17	
第9図	9 横刃型石器	遺構外	BD39			緑色岩	87×71×17	
第9図	10 横刃型石器	遺構外	攪乱			硬砂岩	97×83×13	
第9図	11 横刃型石器	遺構外	BQ・BR37			硬砂岩	125×86×19	
第9図	12 横刃型石器	遺構外	AN40付近			硬砂岩	63×60×13	
第10図	1 横刃型石器	遺構外	試掘			硬砂岩	83×62×12	
第10図	2 横刃型石器	遺構外	BQ40			硬砂岩	101×56×11	
第10図	3 挟入打製石庖丁	遺構外	ZZZ			硬砂岩	87×43×12	刃部に口ウ状光沢
第10図	4 挟入打製石庖丁	遺構外	AS41			硬砂岩	76×44×8	
第10図	5 砥石	AU34P4				砂岩	143×92×74	重砥石、仕上げ砥

第17表 石器観察表(1)

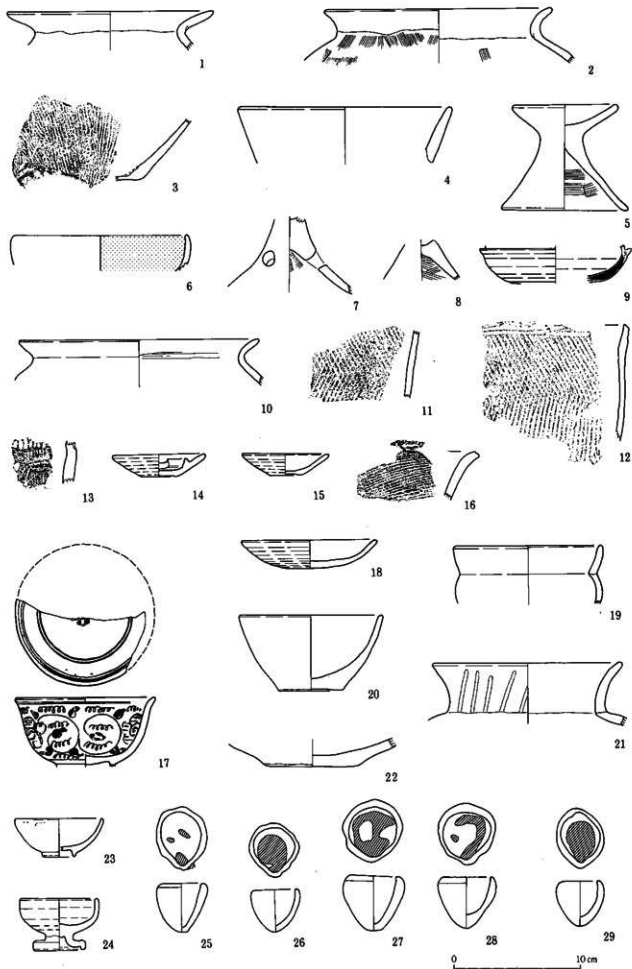
図版No.	器種	遺構名	区	層	遺物No.	石材	法 量	備 考
第10図 6	砥石	AV41P1				不明	44×34×8	持砥石
第10図 7	磨石?	AR37P1				砂岩	88×70×43	
第10図 8	敲打器	遺構外	BB43付近			硬砂岩	109×62×33	火を受ける
第10図 9	敲打器	AR37P1				硬砂岩	114×43×36	
第11図 1	敲打器	遺構外	BB40・41			硬砂岩	109×48×35	
第11図 2	剥片	遺構外	ZZZ			黒曜石	31×14×6	側縁に微細剥離痕あり
第11図 3	搔器	遺構外	ZZZ			黒曜石	21×17×4	
第11図 4	刀子?	SB09				鉄	42×14×4	混入?
第11図 5	不明	SB09				鉄	36×3×3	
第11図 6	鎌	SX01				鉄	26×16×4	
第11図 7	釘	SX01				鉄	41×4×4	
第11図 8	鏝	SX01				鉄	75×20×6	基部に柄を固定した針金が残存
第11図 9	煙管吸口	SX03				銅(銅合金)	76×9×9	扉字煙管
第11図 10	釘	AW39P1				鉄	108×8×6	近代以降の丸頭釘
第11図 11	不明	AV35P1				鉄	36×38×3	
第11図 12	刀子	遺構外	BJ45		No. 1	鉄	(177)×18×4	
第12図 16	打製石器	大荒神の塚古墳				硬砂岩	115×74×31	
第12図 17	横刃型石器	大荒神の塚古墳				硬砂岩	109×84×17	
第12図 18	横刃型石器	大荒神の塚古墳				硬砂岩	115×79×22	
第12図 19	砥石	大荒神の塚古墳				不明	75×35×36	持砥石、仕上げ砥

第18表 石器観察表(2)

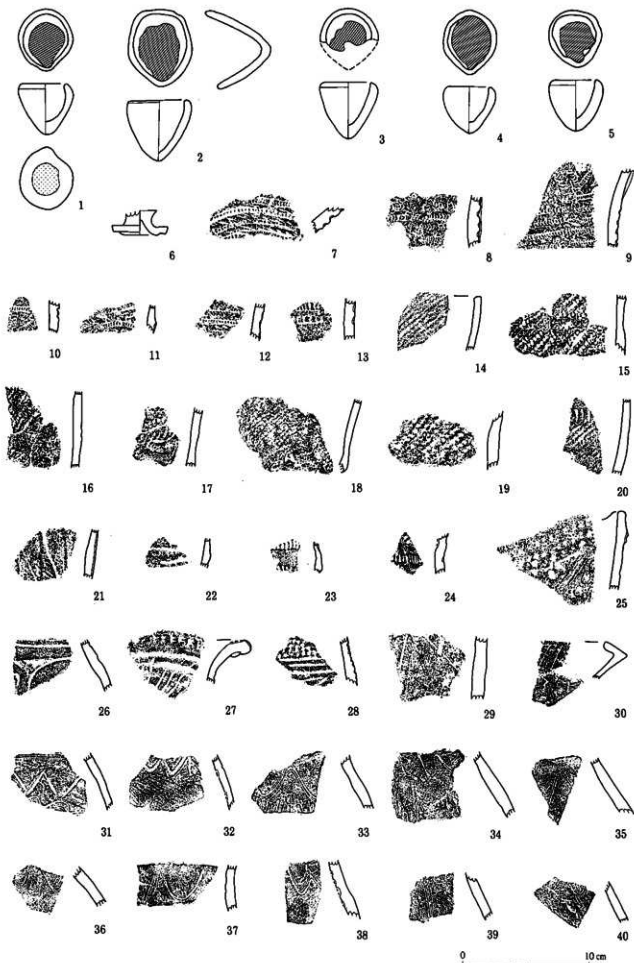


第1圖 SB06, SB03~SB05, SB08出土土器 (1 SB06,
2~7 SB03, 8~12 SB04, 13~19 SB05, 20~23 SB08)

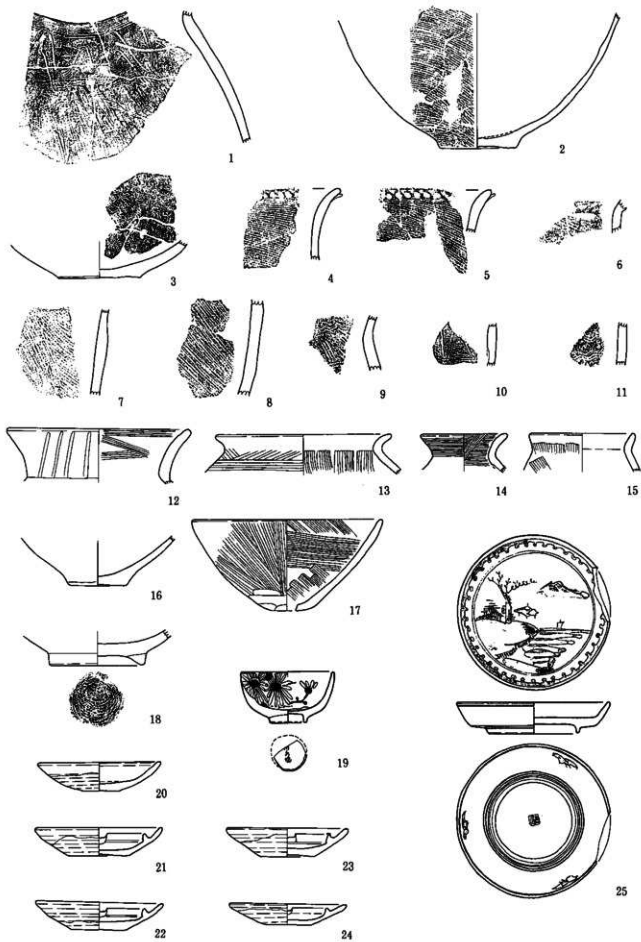
0 10 cm



第2圖 SB09, SM01, SK01, SK14, SK15, SK17, SK18, SK21, SK23, SD06, SD07, SD14, SX01出土遺物(1~5 SB09, 6~9 SM01, 10 SK01, 11~12 SK14, 13 SK15, 14~15 SK17, 16 SK18, 17 SK21, 18 SK23, 19 SD06, 20 SD07, 21~22 SD14, 23~29 SX01)

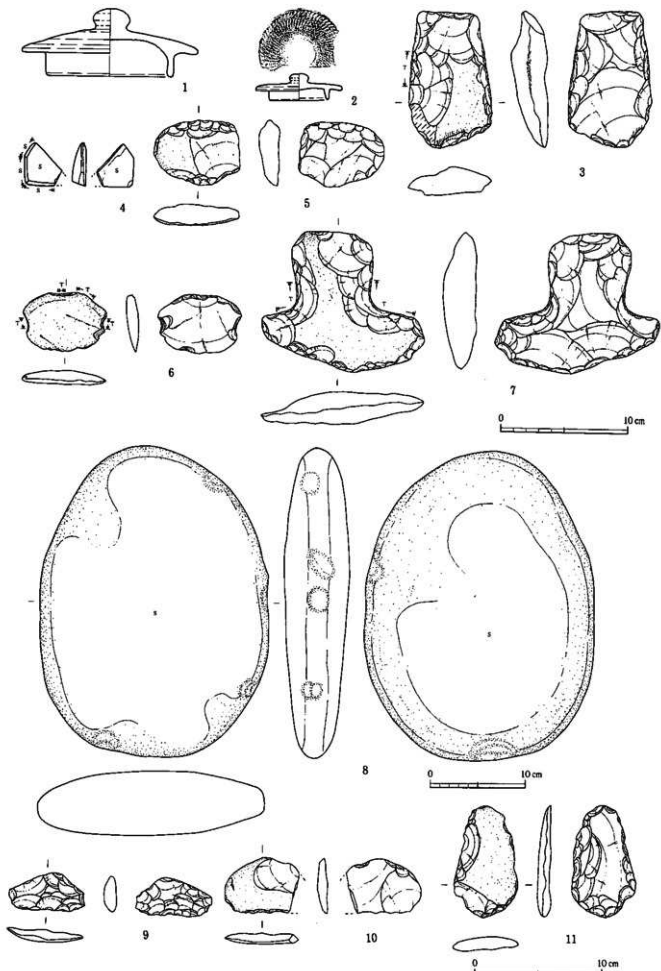


第3圖 S X01、S X02 遺構外出土遺物 (1~5 S X01、6 S X02、7~40 遺構外)

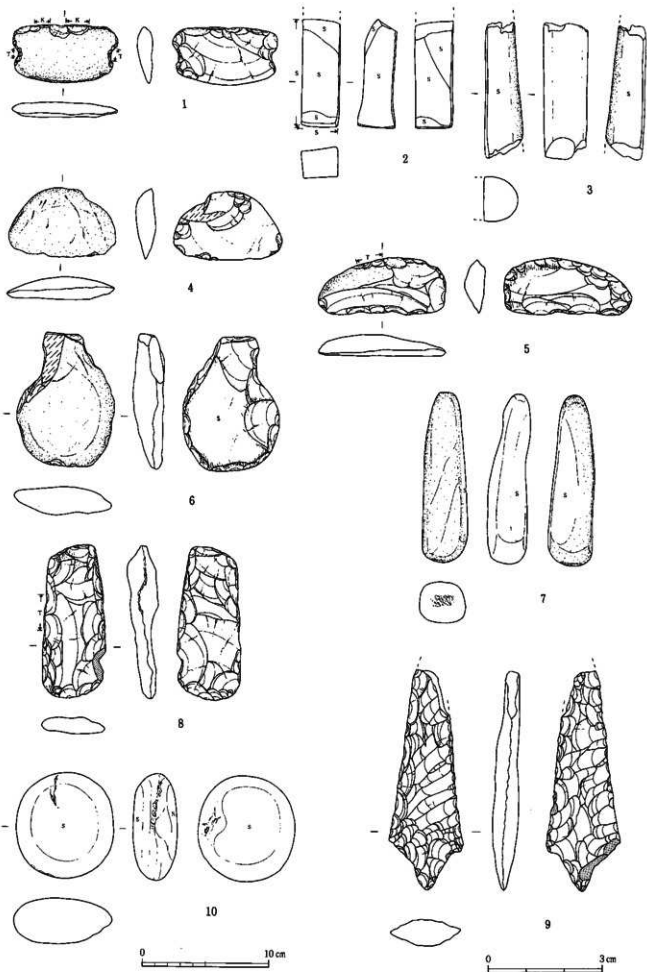


第4圖 遺構外出土遺物

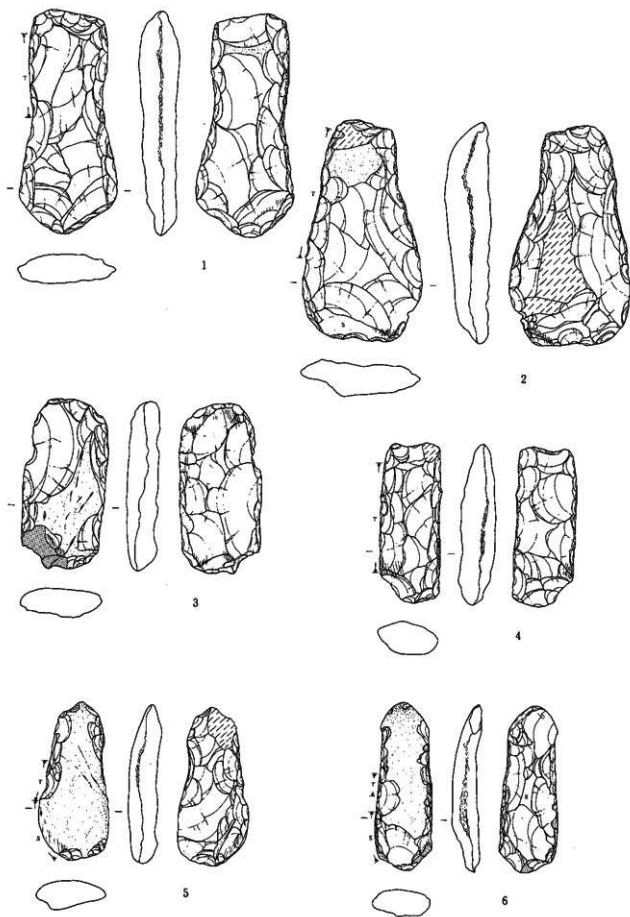
0 10 cm



第5圖 遺構外出土遺物。SB04、SB05、SB08、SB01 出土石器
 (1・2 遺構外、3・4 SB05、5 SB04、6~8 SB08、9~11 SB01)

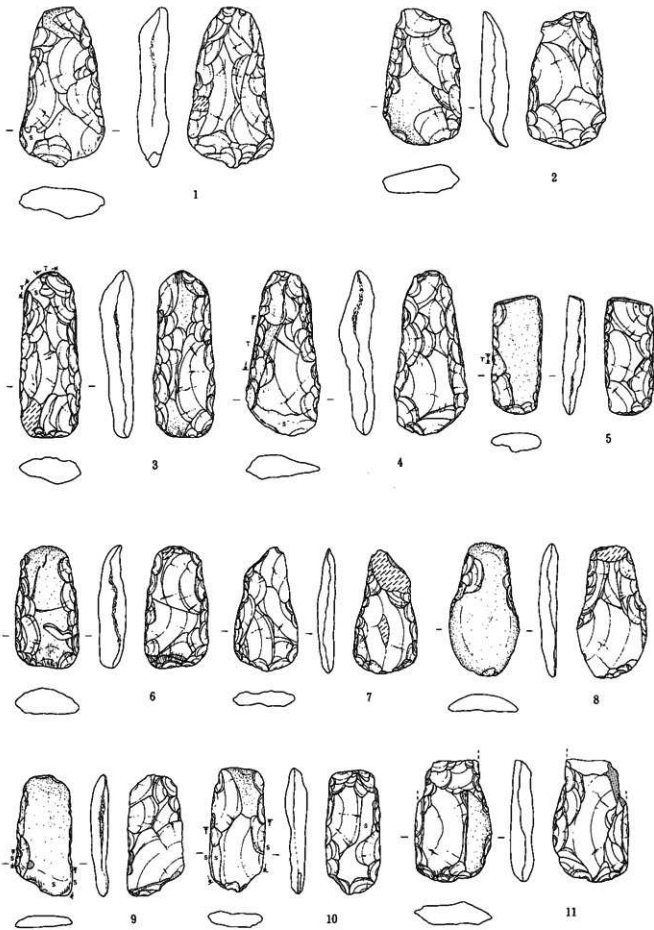


第6圖 SM01, SK21, SD01, SD05, SD07, SD12, BK42P 1出土石器
 (1 SM01, 2 SK21, 3~5 SD01, 6·7 SD05, 8 SD07,
 9 SD12, 10 BK42P 1)



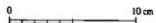
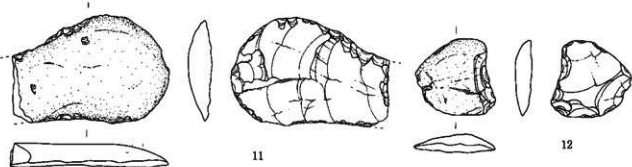
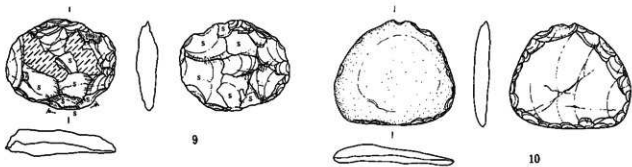
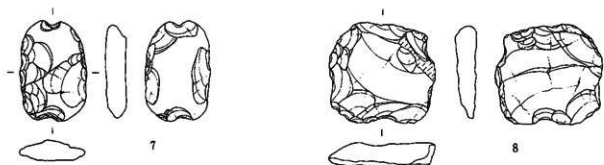
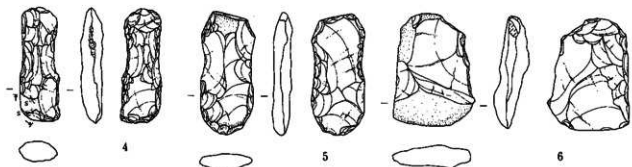
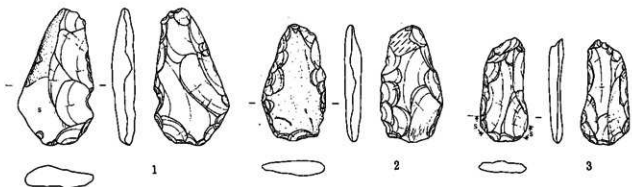
0 10 cm

第7圖 遺構外出土石器(1)

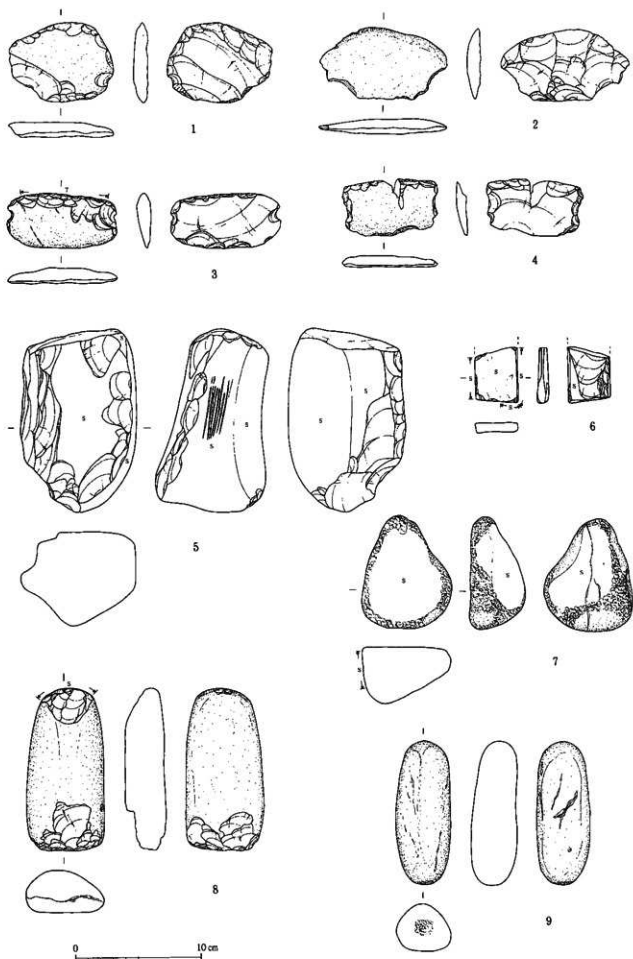


第8圖 遺構外出土石器(2)

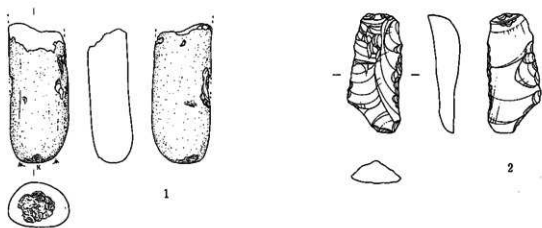
0 10 cm



第9圖 遼構外出土石器(3)



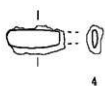
第10圖 遼東外出土石器(4)



0 10 cm



0 3 cm



4



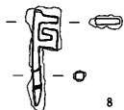
5



6



7



8

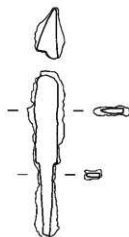


9

10



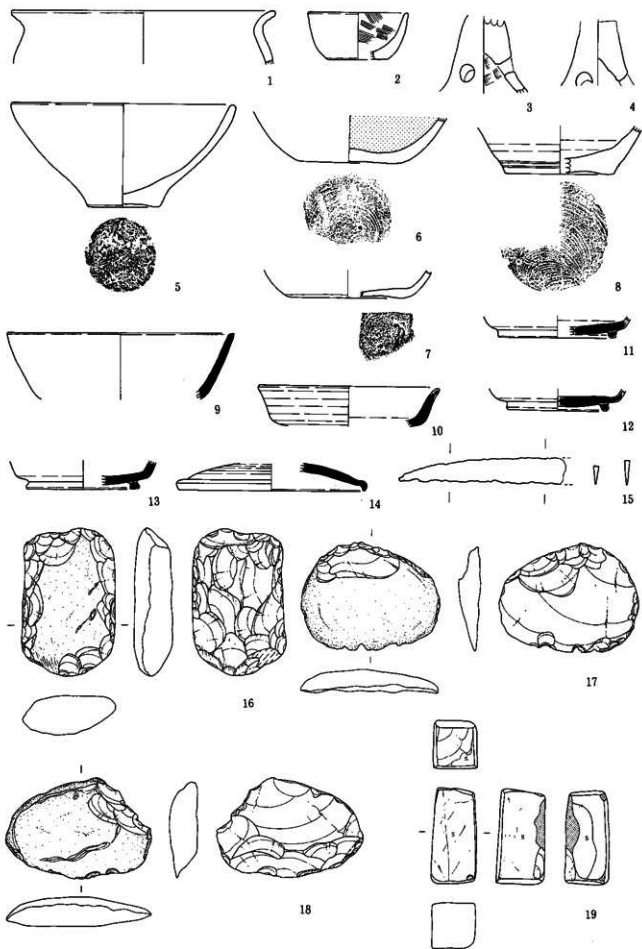
11



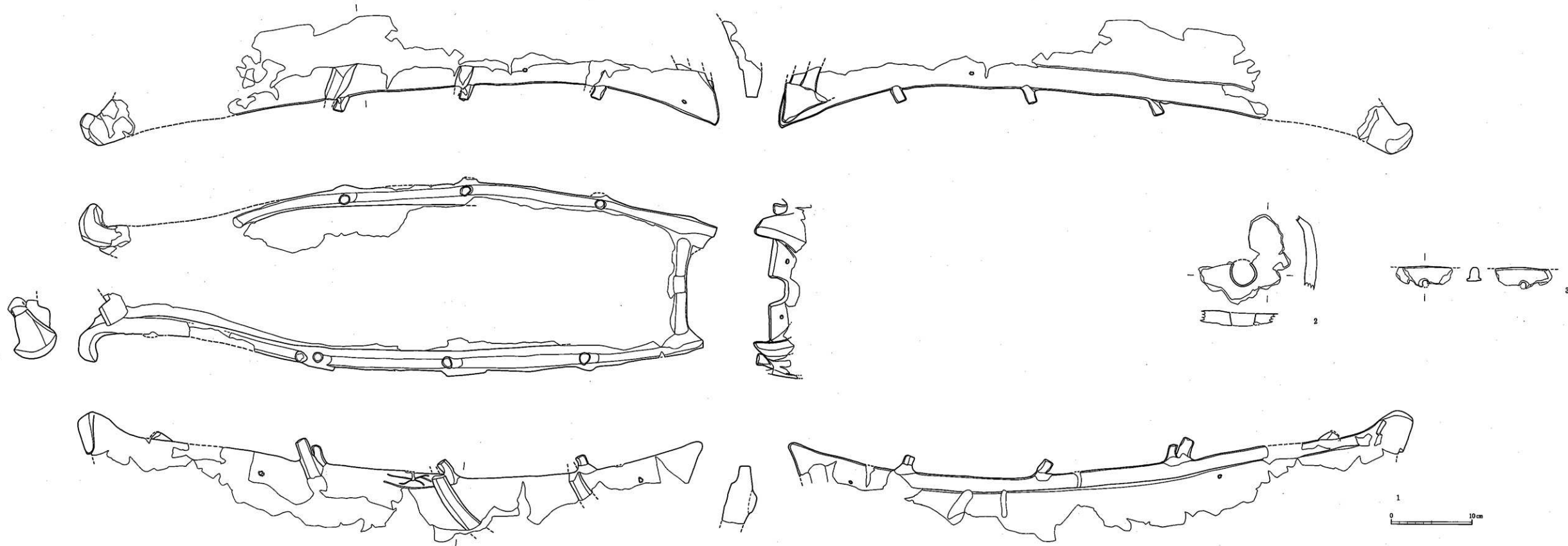
12

0 10 cm

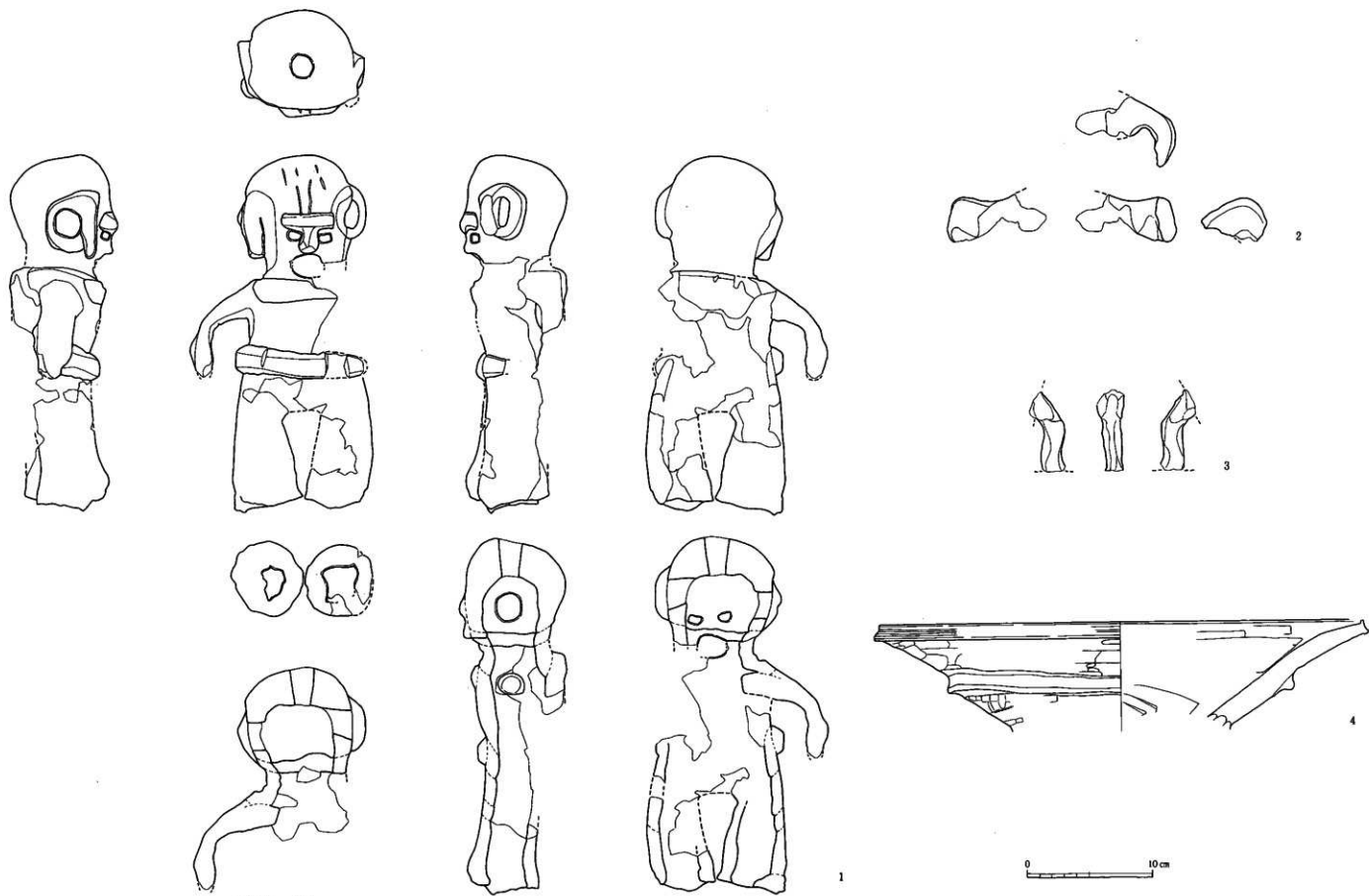
第11圖 遺構外出土石器(5)、S B09、S X01、S X03、AW39P1、AR35P1、遺構外出土鉄製品
(1~3-12 遺構外、4-5 S B09、6~8 S X01、9 S X03、10 AW39P1、11 AR35P1)



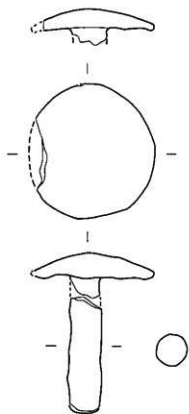
第12図 大荒神の塚古墳 出土遺物



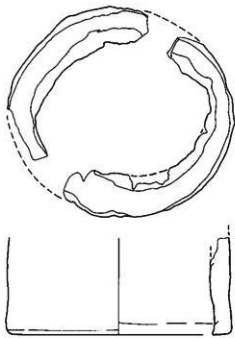
第13圖 船形埴輪



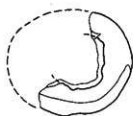
第14图 人物



1



2



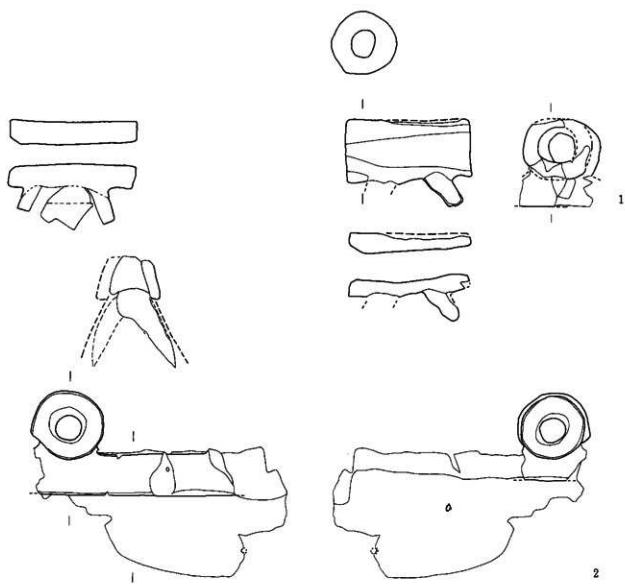
3



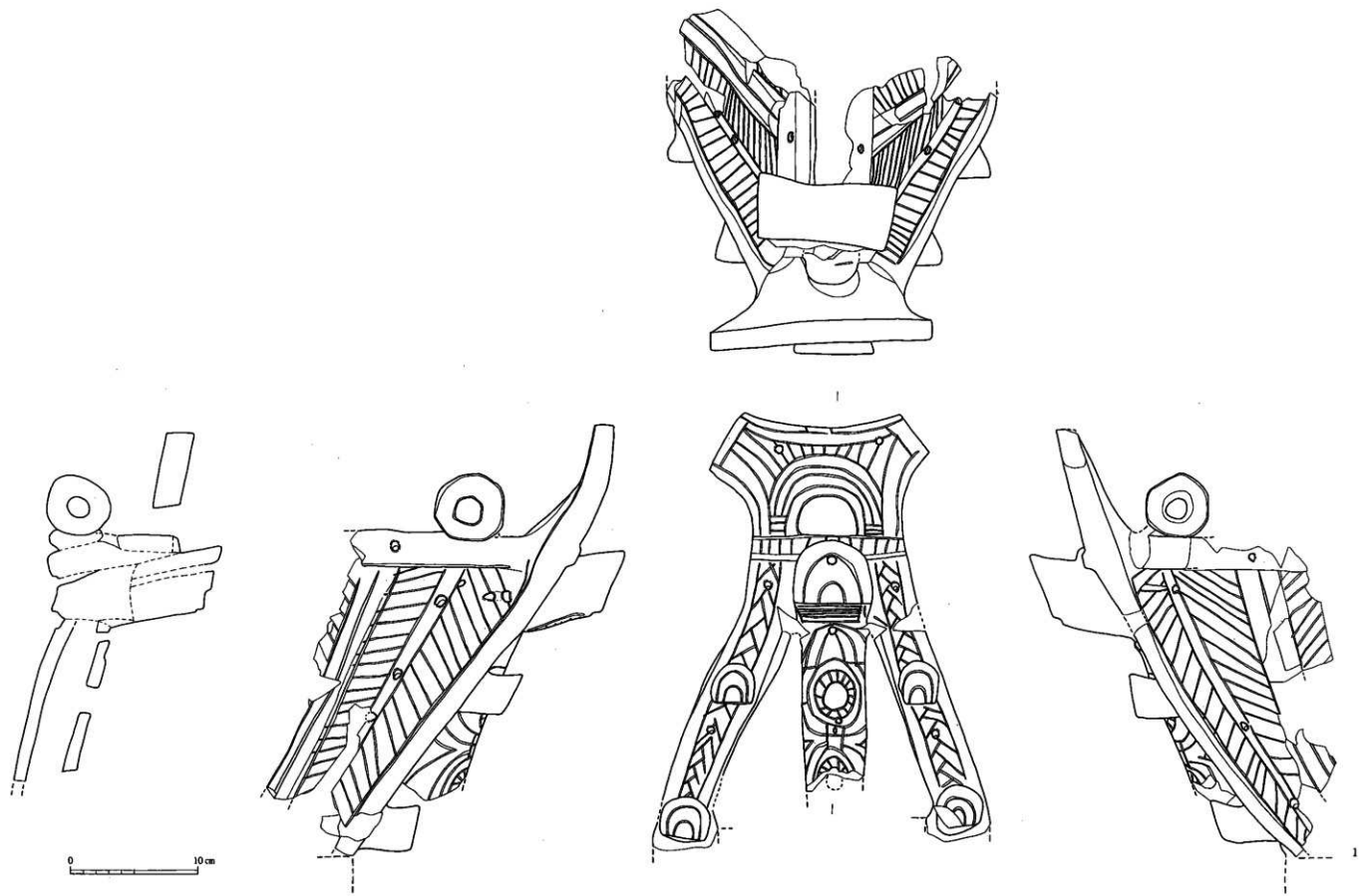
4



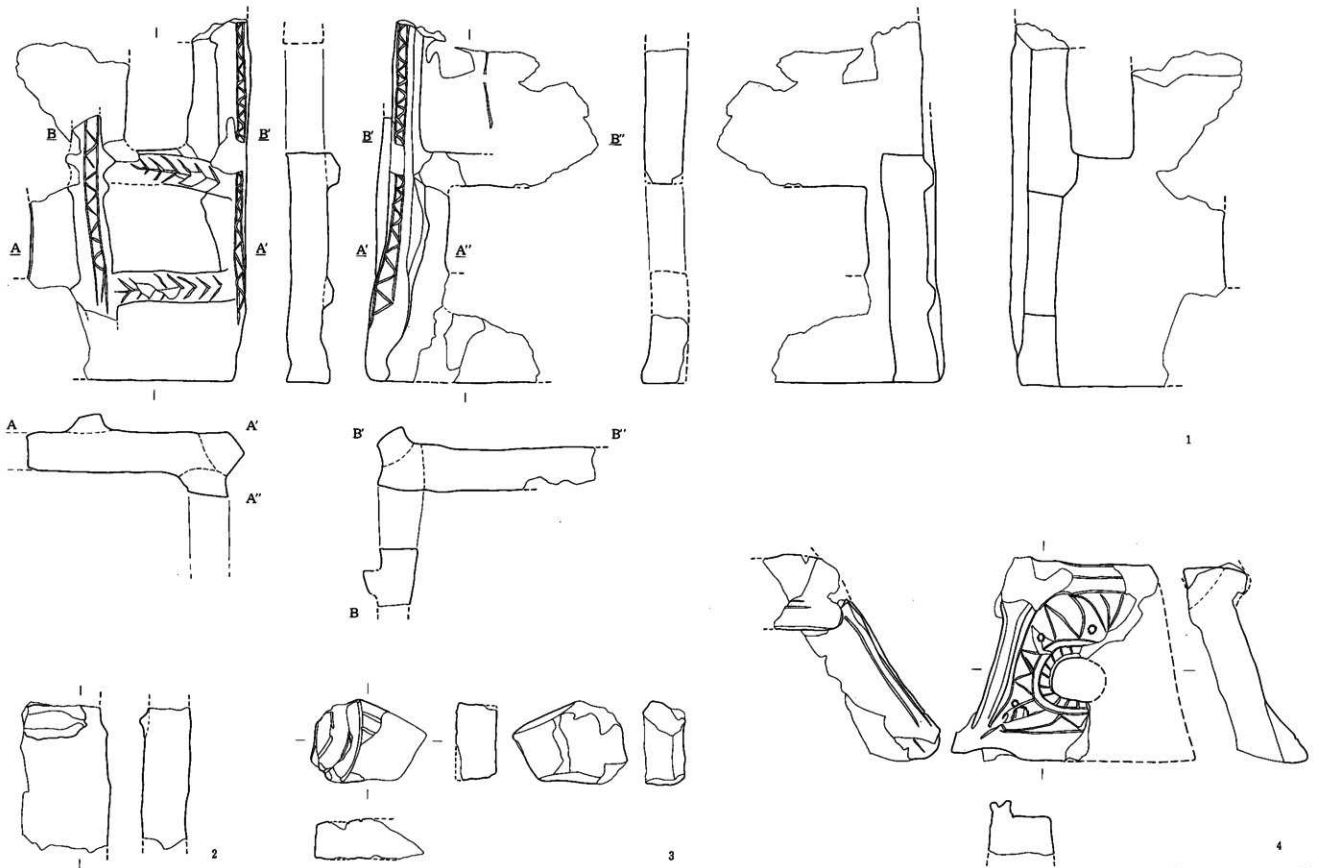
第15圖 かさ状製品・台



第16回 家形埴輪 1 (1)

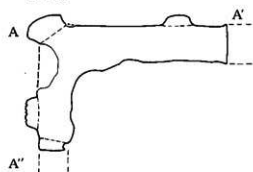
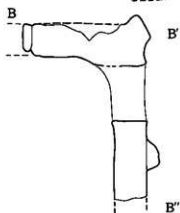
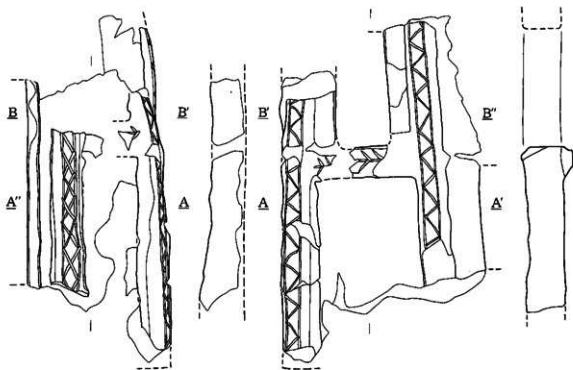


第17图 冢形埴輪 1 (2)

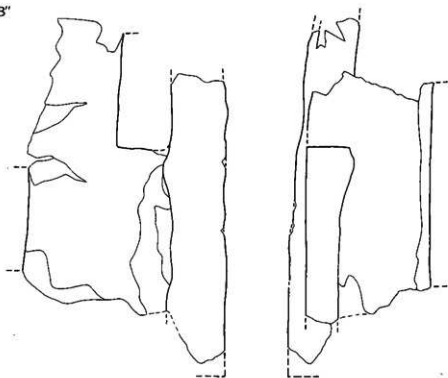


第18回 家形埴輪 1 (3)

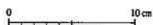
0 10cm



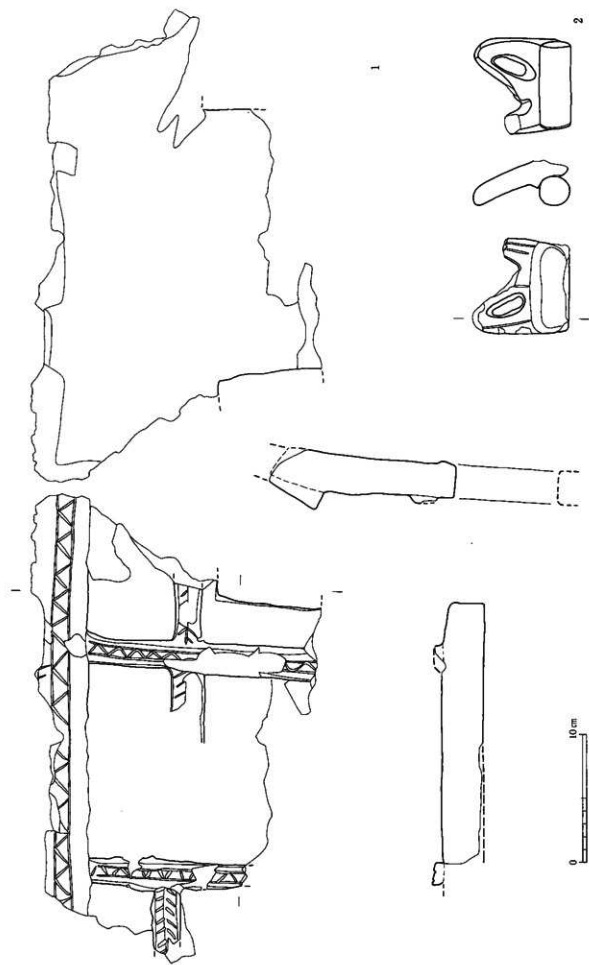
1



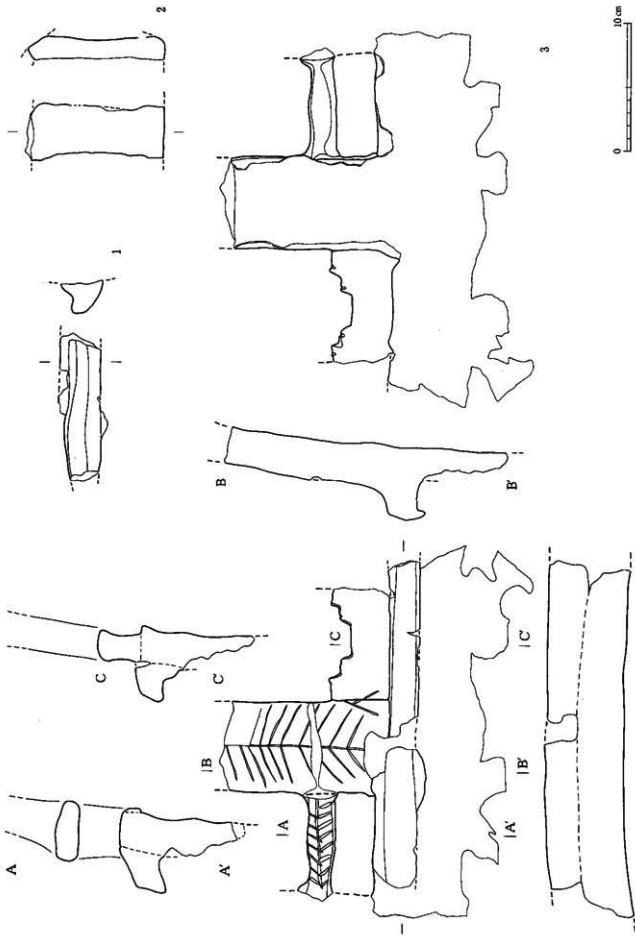
2



第19圖 家形罐輪 1 (4)



第20圖 家形埴輪 1 (5)・家形埴輪 3



第21圖 家形短劍 2





殿村遺跡 遠景



遺構分布状況



南半全景（南より）



同（東より）



北半全景（東より）



S B 03



S B 04



S B 05



S B 08

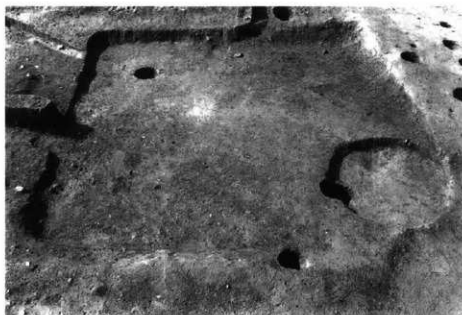


S B 09



S M 01

S B 01



同土層堆積状況



同遺物出土状況



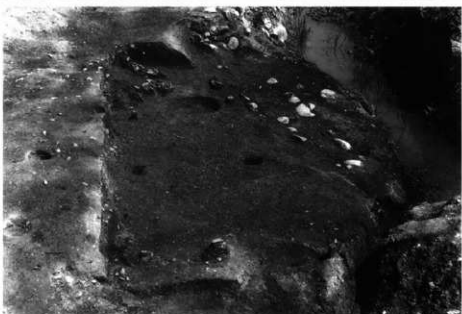


S B01遺物出土状況

S B07

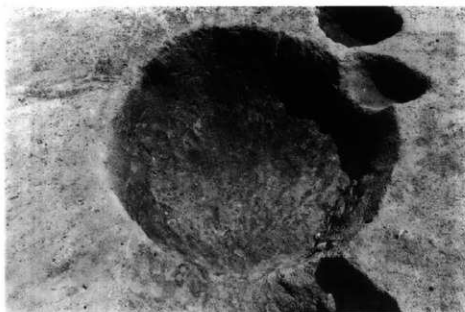


同遺物出土状況



同上

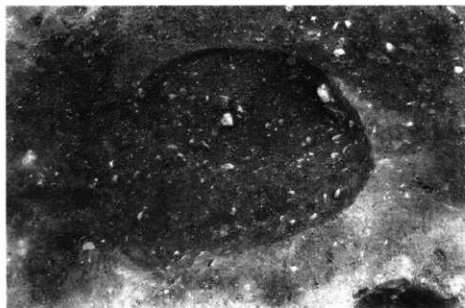




S K 04



S K 05



S K 08

S K 09



S K 10

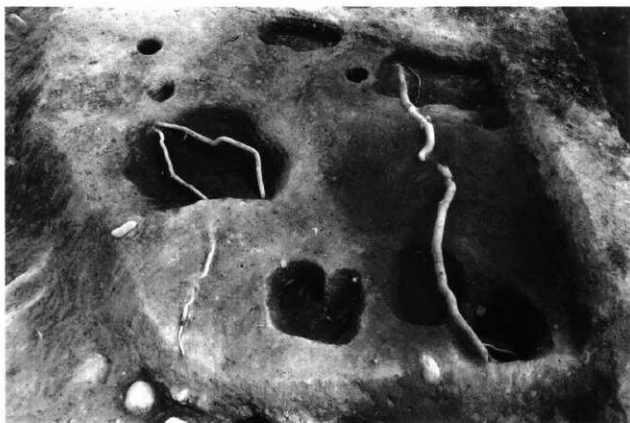


S K 21





S D05



S X01



S X01-1・2



S 101



大荒神の塚古墳
(南より)



大荒神の塚古墳(東より)



同石積状況



同3トレンチ

大荒神の塚古墳
墓石転落状況



同周溝 (西より)



同周溝 (北東より)





重機作業風景



発掘作業風景



S B01 調査風景



S B06



S B03



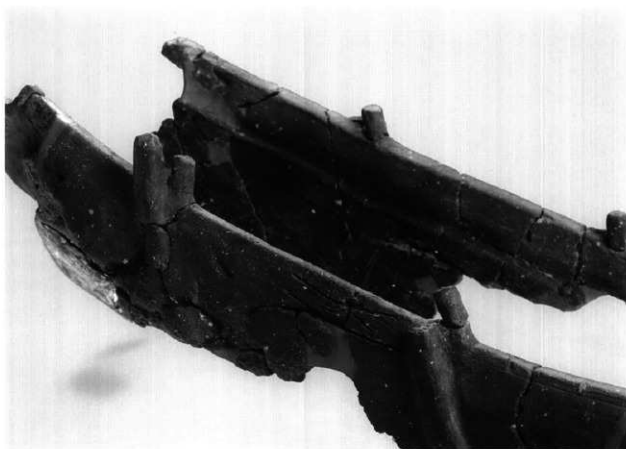
S B 04



S B 05



S B 08



船形埴輪



船形埴輪 船底部 かさ状製品



同 台部



人物

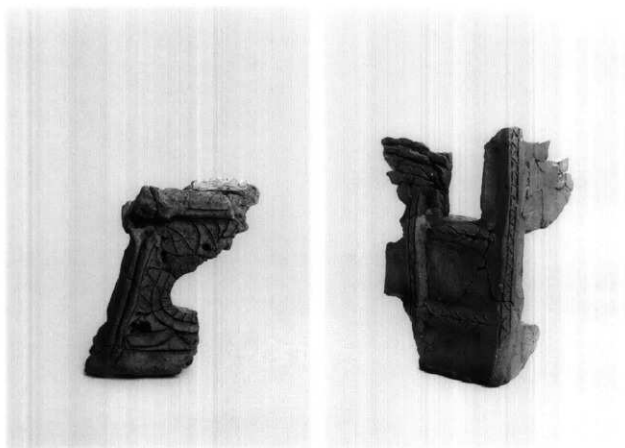
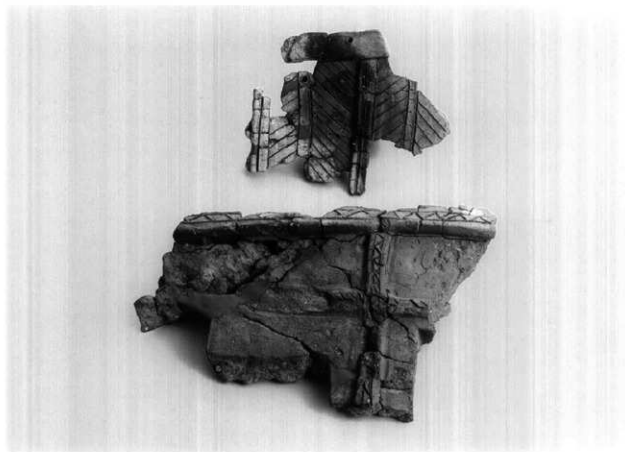


家形埴輪 1



家形埴輪 1





家形埴輪 1



家形埴輪 1



朝顔形埴輪



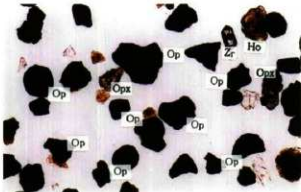
家形埴輪 2



S X01



遺構外



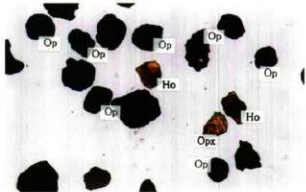
1. 仮試料No.1 殿村遺跡



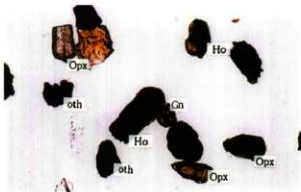
2. 仮試料No.6 正清寺古墳



3. 仮試料No.7 塚山古墳



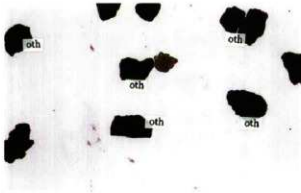
4. 仮試料No.9 御猿堂古墳



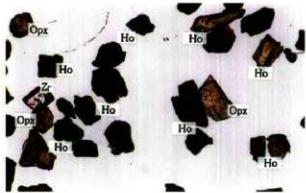
5. 仮試料No.22 妙前大塚古墳



6. 仮試料No.32 高岡4号古墳



7. 仮試料No.42 金井原瓦窯址



8. 仮試料No.46 改善寺境内遺跡

Opx: 斜方輝石, Cpx: 単斜輝石, Ho: 角閃石, Gn: ザクロ石, Zr: ジルコン,
Op: 不透明鉱物, Oth: その他.

報 告 書 抄 録

ふりがな	とのむらいせき おおこうじんのつかこふん							
書名	殿村遺跡・大荒神の塚古墳							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小林正春・馬場保之・片山祐介							
編集機関	飯田市教育委員会							
所在地	〒395-0002 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 TEL0265-53-4545							
発行年月日	平成15年3月末日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
殿村遺跡 大荒神の塚古墳	飯田市川路5区	20205	412	36° 26' 45"	137° 48' 55"	平成12年 4月17日 ～ 9月4日	1,630 ㎡	天竜川治水対策事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
殿村遺跡	集落址	縄文時代 前期 弥生時代 中期 後期 古墳時代 前～ 後期 近世	竪穴住居址 6棟 竪穴 2基 円形周溝墓 1基 土坑 29基 集石址 2基 溝址・溝状址 11条 鍛冶関連遺構 1	縄文土器 石器 弥生土器 石器 土師器 船形埴輪 家形埴輪 朝顔形埴輪 円筒埴輪 陶磁器 埴壇		弥生時代中期・古墳時代前期の集落址の一面が調査された。 2基の竪穴からは、準構造船をかたどりの人物が乗ると考えられる船形埴輪、棟持柱をもち華麗な装飾が施された家形埴輪等が出土し、何らかの祭祀が行われた場と考えられる。埴輪類は6世紀前半に位置づけと考えられる。		
大荒神の塚古墳	古墳	古墳時代	古墳 1基	土師器 須恵器		周溝の一部が調査され、内部に葺石の転落が確認された。		

とのむらいせき
殿村遺跡
わおこうじんつかこ
大荒神の塚古墳

平成15年3月発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145番地
飯田市教育委員会

印刷 龍共印刷株式会社
